

令和4(2022)年度

市立函館博物館 研究紀要

第33号

関根 達人・中村 和之・三宅 俊彦・奥野 進	
錢を指標とした伝世タマサイの編年試案	－ 1 －
奥野 進	学術調査と連携した博物館活動の展開
	－ 地域博物館での成果還元型事業の一例 －
内田 彩葉	＜資料紹介＞ The Illustrated London News
	－57－
山田 裕輝	＜資料紹介＞ 米人渡来之図
	－73－

錢を指標とした伝世タマサイの編年試案

関根 達人・中村 和之・三宅 俊彦・奥野 進

1. 研究の目的と問題の所在

北太平洋の先住民は、交易により中国・日本・ロシア、さらには遠くヨーロッパや中東で作られたガラス玉を入手し、首飾りや耳飾りに用いたり、衣服などに縫い付けたりした（大塚編 2001）。彼らは遠く海を越えてもたらされた神秘的なガラス玉に高い価値を見だし、時に宗教儀礼に結びつくユニークな玉文化を生み出した。ガラス玉は、価値観の異なる「未開」と「文明」が接触したことを示す重要な証であり、玉にあげられた孔を通して北太平洋を舞台とする国家と民族の歴史が垣間見える（関根 2008a）。

アイヌの物質文化を特徴づけるものでありながら、基本的にアイヌ文化圏以外の地で作られ運びこまれたもののひとつにガラス玉がある。自らの営みを文字や絵画に残すことの無かったアイヌの歴史・文化研究には出土資料の分析が不可欠であり、ガラス玉も出土資料を対象に、材質と製作技法解明を目的とした自然科学的分析が進められているが、型式学的検討が十分行われていないため、物質文化研究の基本である編年が未整備となっている。

アイヌのガラス玉について初めて本格的に取り上げたのは、図案家でありアイヌ資料の優れた収集家でもあった杉山寿栄男である（杉山 1936）。杉山は「アイヌ玉」の基本的な分類を行うとともに、その生産と流通に関する考察を行った。杉山の研究は、古代のガラス玉から南方台湾のガラス玉まで多くの実物資料に関する知見に裏付けら

れており、アイヌのガラス玉研究の基礎が作られた。伝世したガラス玉のなかに江戸末期から明治前半代に江戸・東京で製作されたガラス玉が多数存在することを指摘し、北方渡来という先入観にとらわれがちだったアイヌのガラス玉に関して再考を促した点や、一連の玉飾りのなかには新古さまざまな時代のガラス玉が混在しているとした点も注目される。

江戸時代、アイヌ向けのガラス玉が江戸で作られていたことは、松井恒幸が文献により論証している（松井 1977）。松井は、文献に「日本細工のびいどろ玉」が最初に登場するのは宗谷場所の交易に当たっていた串原正峯が寛政5年（1793）に著した『夷諺俗話』とし、そのころから次第に本州で作られたガラス玉が北から入ってくるガラス玉に置き換わる形で増加していったと推察した。

文献に残る記録と民具の両面からタマサイ・シトキを扱った研究としては、児玉作左衛門・とみ夫妻の論考がある。児玉作左衛門は、アイヌ服飾の研究のなかで首飾りについて触れ、樺太アイヌの首飾りは江戸初期（元和以前）に遡るが、北海道で普及するようになるのは江戸末期になってからであるとした（児玉 1965）。児玉とみは、夫の作左衛門が昭和4年（1929）頃に樺太東海岸で蒐集した首飾りを紹介し、北海道と樺太の首飾りを比較するとともに、北海道アイヌの首飾りにみられるシトキの種類と特徴について検討した（児玉1967・69）。

杉山が指摘するように、伝世したタマサ

イには生産地・製作年代の異なる様々なガラス玉が組み合わされている場合も多く、それを基準にガラス玉の編年を組み立てることは非常に困難と思われる。それはひとえにガラス玉が他のものに比較して長期間伝世しやすいがためであり、そのことは伝世品のみならず出土品についても基本的には当てはまる。しかし出土品の場合、機能を失いそれが遺棄ないし廃棄された時期さえ特定できれば、その遺物の製作年代は、少なくともそれ以前であることを証明できる。従って、アイヌのガラス玉、ひいてはタマサイの編年を構築するためには、出土品により古いものから順にその特徴を確認する作業が不可欠となる。

このような視点に立ち、関根はアイヌ墓に副葬されたタマサイや戦国期に和人勢力の中心地であった渡島半島上ノ国町勝山館とその周辺から出土した16・17世紀のガラス玉と、北海道博物館・市立函館博物館(函館市北方民族資料館に収蔵)・苫小牧市美術博物館に所蔵されている伝世タマサイを比較し、ガラス玉の変遷の概要を明らかにした(関根 2008b)。

その際、伝世したタマサイについては、後世にガラス玉の入れ替えが行われた可能性が否定できないと考え、使われているガラス玉によるタマサイの年代比定を諦め、18・19世紀として一括して扱った。しかし伝世品のなかに17世紀以前に遡るタマサイは存在しないのだろうか？ 出土品と違って伝世タマサイの編年は本当に不可能なのだろうか？ こうした疑問はこれまで解決できないままくすぶり続けてきた。

関根と中村は、2010年から関根を代表とする科研「中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究」に関連し、サハリン州立郷土誌博物館やサハリン大学との研究協力協定のもと、サハリン出土の日本製品の調査・研究を行ってきた(関根 2014)。2017

年からは中村を代表とする科研「サハリンアイヌの総合的研究」に基づき、サハリンで樺太アイヌの資料調査を行う一方、中村は竹内孝、中井泉、田村朋美等とともに北海道内各地から出土しているガラス玉の理化学的分析を進めてきた(赤石・越田・中村・竹内 2013、同 2014、石橋・中村・竹内・越田 2013、中村・森岡・竹内 2013、中村・竹内・越田 2013、石川・越田・竹内・中村 2014、越田・坂梨・竹内・中村 2014、越田・後藤・竹内・中村 2014、越田・高橋・竹内・中村 2014、石橋・越田・高橋・竹内・中村 2015、越田・乾・竹内・中村・高橋 2015、柳瀬・松崎・澤村・中村・森岡・中井 2015、柳瀬・澤村・中村・森岡・中井 2015、大賀・田村・稲垣・中村 2017、馬場・柳瀬・今井・中井・小川・越田・中村 2017、新井・馬場・中井・中村・塚田 2018、佐藤・竹内・中村 2018、田村・青野・中村 2018)。

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の流行によりこれまで続けてきたサハリンでの資料調査が中断され、調査対象を日本国内に残る樺太アイヌ資料に変更せざるを得ない状況が生まれた。そうしたなか最初に検討したのが、市立函館博物館の児玉コレクションと馬場コレクションであった。

関根は両コレクションを調査するなかで、ガラス玉と銭を併用したタマサイについて、使われている銭の種類から製作年代や製作地を推定できる可能性に気がついた。確かに伝世タマサイ全体から見れば、銭が使われたものは極めて少ない。しかし最新銭の初鋳年からタマサイの製作年の上限を導きだし、タマサイを年代順に並べることで、タマサイやガラス玉の型式編年が構築できれば、銭が使われていないタマサイについても年代比定が可能となる。

本稿では、伝世タマサイについて銭を手がかりとして製作年代を推定した上で、タ

マサイの連の型式や使われているシトキやガラス玉等の編年を試みる。

タマサイの調査は、中村が所蔵先と交渉の上、主に関根と中村が行い、三宅はタマサイに使われている錢について調査を行った。また市立函館博物館の所蔵品については、奥野が該当資料を抽出の上、写真撮影を行った。本稿の文章・図表は全て関根が執筆・作成の上、中村、三宅、奥野が内容確認を行った。

2. 資料の概要と調査方法

調査したのは市立函館博物館の児玉コレクション18点（市立函館博物館 1987）、馬場コレクション1点（市立函館博物館 1978）、札幌国際大学の平野コレクション3点、苫小牧市美術博物館所蔵品3点（苫小牧市博物館 1988）、旭川市博物館所蔵品1点（旭川市博物館 1999）、釧路市立博物館所蔵品1点の計27点である（表1）。

このうち収集地がわかるのは、市立函館博物館に所蔵されている北海道鶴川（資料番号1）と旧樺太東海岸栄浜〈現ロシア連邦サハリン州スタロドゥプスコエ〉（7）、苫小牧市美術博物館所蔵の北海道平取（23・24）、北海道静内（25）の5点のみで、収集年代は市立函館博物館の2点が1930年代、苫小牧市美術博物館の3点は戦後である。

タマサイに使われている紐は、木綿が13点と最も多く、麻紐が8点とこれに次ぎ、他に樹皮2点、皮紐1点、樹皮と木綿紐1点、畳紐1点、植物繊維1点である（表1）。木綿紐・麻紐・畳紐は収集後に新たに取り替えられた可能性が高いが、樹皮（資料番号3・5・10）、獣皮（7）、植物繊維（13）はタマサイが使われていた当時のオリジナルな状態を示すものとして注目される。

タマサイにはガラス玉や錢のほか、金属製玉（資料番号2・11・14・15・21）やニ

ンカリ（23・24）、木製のソロバン玉（1）、象牙玉（9）、金属製ボタン（19）、猛禽類の爪・真珠製玉・毛皮・木製管玉・ジャスパー製玉（26）などが用いられている。このうち、表面に羽を広げた鷲と盾を浮き彫りし、裏面に「SCOBILE MF'G CO・WATER BURY」と刻まれている金属製のボタンは、1854～1875年に米国コネチカット州ウォーターベリーにあるスコビル社が製造した陸軍将校用の軍服ボタンである。同じものが幕末のアイヌの貝塚である苫小牧市の弁天貝塚からも発見されている。いずれも南北戦争で使われた軍服が、安政の箱館開港により米国から古着として輸入されたのち、金ボタンを入手したアイヌがタマサイの部材に転用したと考えられる（関根 2016）。

なお、収集地に関する情報が伴わない資料番号26のタマサイは、猛禽類の爪・真珠製玉・アザラシの毛皮・木製管玉・ジャスパー製玉などが用いられていることから旧樺太の収集品と思われる。

調査内容・調査手順は以下の通りである。

- ① タマサイに使われているガラス玉や錢などに付番し、タマサイの写真を印刷したものに番号を記入することで、それらの位置を記録。
- ② 連やシトキの型式と長さ（連を閉じた際の上端から下端までの距離）を記録。
- ③ ガラス玉は大きさ・形・色による分類を行った上で、各類型につき代表的な玉をひとつ選び、高さ（穿孔方向の長さ）と幅（直径）を計測。
- ④ 錢は、錢銘・背文字、外径を記録するとともに、文字のある面を全て写真撮影（ただし紐に余裕がなく錢が密接していたものは厚みや外径未計測）。

表1 調査したタマサイー覧

番号	所蔵先 館蔵番号	資料名称	収集年代	収集者	収集地	長さ cm	型 式	素材					備考	図 番号
								シトキ	ガラス玉	銭	その他	紐		
1	函館市北方民族資料館 700076	シトキウツ タマサイ	1936年頃	馬場 脩	北海道 胆振 鶴川 チン	41.5	Ⅲ	Ⅰ2②B	13種 計55点	48	ソロバン玉 60点	木綿 (交換)	箱館通宝ソロバン玉付 花卉文様シトキ付 パチェラー 愛子旧蔵（「北方民族の旅」P28にパチェラー愛子から 贈られたものとの記載あり） 参考文献：「北方民族の旅」馬場脩 1979年	図17
2	函館市北方民族資料館 H10-0051-07-103	タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	28.0	Ⅱ	—	8種 計76点	21	金属製玉4点	木綿	玉は2連、玉の並びは左右バラバラで不揃い、紐は古く 細い布	図6
3	函館市北方民族資料館 K-H13-0067	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	58.0	Ⅲ	Ⅰ2②A	12種 計179点	82		樹皮	シトキは自製。裏に黒漆に3個所朱漆で描かれた三巴 文のある蓋の転用。3連で玉は全体に古い。うなじ部 分に三角形に加工した鹿角と透明玉1つ有	図4
4	函館市北方民族資料館 K-H13-0069	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	51.0	Ⅲ	Ⅰ2①A	23種 計296点	66		麻	シトキ自製、銀板には穿孔多く転用と思われる。玉は 銭に挟まれた3つ×2列の玉は表面風化が激しく穴が大 きく摩滅など、古い玉である。3連で、ひとつ六角形 の玉使用。全体に古く良い玉を使用している	図2
5	函館市北方民族資料館 K-H13-0071	シトキウツ タマサイ (イヨマンテ用)	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	53.2	Ⅱ	Ⅰ2②B	10種 計112点	75		樹皮	イオマンテ・雌クマ用、シトキ2個（大：流用品、円形 の黒い塗り蓋に七曜文＋九曜文？の紙で留める）、 （小：木製の黒塗りに真鍮製金具）	図13
6	函館市北方民族資料館 K-H13-0074	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	49.0	Ⅲ'	Ⅱ(引手 金具)	11種 計230点	40		木綿	シトキの外形・文様は木瓜、地文は葉平菱、玉は小粒 が多く3連で、古銭2個所、玉2個所で5段に連結	図10
7	函館市北方民族資料館 K-H13-0084	イムフサイ	1935年	児玉 作左衛門	樺太 東海岸 栄浜	33.0	Ⅰ	—	9種 計35点	18		獣皮	玉と玉の間に寛永通宝や中国北宋時代の祥符元宝など の古銭が18枚連なっている。赤や緑の透き通ったガラ ス玉は樺太アイヌ特有の色調である。皮紐で連ねてあ る。玉数35個。K-H13-0095に類似 参考文献：児玉とみ 1967「樺太アイヌの首飾りにつ いて」樺太第5号	図16
8	函館市北方民族資料館 K-H13-0092	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	54.0	Ⅲ	Ⅰ1A	11種 計204点	104		麻	シトキは自製、金具は相当破損している様子。玉は3 連、古い玉を使用。トンボ玉2点	図1
9	函館市北方民族資料館 K-H13-0093	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	55.0	Ⅳ	Ⅰ2①A	18種 計330点	115	象牙玉1点	麻	シトキは自製、中央は星（8条）と小さな三巴文があ り、周囲に8つの鋸と中心部の金具で九曜星文を表 現。玉は4連で古い玉、1点四角形の玉有。うなじに象 牙の玉1点を使用	図3
10	函館市北方民族資料館 K-H13-0094	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	45.0	Ⅱ	Ⅰ2①B	11種 計84点	61		樹皮・ 木綿	シトキは自製。裏には三巴文を中心に配した彫刻有。 玉は一部2連	図5
11	函館市北方民族資料館 K-H13-0095	イムフサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	39.5	Ⅰ	—	19種 計44点	60	金属(鉛)玉1点	畳紐 (交換)	古銭を3枚ずつ20箇所、親玉が鉛玉、K-H13-0084に類 似、トンボ玉有	図18
12	函館市北方民族資料館 K-H13-0101	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	47.5	Ⅳ	Ⅰ2②B	20種 計242点	63		木綿 (交換)	シトキは自製。シトキ中心の金具に三巴文。玉4連。 一部トンボ玉使用。玉は組み替えの可能性有	図9
13	函館市北方民族資料館 K-H13-0114	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	53.5	Ⅰ	Ⅰ2②B	11種 計48点	50		植物繊維	シトキは自製。裏に模様彫刻有。古銭を挟んだ玉の半 分は比較的大型の青玉	図11
14	函館市北方民族資料館 K-H13-0197	シトキウツ タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	49.5	Ⅲ	Ⅰ4B	9種 計191点	1	金属(鉛)玉2点	麻摺り 紐	シトキ：シカと紅葉の線描き、玉は3連、小振りで粒 ぞろい、ナツメ玉一つ、後ろに鉛玉2点、古銭1点	図14
15	函館市北方民族資料館 K-H13-0212	タマサイ	1929～ 1970年	児玉 作左衛門	不明	41.0	Ⅱ	—	10種 計125点	4	金属(鉛)玉1点	木綿糸	玉は2連、キズ玉多い、紐は一部白黒の摺り紐、結び 目に特徴あり	図7
16	函館市北方民族資料館 K-II-700628	シトキウツ タマサイ	1970年以 前	児玉 作左衛門	不明	38.9	Ⅱ	Ⅰ2②A	7種 計108点	25		木綿 (交換)	シトキは自製。木製の板に金属を被せたもの	図8
17	函館市北方民族資料館 K-II-700667	シトキウツ タマサイ	1970年以 前	児玉 作左衛門	不明	45.2	Ⅰ	Ⅰ4A	13種 計46点	30		木綿 (交換)	中央に花卉文周囲に草文のシトキ付。トンボ玉有	図15
18	函館市北方民族資料館 K-II-700675	シトキウツ タマサイ	1970年以 前	児玉 作左衛門	不明	42.0	Ⅰ	Ⅰ3B	21種 計40点	19		木綿 (交換)	花卉文のシトキ付。トンボ玉有	図12
19	函館市北方民族資料館 K-II-700689	シトキウツ タマサイ	1970年以 前	児玉 作左衛門	不明	50.6	Ⅱ'	Ⅰ4B	27種 計90点	11	金属製ボタン 2点	木綿 (交換)	金ボタンは米国コネチカット州スコビル社で1854～ 1875年の間に製造されたもの。鳳凰図のシトキ付。ト ンボ玉が多数使用されている	図19
20	札幌国際大学40	シトキウツ タマサイ	不明	平野利	不明	49.7	Ⅰ	Ⅰ3A	16種 計45点	12		麻紐	シトキ真鍮製中空（三日月形モレウ文様・七ヶ子） 吉田利雄 1973『ユーカラの世界』19頁にこのタマサ イのシトキと同一のシトキが使われたタマサイが掲載 されているが、ガラス玉は異なっており、写真撮影以 降に玉の入れ替えが行われたことが判明する	図24
21	札幌国際大学42	シトキウツ タマサイ	不明	平野利	不明	52.5	Ⅰ	Ⅰ4②A	10種 計52点	14	金属製中空玉 2点	麻紐	シトキ銅製？（薬罐蓋転用？）に花卉打ち出しの上、金 メッキした小円板8枚鋳留め）、金属の中空透かし丸 玉2点は中国製帽子の頭頂部の装飾品か？	図25
22	札幌国際大学47	シトキウツ タマサイ	不明	平野利	不明	50.5	Ⅰ	Ⅰ3②A	11種 計86点	29		麻紐	シトキ銅製（唐草文陰刻）	図26
23	苫小牧市美術博物館78 KK76(492)	シトキウツ タマサイ	1981年以 前	川上豊三	平取	53.5	Ⅲ'	Ⅰ1②A	58種 計198点	26	ニンカリ2点	木綿	シトキ中央銅製縁板花形鋳留め 周囲12ヶ所小円板象 嵌（脱落） 絵銭2点 崇寧通寶大銭2点 ガラス玉56 種197点の内2種4点はニンカリに使われている	図21
24	苫小牧市美術博物館81 KK77(493)	シトキウツ タマサイ	1981年以 前	川上豊三	平取	44.0	Ⅲ'	Ⅰ1②A	22種 計169点	36	ニンカリ2点	麻紐	シトキ木製円板に大小銀円板象嵌 ガラス玉22種169 点の内2種4点はニンカリに使われている シトキの背面に「56.2.14 札幌 古求堂」のシール	図20
25	苫小牧市美術博物館99 KK37(453)	シトキウツ タマサイ	1954年以 前	山野成之	静内	64.0	Ⅰ	Ⅰ3A	26種 計62点	60		木綿 (交換)	シトキ真鍮製中空（鑑形・中央花菱文） シトキの下 端部にタバコ入れの鎖金具付き	図22
26	旭川市博物館7704	タマサイ	2006年以 前	相川正志	不明	47.0	Ⅱ'	—	43種 計145点	24	猛禽類爪2点 真鍮製鈴4点 毛皮2枚 木製 管玉12点 ジャ スパー丸玉1点	木綿 (交換)	猛禽類の爪の付け根にアザラシの毛皮を巻き紐に連ね ている 銭と銭の間に銭を連ねたものを模した木製の管 玉を挟んでいる 真鍮製の鈴・アザラシの毛皮・猛禽類の爪・清朝銭が 使用されていることからカラフトアイヌ資料の可能性 が高い	図23
27	釧路市立博物館53261	シトキウツ タマサイ	不明	不明	不明	61.0	Ⅲ'	Ⅱ(柄鏡)	計19種 281点	13		木綿 (交換)	シトキは藤原光政路の柄鏡の柄を切断し、上下逆さま にし2カ所穿孔	図27

3. タマサイに使われている銭の種類と、 タマサイの時期区分

(1) タマサイに使われている銭の種類

調査したタマサイに使われていた銭は、最大115枚（資料番号9）、最少1枚（14）で、平均約41枚である（表2）。

中国銭は唐の開元通寶（621年初鑄）から清の道光通寶（1820年初鑄）まで、朝鮮銭は李朝の常平通寶（1633年初鑄）、日本銭は寛永通寶、仙臺通寶（1784年初鑄）、箱館通寶（1856年初鑄）、文久永寶（1863年初鑄）が確認できたほか、16世紀末～17世紀前半頃に薩摩で鑄造されたと考えられている加治木銭の洪武通寶（資料番号11）や絵銭（猿曳き駒：資料番号25）もみられたが、いわゆるリング銭の類いは認められなかった。

寛永通寶は、書体と素材により古寛永（1636年初鑄）と新寛永（銅銭）、新寛永（鉄銭：1738年初鑄）、新寛永（真鍮四文銭：1768年）に大別した後、新寛永（銅銭）については背文字に基づき細分した。背文字が確認できた新寛永には、文銭（背「文」：1668年初鑄）、佐渡銭（背「佐」：1717年初鑄）、長崎一之瀬銭（背「一」：1740年初鑄）、足尾銭（背「足」：1741年初鑄）、高津銭（背「元」：1741年初鑄）、長崎銭（背「長」：1767年初鑄）、石巻鉄銭（背「千」：1768年初鑄）などがある。

銭の種類を意識して選んで用いたと考えられるのが、資料番号1（図17）、資料番号17（図15）、資料番号23（図21）、資料番号25（図22）である。1は48枚中44枚が箱館通寶や仙臺通寶などの地方貨幣を含む鉄銭で占められており、明らかに鉄銭が選ばれている。17には古寛永1枚と常平通寶1枚、新寛永28枚が使われているが、このうち常平通寶と新寛永13枚に背文字が認められる上、新寛永の背文字は全て異なることから、背文字を意識してタマサイに使う

銭を選んだ可能性が極めて高い。23には26枚の寛永通寶が用いられているが、大きめの新寛永真鍮四文銭16枚はシトキの左右に接する位置に集められ各8枚配置されている。25もシトキを挟んで崇寧通寶（大銭）1枚と新寛永真鍮四文銭3枚、崇寧重寶（大銭）1枚と新寛永真鍮四文銭3枚が左右対称に配置されている。

清朝銭は資料番号7（図16）、資料番号11（図18）、資料番号26（図23）に見られた。このうち7は1935年に旧樺太東海岸の栄浜で収集されたものであり、11と26は収集場所に関するデータは残されていないものの、26は前述の通り、猛禽類の爪・真珠製玉・アザラシの毛皮・木製管玉・ジャスパー製玉などが用いられていることから旧樺太の収集品と思われる。北海道と異なり、18世紀後半～19世紀のサハリンでは山丹交易によりもたらされた清朝銭がある程度流通しており、樺太アイヌが入手する機会があったといえよう。

(2) 銭によるタマサイの時期区分

本稿では最新銭を指標として、次の通りタマサイの時期区分を行った。

- I 期：17世紀後半（古寛永を最新銭とする）
- II 期：18～19世紀（新寛永を最新銭とする）
 - II 期は以下の2時期に細分した。
 - II a 期：18世紀（新寛永を最新銭とするもののうち、宋銭や明銭を含むもの）
 - II b 期：18世紀後半～19世紀（新寛永を最新銭とするもののうち、足尾銭や高津銭、鉄銭・真鍮四文銭を含むもの）
- III a 期：19世紀（道光通寶を含むもの）
- III b 期：19世紀後半以降（箱館通寶や文久永寶、金ボタンを含むもの）

この区分に従いタマサイの年代推定を行った結果、I 期2点（資料番号4・8）、II a

表2 タマサイに使われている銭と銭から推定したタマサイの年代

タマサイの資料番号 (表1に同じ)			8	4	3	9	22	24	10	2	15	27	13	18	12	16	6	21	5	17	14	23	25	26	7	1	11	19	20	
国 (王朝)	銭名	初鑄年	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	枚数	
中国(唐)	開元通寶 (隸書)	621	4	1	3	1	1											1										1		
中国(北宋)	淳化元寶 (楷書)	990	1	1																										
中国(北宋)	淳化元寶 (草書)	990			1																									
中国(北宋)	至道元寶 (楷書)	995	1				1																					1		
中国(北宋)	至道元寶 (行書)	995		1																										
中国(北宋)	咸平元寶 (楷書)	998		2			1	1																						
中国(北宋)	景德元寶 (楷書)	1004		3	1																									
中国(北宋)	祥符元寶 (楷書)	1008	1	2	2	3																				1				
中国(北宋)	祥符通寶 (楷書)	1008	1	2	2																									
中国(北宋)	天禧通寶 (楷書)	1017		1																										
中国(北宋)	天聖元寶 (篆書)	1023		1	1			1																				1		
中国(北宋)	天聖元寶 (楷書)	1023			1	1													1											
中国(北宋)	明道元寶 (楷書)	1032			1																									
中国(北宋)	景祐元寶 (篆書)	1034																								1				
中国(北宋)	皇宋通寶 (楷書)	1039	1				1	5						1														1		
中国(北宋)	皇宋通寶 (篆書)	1039					2	2																				2		
中国(北宋)	嘉祐元寶 (篆書)	1056		1				2																						
中国(北宋)	嘉祐通寶 (楷書)	1056																1										2		
中国(北宋)	治平元寶 (楷書)	1064						1																						
中国(北宋)	治平元寶 (篆書)	1064			1														1											
中国(北宋)	熙寧元寶 (楷書)	1068		1	1			1											1											
中国(北宋)	熙寧元寶 (篆書)	1068		1	2																									
中国(北宋)	元豐通寶 (行書)	1078	2		3	3	2												1									1		
中国(北宋)	元豐通寶 (篆書)	1078		3																								1		
中国(北宋)	元祐通寶 (行書)	1086			2	2																						3		
中国(北宋)	元祐通寶 (篆書)	1086	2																1									1		
中国(北宋)	紹聖元寶 (行書)	1094			1			1											1						1					
中国(北宋)	元符通寶 (篆書)	1098						1											1											
中国(北宋)	聖宋元寶 (行書)	1101					1	2											1											
中国(北宋)	崇寧通寶 (楷書)	1102																							1					
中国(北宋)	崇寧重寶 (楷書)	1102																							1					
中国(北宋)	大觀通寶 (楷書)	1107		2																										
中国(北宋)	政和通寶 (隸書)	1111			1																									
中国(北宋)	政和通寶 (篆書)	1111					1	1																				2		
中国(北宋)	宣和通寶 (篆書)	1119	1		1																									
中国(南宋)	紹熙元寶	1190		1																										
中国(明)	洪武通寶	1368	3	1	3	2	6												3									1		
中国(明)	永樂通寶	1403	64	28	19	4								1	3										19					
李氏朝鮮	常平通寶	1633																			1					4		1		
日本	古寛永	1636	23	14	28	74		20	52	8	3	3	14	6	28	6	7		13	2		1	6		1	1	8	3		
日本	新寛永 (文銭)	1668			4	14	1	12	7	9		1	6	5	16	7	4		4	1		9	7					2	12	
日本	新寛永	1674			4	5	1	3	2	4	1	9	29	4	19	12	29	2	37	25			26			3	26	6		
中国(清)	乾隆通寶	1735																								2				
日本	新寛永 (鉄一文銭)	1738																		20	1			10			15	4		
日本	新寛永 (真鍮波銭)	1768																				1	16	7	2					
日本	仙臺通寶	1784																									1			
中国(清)	康熙通寶	1661																							1			1		
中国(清)	嘉慶通寶	1795																							1	2		1		
中国(清)	道光通寶	1820																								7		1		
日本	箱館通寶	1856																										28		
日本	文久永寶	1863																											1	
日本	絵銭																								2					
総枚数			104	66	82	115	29	36	61	21	4	13	50	19	63	25	40	14	75	30	1	26	60	24	18	48	60	11	12	
最新銭名			古寛永	古寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	新寛永	
最新銭の初鑄年 (西暦)			1636	1636	1674	1674	1674	1674	1674	1674	1674	1674	1741	1741	1741	1741	1741	1741	1768	1768	1768	1768	1768	1768	1820	1856	1861	1674	1668	
タマサイの推定年代			I 期	I 期	II a期	II a期	II a期	II 期	II 期	II 期	II 期	II 期	II 期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	II b期	III a期	III b期	III b期	III b期	不明

【時期区分と指標・年代推定根拠】

I 期 : 17世紀後半 (古寛永を最新銭とする)

II 期 : 18世紀以降

II a期: 18世紀 (新寛永を最新銭とするもののうち、宋銭・明銭を含むもの)

II b期: 18世紀後半～19世紀 (新寛永を最新銭とするもののうち、足尾銭や高津銭、鉄銭・真鍮四文銭を含むもの)

III 期 : 19世紀 (道光通寶や箱館通寶、文久永寶を含むもの)

III a期: 19世紀 (道光通寶を含むもの)

III b期: 19世紀後半以降 (箱館通寶や文久永寶、金ボタンを含むもの)

※1 資料番号19は米国コネチカット州スコビル社で1854～1875年に製造された金ボタンが使われているため、III b期とした。

※2 資料番号20は1973年発行の『ユーカラの世界』に掲載後に改変されているため、年代不明とした。

期3点(資料番号3・9・22)、Ⅱb期12点(資料番号5・6・12・13・14・16・17・18・21・23・25・26)、Ⅱ期(Ⅱa・Ⅱbの細分不能)5点(資料番号2・10・15・24・27)、Ⅲa期1点(資料番号7)、Ⅲb期3点(資料番号1・11・19)となった(表2)。なお時期比定の際、資料番号19に関しては、最新銭が新寛永のため本来はⅡ期(18～19世紀)に区分すべきだが、前述の通り1854～1875年製の金属製ボタンがもちいられていることから、Ⅲb期(19世紀後半以降)として扱った。

4. タマサイの型式分類と編年

(1) タマサイ・シトキの分類

今回分析したタマサイには下端にシトキと呼ばれる飾り金具を持つもの(22点)と持たないもの(5点)がある。

玉飾りに関しては連の連なり方から以下のように分類した。

- I類 : 1連のもの
- Ⅱ類 : 2連のもの
- Ⅱ'類 : 2連で途中で結節のあるもの
- Ⅲ類 : 3連のもの
- Ⅲ'類 : 3連で途中で結節のあるもの
- Ⅳ類 : 4連のもの

シトキに関しては、はじめにシトキとして作られた専用品のI類と、和鏡など他の器物の一部を利用した転用品のⅡ類に大別した上で、I類に関しては、素材・技法と形状により次の通り細分し、それらを組み合わせることで、分類表記した。すなわち素材・技法に関しては、木に複数の金属を象嵌したもの(1類)、木の上に金属板を被せたもの(2類)、金属板を重ね合わせたもの(3類)、金属板1枚のもの(4類)とし、2類に関しては、金属板が平らなもの(2①類)と凸面をなすもの(2②類)とに細分した。また連とのつながり方に関

して、シトキに穿けた孔に紐を通すA類とシトキに孔が穿けられた耳が二ヶ所付くB類とに分けた。

Ⅱ類には引手金具を用いたもの(資料番号6:図10)と、藤原光政銘の柄鏡の柄を切断し、上下逆さまにした上で上部2カ所に穿孔したもの(資料番号27:図27)がある。なお、藤原光政銘の鏡には元禄3年(1690)、同8年、安永5年(1776)の紀年銘資料が知られる(中野編 1969)。

(2) ガラス玉の分類

ガラス玉に関しては、形態、大きさ、色の分類を行った。

形態は、丸玉・平玉(丸玉と平玉の間的なものを含む)・囊玉・蜜柑玉・白玉・算盤玉・その他に分けた。その他としたものには四角玉・六角玉・不定形がある。

大きさに関しては、高さ(孔の方向)とそれに直交する幅(径)について検討を行った上で、小玉(径15mm未満)、中玉(径15mm以上20mm未満)、大玉(径20mm以上34mm未満)、超大玉(径34mm以上)に分類した

表3 ガラス玉の色表記

略号	色名称	略号	色名称
b	blue	lg	light green
bg	blue green	ly	light yellow
bk	black	mw	milky white
br	brown	or	orange
db	dark blue	p	pink
dg	dark green	pu	purple
dy	dark yellow	r	red
g	green	sv	silver
gd	gold	t	turquoise blue
gy	gray	tr	transparent
lb	light blue	w	white
lbg	light blue green		

多色玉については最初にベースとなる色を示し、それに続けて付加的な色を表記した。

(挿図1)。

色の分類は表3を参照されたい。複数の色が使われている玉はトンボ玉として単色玉とは分けて扱った。

(3) 編年

前述の銭による時期区分に従い、タマサイの連の連なり方、シトキの種類、使われているガラス玉の形態・大きさ・色について時期ごとの特徴と変遷を検討した。

最初にガラス玉の変遷について述べる。

ガラス玉の主体は全時期を通して径15mm未満の小玉だが、時代が下るにつれ径15mm以上20mm未満の中玉や径20mm以上34mm未満の大玉が増え、大型化する傾向が明瞭に読み取れる(挿図2)。18世紀後半(Ⅱb期)には径34mmを越す超大玉が現れる。時期ごとのガラス玉の直径の平均値は、Ⅰ期(17世紀後半)11.1mm→Ⅱa期(18世紀)11.6mm→Ⅱb期(18世紀後半)12.8mm→Ⅲ期(19世紀)15.3mmであり、18世紀後半以降にガラス玉が飛躍的に大型化したことが確認できる(表4)。またガラス玉の大型化に連動して、一つのタマサイに使われるガラス玉の平均数は、Ⅰ期(17世紀後半)250点→Ⅱa期(18世紀)182.5点→Ⅱb期(18世紀後半)122.8点→Ⅲ期(19世紀)56点と、時代が下るにつれ減少している(表4)。ガラス玉が大型化した分、連を構成する玉数が減少したのである。

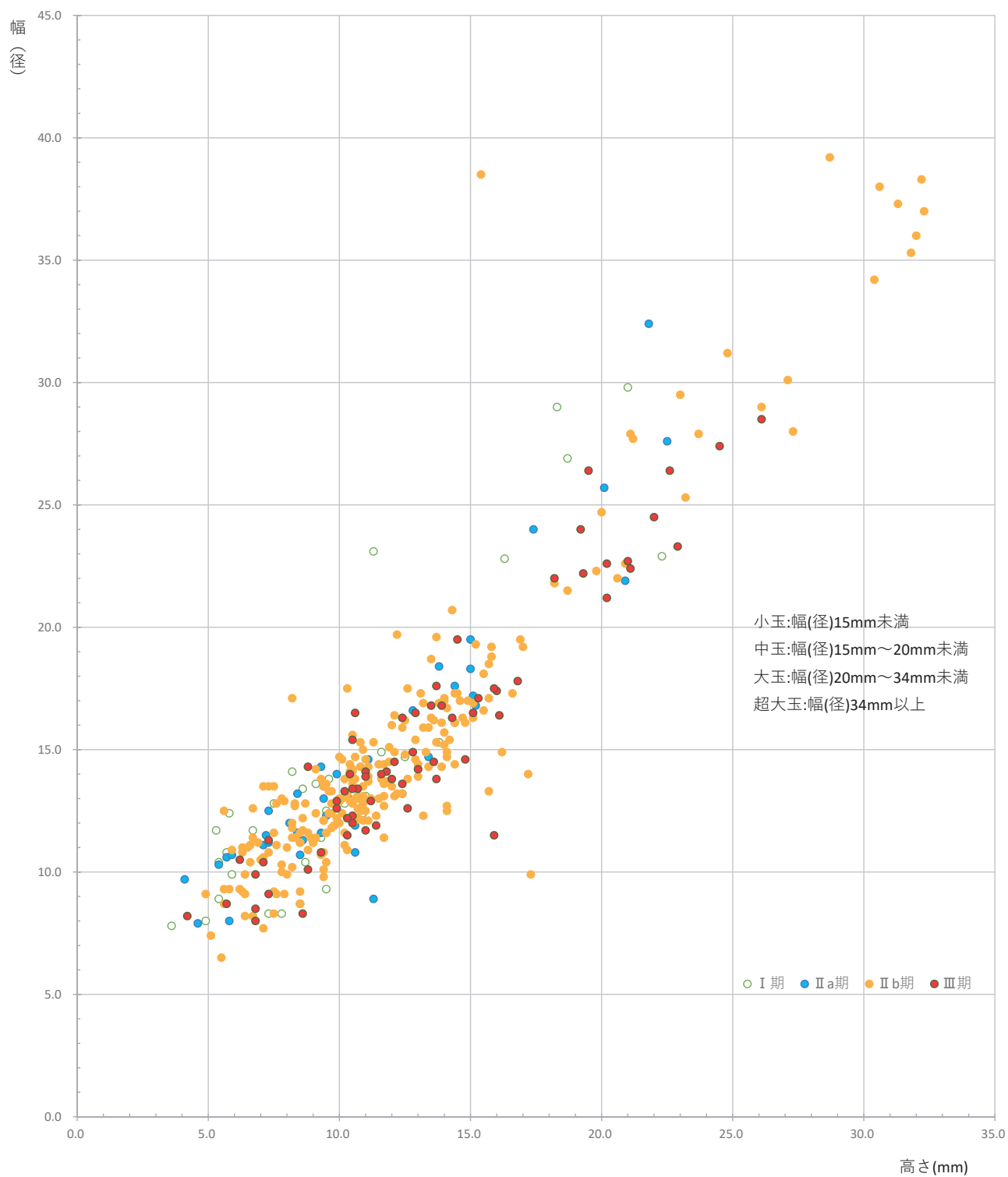
次にガラス玉の形態について検討する(挿図3)。ガラス玉の形態はⅡa期(18世紀)とⅡb期(18世紀後半)との間で大きく異なる。すなわちⅠ期～Ⅱa期には、丸玉・平玉／丸平玉・蜜柑玉の3種が拮抗しているのに対して、Ⅱb期～Ⅲ期には、平玉／丸平玉と蜜柑玉が急減し、8割以上を丸玉が占めるようになる。

続いてガラス玉の色について検討する。表3に示したようにガラス玉の色は多様で

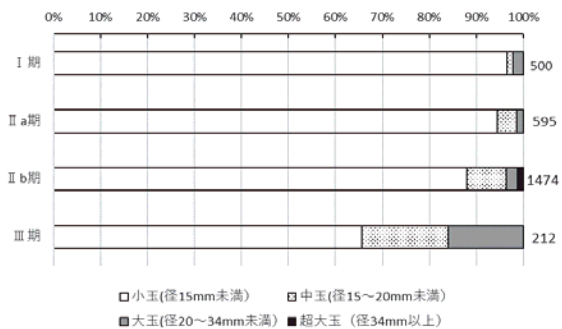
あることから、青系、黒、透明、白、それ以外の単色(他色)、複数の色が使われている多色の6種類に大別して分析を行った。タマサイによって使われているガラス玉の色はタマサイごとに変異が大きい(挿図5)が、それでも時期によってある程度傾向性があり、時間的な変化が読み取れる(挿図4)。Ⅰ期(17世紀後半)は青系が約9割を占め他に黒・他色・多色・透明が見られるが、白色の玉はない。Ⅱa期(18世紀)には青系が激減し、他色や透明に取って代わられる。Ⅱb期(18世紀後半)には黒や多色が増えるとともに白色の玉が現れる。Ⅲ期(19世紀)は基本的にⅡb期を踏襲している。

次に連の連なり方について述べる(挿図4)。Ⅰ期(17世紀後半)のタマサイは2点とも3連(Ⅲ類)である。続くⅡa期(18世紀)には1連(Ⅰ類)と4連(Ⅳ類)が見られる。Ⅱb期(18世紀後半～19世紀)はⅠ類を主体とし、Ⅲ類・Ⅳ類のほかに新たに連の途中に大玉等による結節をもつもの(Ⅱ'類・Ⅲ'類)が出現する。Ⅲ期(19世紀)にはⅠ・Ⅱ'・Ⅲ類が確認される。

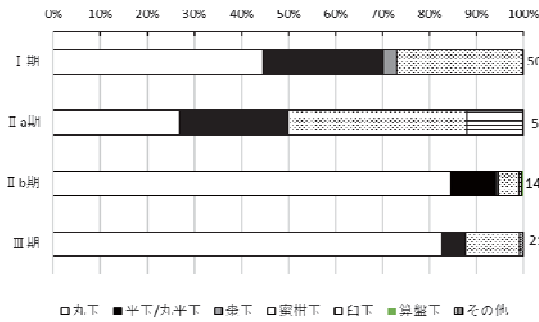
シトキは転用品(Ⅱ類)に比べ、専用品(Ⅰ類)が圧倒的に多い(表4)。素材・技法に関しては、木に複数の金属を象嵌したもの(1類)と、木の上に金属板を被せたもの(2類)がⅠ期(17世紀後半)から見られるのに対して、金属板を重ね合わせたもの(3類)はⅡa期(18世紀)以降、金属板1枚のもの(4類)はⅡb期(18世紀後半～19世紀)と後出である。また連とシトキを結ぶ孔に関しては、シトキに直接穿孔するA類がⅠ期(17世紀後半)から見られるのに対して、シトキに孔が穿けられた耳が二ヶ所に付くB類はⅡb期(18世紀後半～19世紀)と後出である。



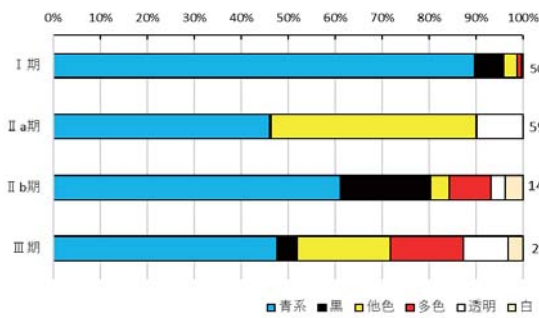
挿1 タマサイに使われたガラス玉の大きさの分布



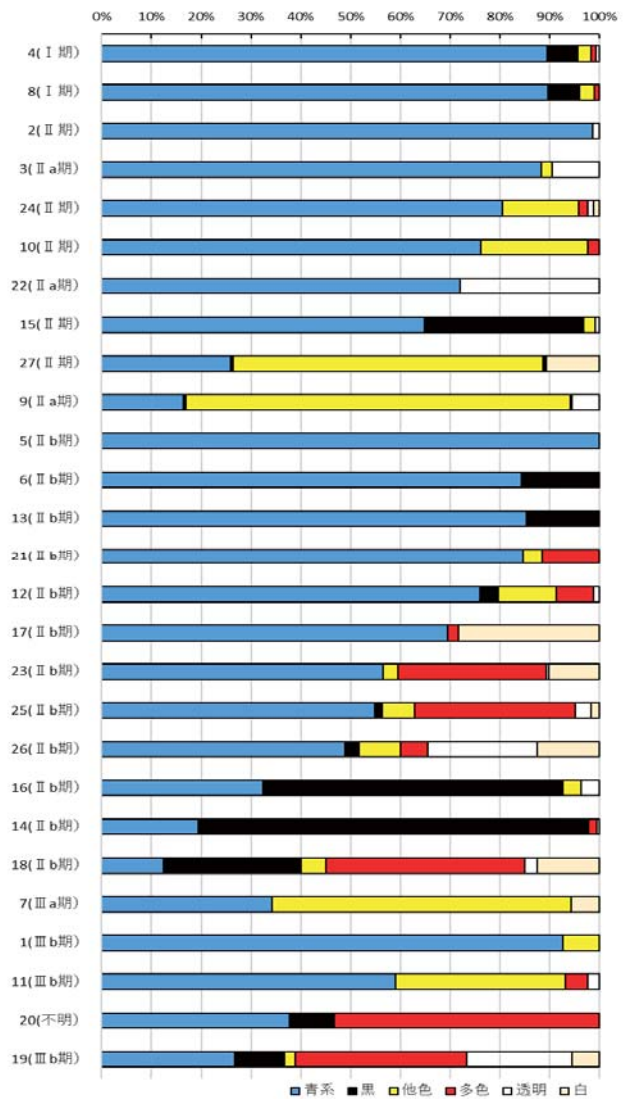
挿図2 タマサイに使われたガラス玉の大きさの変遷



挿図3 タマサイに使われたガラス玉の形態の変遷



挿図4 タマサイに使われたガラス玉の色の変遷



挿図5 タマサイに使われたガラス玉の色

表4 タマサイ・シトキ・ガラス玉の変遷

時期		Ⅰ期 17世紀後半		Ⅱa期 18世紀		Ⅱb期 18世紀後半～19世紀													Ⅲa期 19世紀		Ⅲb期 19世紀後半以降			
資料番号		8	4	3	9	22	26	23	5	16	12	13	17	21	14	18	6	25	26	7	1	19	11	
タマサイ 連の型式	Ⅲ	○	○	○											○						○			
	Ⅰ					○						○	○	○		○		○		○			○	
	Ⅱ'						○												○			○		
	Ⅱ								○	○														
	Ⅲ'							○									○							
シトキ の型式	Ⅳ				○						○													
	Ⅰ	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	—	—	○	○	—	
	Ⅱ						—										○		—	—			—	
	1	○					—	○											—	—			—	
	2		○	○	○		—		○	○	○	○							—	—	○		—	
	3					○	—									○		○	—	—			—	
	4						—							○	○	○			—	—		○	—	
A	○	○	○	○	○	—	○		○			○	○				○	—	—			—		
B						—		○		○	○			○	○			—	—	○	○	—		
玉の種類		11	23	12	18	11	43	58	10	7	20	11	13	10	9	21	11	26	43	9	13	27	19	
時期別平均玉種		28.5種			21種			19.9種													17種			
玉数		204	296	179	330	86	135	198	112	108	242	48	46	52	191	40	230	62	145	35	55	90	44	
時期別平均玉数		250点			182.5点			122.8点													56点			
ガラス玉の直径の平均		11.1mm			11.6mm			12.8mm													15.3mm			

5. まとめ

これまで編年が不可能と思われていた伝世タマサイに関して、ガラス玉とともにタマサイに使われている銭を指標として年代決定を行い、その上で、時期ごとに連の連なり方、シトキや使われているガラス玉の特徴を検討した。その結果、銭を指標としたタマサイの時期区分に従ってタマサイの連の連なり方やシトキ・ガラス玉が型式変化していることが判明し、銭による年代決定の正しさが確かめられた。これは、後世に紐が交換されたことが明らかなタマサイでも、玉の構成は比較的オリジナルが保たれているケースが多いことを意味する。

伝世タマサイは、17世紀後半～19世紀後半まで、一部重複を含みつつ5段階に細分された（挿図6）。

今回扱った資料の中で最も古いタマサイの最新銭は1636年初鑄の古寛永であり、製作年代は17世紀後半（Ⅰ期）と考えられる。Ⅰ期のタマサイは形状的には丸玉・平玉／丸平玉・蜜柑玉の3種が拮抗しているが、全体としては青系の小玉が主体で3連である。ガラス玉の径の平均値は11.1mmと最も小さく、玉数は平均250点と最も多い。シトキは専用品で、木製板の上に金属板を象嵌（1類）あるいは被せる（2類）タイプである。なお、金属板象嵌技法は、14世紀には既に刀子や矢筒などの装飾に使われており、アイヌ文化を通して伝承され続けた装飾技法である（関根 2016）。

続くⅡa期（18世紀）には1連や4連のタマサイが現れ、金属板を重ね合わせたシトキ（3類）が新たに加わる。ガラス玉は引き続き丸玉・平玉／丸平玉・蜜柑玉の3種が拮抗している点では同じだが、青系が激減し、他色や透明に取って代わられるとともに、ガラス玉の径の平均値は11.6mmとやや大きくなり、玉数は平均182.5点と減少する。

Ⅱb期（18世紀後半～19世紀）には複数の連の途中に大きな玉を配置することで結節部を設けたタマサイや、他の器物から転用した部材を用いたシトキ（Ⅱ類）、金属板1枚のシトキ（4類）、孔を穿けるための耳が二ヶ所付くタイプのシトキ（B類）が登場する。ガラス玉は平玉／丸平玉と蜜柑玉が急減し、8割以上を丸玉が占めるようになる一方、色に関しては黒や多色が増え、白色の玉が現れる。Ⅱb期には新たに径34mm以上の極大玉が出現、径の平均値は12.8mmとさらに大型化し、玉数は平均122.8点と急減する。

Ⅲ期（19世紀）のタマサイは連の連なりやシトキに大きな変化は見られないが、ガラス玉の径は平均15.3mmと最も大きく、玉数は平均56点と最も少ない。

以上の通り、タマサイは、17世紀後半以降、ガラス玉の大型化にともない、玉数が減少する傾向にあることが明確となった。タマサイは18世紀後半を境に大きく変化しており、伝世資料の多くは18世紀後半以降のものが大多数を占めるが、一方で今回僅かながら17世紀後半まで遡りうる資料も確認できた意義は大きい。

今後は本稿で提示した編年観に照らし合わせ、銭が使われていないタマサイについても時期決定を行う一方、使われているガラス玉の材質分析を進める必要がある。

謝辞 資料調査に際して次の機関と方々にお世話になった。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

市立函館博物館、函館市北方民族資料館、苫小牧市美術博物館、札幌国際大学博物館、旭川市博物館、釧路市立博物館

越田賢一郎、佐藤麻莉、澤田恭平、飯岡郁穂、岩波連（順不同・敬称略）

本研究は中村和之を研究代表者とするJSPS科研費JP20H01306の助成をうけたもの

一七世紀後半



8 児玉 K-H13-0092 4 児玉 K-H13-0069

一八世紀前半



9 児玉 K-H13-0093 3 児玉 K-H13-0067



22 札幌国際大 47

一八世紀後半



12 児玉 K-H13-0101 14 児玉 K-H13-0197 16 児玉 K-II-700628 5 児玉 K-H13-0071 21 札幌国際大 42 17 児玉 K-II-700667 26 旭川 7704

一九世紀前半



23 苫小牧 492 6 児玉 K-H13-0074 13 児玉 K-H13-0114 18 児玉 K-II-700675 25 苫小牧 453 7 児玉 K-H13-0084

一九世紀後半



1 馬場 700076



19 児玉 K-II-700689



11 児玉 K-H13-0095

挿図 6 伝世タマサイの変遷

です。

【引用文献】

- 赤石慎三・越田賢一郎・中村和之・竹内孝 2013
「苫小牧市内遺跡出土のガラス玉について
(1)」『苫小牧市博物館館報』10、15～23頁
- 赤石慎三・越田賢一郎・中村和之・竹内孝 2014
「苫小牧市内遺跡出土のガラス玉について
(2)」『苫小牧市博物館館報』11、17～27頁
- 旭川市博物館 1999『旭川市博物館所蔵品目録X
民族資料／服飾関係』
- 新井沙季・馬場慎介・中井泉・中村和之・塚田直哉 2018「アイヌ文化期の道南地域出土ガラス
の化学組成分析」『函館工業高等専門学校紀要』
52、20～38頁
- 石川朗・越田賢一郎・竹内孝・中村和之 2014「北
海道釧路市幣舞遺跡から出土したガラス玉の
成分分析」『釧路市博物館紀要』35、21～26頁
- 石橋孝夫・中村和之・竹内孝・越田賢一郎 2013
「石狩市八幡出土のガラス玉の分析」『いしか
り砂丘の風資料館紀要』3、23～36頁
- 石橋孝夫・越田賢一郎・高橋美鈴・竹内孝・中村
和之 2015「石狩市若生C出土のガラス玉と土
玉の成分分析」『いしかり砂丘の風資料館紀要』
5、1～5頁
- 大賀克彦・田村朋美・稲垣森太・中村和之 2017
「北海道青苗遺跡出土ガラス玉類の考古科学
的検討」『函館工業高等専門学校紀要』51、38
～47頁
- 大塚和義編 2001『ラッコとガラス玉 北太平洋
の先住民交易』国立民族学博物館
- 越田賢一郎・乾芳宏・竹内孝・中村和之・高橋美
鈴 2015「北海道余市町大川遺跡から出土した
ガラス玉の成分分析」『札幌国際大学紀要』46、
107～114頁
- 越田賢一郎・後藤秀彦・竹内孝・中村和之 2014
「北海道浦幌町の十勝太若月遺跡から出土し
たガラス玉の成分分析」『浦幌町立博物館紀要』
14、33～42頁
- 越田賢一郎・坂梨夏代・竹内孝・中村和之 2014
「北海道松前町トノマ遺跡から出土したガラ
ス玉の成分分析」『札幌国際大学紀要』45、147
～153頁
- 越田賢一郎・高橋毅・竹内孝・中村和之 2014「北
海道森町の鷺ノ木遺跡から出土したガラス玉
の分析」『函館工業高等専門学校紀要』48、51
～56頁
- 児玉作左衛門 1965「江戸時代初期のアイヌ服飾
の研究」『北方文化研究報告』20、北海道大学
文学部附属北方文化研究施設、1～107頁
- 児玉とみ 1967「樺太アイヌの首飾りについて」『北
海道の文化』11、北海道文化財保護協会、43
～55頁
- 児玉とみ 1969「アイヌ首飾りの飾り板(シトキ)
の研究」『北海道の文化』16、北海道文化財保
護協会、3～21頁
- 佐藤雄生・竹内孝・中村和之 2018「北海道松前
町の福山城下町遺跡から出土したガラス玉の
成分分析」『函館工業高等専門学校紀要』52、
61～65頁
- 市立函館博物館 1978『国指定重要民俗資料「ア
イヌの生活用具コレクション」整理報告書第
4編 アイヌの服飾品』
- 市立函館博物館 1987『児玉コレクション目録』
II
- 杉山壽栄男 1936『アイヌたま』、今井札幌支店
- 関根達人 2008a「北のガラス玉の道」『考古学ジ
ャーナル』579、12～15頁
- 関根達人 2008b「タマサイ・ガラス玉に関する型
式学的検討」『北東アジアのなかのアイヌ世界』
125～150頁 岩田書院
- 関根達人 2014『中近世の蝦夷地と北方交易』吉
川弘文館
- 関根達人 2016『モノから見たアイヌ文化史』吉
川弘文館
- 田村朋美・青野友哉・中村和之 2018「北海道伊
達市有珠オヤコツ遺跡出土玉類の材質に関す
る再検討」『函館工業高等専門学校紀要』52、
85～92頁
- 田村明美・大賀克彦 2015「目梨泊遺跡出土ガラ

- ス小玉の考古学的検討』『枝幸研究』6、21～35頁
- 苫小牧市博物館 1988『アイヌ民族資料目録』苫小牧市博物館所蔵資料目録2
- 中野政樹編 1969『日本の美術42 和鏡』至文堂
- 中村和之・森岡健治・竹内孝 2013「北海道におけるガラス玉の流入とその背景」『北海道大学総合博物館研究報告』6、58～65頁
- 中村和之・竹内孝・越田賢一郎 2013「札幌市発寒出土ガラス玉の分析」『北大植物園研究紀要』12、49～56頁
- 馬場慎介・柳瀬和也・今井藍子・中井泉・小川康和・越田賢一郎・中村和之 2017「北海道出土アイヌ玉の化学組成分析」『函館工業高等専門学校紀要』51、48～67頁
- 松井恒幸 1977「北のガラス史のための覚書」『市立旭川郷土博物館研究報告』11、1～34頁
- 松井恒幸 1978「北のガラス史のための覚書Ⅱ」『市立旭川郷土博物館研究報告』12、1～32頁
- 柳瀬和也・松崎真弓・澤村大地・中村和之・森岡健治・中井泉 2015「可搬型蛍光X線分析装置を用いた北海道出土ガラス玉の特性化」『沙流川歴史館年報』16、69～93頁
- 柳瀬和也・澤村大地・中村和之・森岡健治・中井泉 2015「蛍光X線分析による北海道で出土した縄文時代の古代ガラス玉の特性化」『BUNKAZAI KAGAKU』64-5、371～377、The Japan Society for Analytical Chemistry
- 吉田利雄 1973『ユーカラの世界』読売新聞社
- 関根 達人（弘前大学教授）**
中村 和之（函館大学教授）
三宅 俊彦（淑徳大学教授）
奥野 進（市立函館博物館学芸員）

Using coins as an index to draft a chronology of the inherited "Tamasai," Ainu women's necklace

SEKINE Tatsuhito¹, NAKAMURA Kazuyuki², MIYAKE Toshihiko³
and OKUNO Susumu⁴

Abstract

Many researchers in Japan have considered arranging a chronology for the inherited Tamasai (Ainu women's necklace) to be impossible. The authors determined the age of the Tamasai by using the coins woven into the necklace as an indicator for dating, the age of the glass beads was also taken into account. For each identified period, the threading and features of the glass beads of the Tamasai, including the Shitoki (ornamental medallion), were examined. As a result of the analysis, the types of Shitoki and glass beads were clearly shown to have shifted based on the periodization with coins. This confirmed the accuracy of the age determination using coins. The identified patterns made it clear that the number of glass beads used in Tamasai tended to decrease as the size of the glass became larger after the late 17th Century. Tamasai necklaces have changed drastically since the late 18th Century. The majority of the inherited Tamasai were made after this period.

1 Hirosaki University 2 Hakodate University 3 Shukutoku University 4 Hakodate City Museum



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	dy	丸玉	14.4	16.1	3	
2	ガラス	t	平玉	8.6	13.4	40	
3	ガラス	bg	丸玉	9.5	12.5	6	
4	ガラス	bg	蜜柑玉	5.3	11.7	107	
5	ガラス	b	平玉	5.8	12.4	26	
6	ガラス	bk	丸玉	9.1	13.6	13	
7	ガラス	br	丸玉	10.2	12.8	2	
8	ガラス	w+b	丸玉	11.6	14.9	2	トンボ玉
9	ガラス	y	丸玉	9.6	13.8	1	
10	ガラス	t	平玉	16.3	22.8	2	
11	ガラス	db	蜜柑玉	22.3	22.9	2	
合計				204			

No	銭種類	初録年	外径mm	備考
1	永楽通寶	1403	23.5	
2	永楽通寶	1403	22.8	
3	古寛永	1636	24.5	
4	祥符通寶 (楷書)	1008	23.5	
5	洪武通寶	1368	21.5	
6	永楽通寶	1403	23.4	
7	永楽通寶	1403	23.4	私鑄銭?
8	永楽通寶	1403	22.5	
9	古寛永	1636	24.4	
10	永楽通寶	1403	24.4	
11	永楽通寶	1403	23.0	
12	永楽通寶	1403	24.4	
13	開元通寶	621	24.2	南唐 篆書
14	古寛永	1636	24.6	
15	永楽通寶	1403	23.2	
16	古寛永	1636	24.2	
17	古寛永	1636	24.8	
18	寶和通寶 (篆書)	1119	23.4	
19	永楽通寶	1403	23.2	
20	永楽通寶	1403	23.0	
21	永楽通寶	1403	22.9	私鑄銭?
22	古寛永	1636	23.9	
23	永楽通寶	1403	23.4	私鑄銭?
24	古寛永	1636	24.3	
25	開元通寶	621	23.4	
26	古寛永	1636	23.8	
27	古寛永	1636	24.9	
28	古寛永	1636	24.0	
29	古寛永	1636	23.8	
30	洪武通寶	1368	21.8	
31	古寛永	1636	23.5	
32	元豐通寶 (行書)	1078	23.5	
33	永楽通寶	1403	24.5	
34	古寛永	1636	24.1	
35	永楽通寶	1403	22.6	
36	永楽通寶	1403	23.0	
37	永楽通寶	1403	23.2	
38	永楽通寶	1403	21.8	
39	永楽通寶	1403	23.4	
40	皇宋通寶 (楷書)	1039	23.7	
41	永楽通寶	1403	23.3	
42	永楽通寶	1403	22.9	
43	永楽通寶	1403	23.3	
44	永楽通寶	1403	20.2	私鑄銭?
45	永楽通寶	1403	23.1	
46	永楽通寶	1403	22.2	私鑄銭?
47	永楽通寶	1403	23.2	私鑄銭?
48	永楽通寶	1403	22.2	私鑄銭?
49	元祐通寶 (篆書)	1086	23.2	
50	聖道元寶 (楷書)	995	23.6	
51	永楽通寶	1403	23.4	
52	永楽通寶	1403	23.5	
53	永楽通寶	1403	22.1	私鑄銭?
54	古寛永	1636	24.3	
55	永楽通寶	1403	23.5	
56	永楽通寶	1403	23.3	
57	永楽通寶	1403	21.9	
58	開元通寶	621	23.6	
59	永楽通寶	1403	23.6	
60	永楽通寶	1403	24.0	
61	永楽通寶	1403	23.1	
62	古寛永	1636	24.1	
63	永楽通寶	1403	22.8	
64	永楽通寶	1403	24.3	
65	古寛永	1636	23.7	
66	古寛永	1636	23.6	
67	永楽通寶	1403	23.5	
68	元祐通寶 (篆書)	1086	23.2	
69	永楽通寶	1403	24.1	
70	古寛永	1636	25.0	
71	古寛永	1636	22.6	
72	洪武通寶	1368	22.4	
73	古寛永	1636	24.3	
74	永楽通寶	1403	23.0	
75	古寛永	1636	23.4	
76	開元通寶	621	23.7	
77	永楽通寶	1403	23.4	
78	永楽通寶	1403	23.6	
79	永楽通寶	1403	22.8	
80	古寛永	1636	23.8	
81	永楽通寶	1403	22.5	
82	永楽通寶	1403	22.5	
83	永楽通寶	1403	22.8	
84	古寛永	1636	24.1	
85	永楽通寶	1403	23.2	
86	祥符元寶 (楷書)	1008	25.1	
87	永楽通寶	1403	23.1	私鑄銭?
88	永楽通寶	1403	23.6	
89	永楽通寶	1403	23.1	
90	永楽通寶	1403	22.6	
91	永楽通寶	1403	22.5	
92	永楽通寶	1403	22.7	
93	淳化元寶 (楷書)	990	22.3	
94	永楽通寶	1403	23.5	
95	永楽通寶	1403	23.0	
96	永楽通寶	1403	23.3	
97	永楽通寶	1403	23.2	
98	永楽通寶	1403	22.9	
99	永楽通寶	1403	23.3	
100	永楽通寶	1403	22.9	
101	永楽通寶	1403	22.1	私鑄銭?
102	永楽通寶	1403	22.7	
103	永楽通寶	1403	22.9	
104	元豐通寶 (行書)	1078	23.8	

図 1 資料番号 8 : 児玉コレクション K-H13-0092 【I 期 (17 世紀後半)】



No.	錢種類	初鑄年	外径mm	備考
1	祥符元寶 (楷書)	1008	23.6	
2	咸平元寶 (楷書)	998	23.6	
3	古寛永	1636	23.4	
4	元豐通寶 (篆書)	1078	24.1	
5	祥符通寶 (楷書)	1008	24.6	
6	淳化元寶 (楷書)	990	23.9	
7	咸平元寶 (楷書)	998	24.0	
8	洪武通寶	1368	23.0	
9	古寛永	1636	24.2	
10	古寛永	1636	24.2	
11	古寛永	1636	24.6	
12	元豐通寶 (篆書)	1078	24.3	
13	古寛永	1636	24.6	
14	古寛永	1636	24.5	
15	永樂通寶	1403	22.5	私鑄銭?
16	紹熙元寶	1190	23.8	背面下「元」
17	永樂通寶	1403	24.7	
18	永樂通寶	1403	24.4	
19	永樂通寶	1403	24.7	
20	永樂通寶	1403	24.4	
21	永樂通寶	1403	23.0	私鑄銭?
22	永樂通寶	1403	24.3	
23	永樂通寶	1403	23.3	私鑄銭?
24	永樂通寶	1403	24.5	
25	永樂通寶	1403	24.1	
26	永樂通寶	1403	24.5	
27	永樂通寶	1403	24.4	私鑄銭?
28	永樂通寶	1403	24.5	
29	永樂通寶	1403	24.4	
30	永樂通寶	1403	24.5	
31	大觀通寶 (楷書)	1107	24.7	
32	大觀通寶 (楷書)	1107	24.1	
33	天禧通寶 (楷書)	1017	23.8	
34	祥符通寶 (楷書)	1008	24.0	
35	祥符元寶 (楷書)	1008	24.2	
36	天聖元寶 (篆書)	1023	23.5	
37	景德元寶 (楷書)	1004	23.4	
38	永樂通寶	1403	22.8	私鑄銭?
39	景德元寶 (楷書)	1004	23.8	
40	景德元寶 (楷書)	1004	23.8	
41	至道元寶 (行書)	995	23.3	
42	開元通寶	621	23.2	
43	元豐通寶 (篆書)	1078	23.3	
44	古寛永	1636	24.3	
45	古寛永	1636	23.9	
46	熙寧元寶 (篆書)	1068	23.3	
47	熙寧元寶 (楷書)	1068	23.3	
48	嘉祐通寶 (篆書)	1056	23.9	
49	古寛永	1636	24.1	
50	古寛永	1636	24.3	
51	古寛永	1636	23.8	
52	永樂通寶	1403	24.3	
53	古寛永	1636	23.8	
54	古寛永	1636	24.5	
55	古寛永	1636	24.7	
56	永樂通寶	1403	22.1	私鑄銭?
57	永樂通寶	1403	24.5	
58	永樂通寶	1403	24.2	
59	永樂通寶	1403	24.8	
60	永樂通寶	1403	24.4	
61	永樂通寶	1403	24.5	
62	永樂通寶	1403	23.4	私鑄銭?
63	永樂通寶	1403	24.6	
64	永樂通寶	1403	24.3	
65	永樂通寶	1403	24.4	
66	永樂通寶	1403	24.4	

図2 資料番号4：児玉コレクション K-H13-0069【I期(17世紀後半)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考	No	銭種類	初録年	外径mm	備考
1	ガラス	dy	丸玉	10.6	10.8	7		1	古寛永	1636	23.7	
2	ガラス	t	丸平玉	9.5	12.3	33		2	古寛永	1636	23.8	
3	ガラス	g	蜜柑玉	5.7	10.6	163		3	永楽通寶	1403	22.6	
4	ガラス	tr	蜜柑玉	9.3	11.6	8		4	祥符元寶(稀書)	1008	23.3	
5	ガラス	pu	丸玉	10.6	11.9	14		5	古寛永	1636	24.6	
6	ガラス	b	丸平玉	7.3	12.5	14		6	古寛永	1636	24.0	
7	ガラス	t	蜜柑玉	15.2	16.8	1		7	古寛永	1636	24.0	
8	ガラス	g	白玉	4.6	7.9	69		8	古寛永	1636	24.4	
9	ガラス	t	白玉	5.8	8.0	2		9	新寛永(文銭)	1668	25.0	
10	ガラス	t	平玉	5.4	10.3	1		10	元祐通寶(行書)	1086	24.0	
11	ガラス	bk	丸玉	9.4	13.5	2		11	古寛永	1636	23.8	
12	ガラス	tr	蜜柑玉	14.4	17.6	9		12	古寛永	1636	23.9	
13	ガラス	dg+b	四角玉	11.3	8.9	1		13	元祐通寶(篆書)	1111	24.1	
14	ガラス	db	蜜柑玉	12.8	16.6	1		14	古寛永	1636	24.5	
15	ガラス	tr	平玉	9.3	14.3	1		15	古寛永	1636	24.5	
16	ガラス	pu	丸玉	20.9	21.9	1		16	古寛永	1636	24.3	
17	ガラス	g	丸玉	22.5	27.6	1		17	古寛永	1636	24.3	
18	ガラス	db	蜜柑玉	15.0	19.5	2		18	咸平元寶(稀書)	998	23.6	
合計				330				19	古寛永	1636	24.0	
								20	古寛永	1636	24.2	
								21	新寛永(文銭)	1668	24.1	
								22	古寛永	1636	24.2	
								23	古寛永	1636	24.3	
								24	古寛永	1636	24.2	
								25	元祐通寶(行書)	1078	24.1	
								26	古寛永	1636	23.8	
								27	古寛永	1636	24.2	
								28	新寛永(文銭)	1668	24.2	
								29	古寛永	1636	24.1	
								30	古寛永	1636	24.3	
								31	古寛永	1636	24.1	
								32	元祐通寶(行書)	1078	24.1	
								33	古寛永	1636	23.8	
								34	古寛永	1636	24.2	
								35	古寛永	1636	24.0	
								36	古寛永	1636	24.2	
								37	古寛永	1636	24.0	
								38	古寛永	1636	23.8	
								39	古寛永	1636	23.4	
								40	新寛永	1674	22.8	
								41	新寛永	1674	22.6	
								42	古寛永	1636	23.2	
								43	古寛永	1636	23.8	
								44	古寛永	1636	24.1	
								45	古寛永	1636	23.9	
								46	古寛永	1636	25.2	
								47	新寛永(文銭)	1668	24.9	
								48	古寛永	1636	23.1	
								49	古寛永	1636	23.2	
								50	古寛永	1636	23.4	
								51	古寛永	1636	23.3	
								52	新寛永(文銭)	1668	24.9	
								53	古寛永	1636	24.8	
								54	開元通寶	621	24.2	
								55	古寛永	1636	24.0	
								56	新寛永	1674	24.1	
								57	古寛永	1636	24.4	
								58	元祐通寶	1078	23.3	
								59	皇宋通寶(篆書)	1039	23.6	
								60	祥符元寶(稀書)	1008	24.0	
								61	永楽通寶	1403	22.1	
								62	古寛永	1636	24.4	
								63	古寛永	1636	24.7	
								64	古寛永	1636	24.2	
								65	古寛永	1636	24.6	
								66	新寛永(文銭)	1668	24.9	
								67	新寛永(文銭)	1668	25.0	
								68	新寛永	1674	23.7	
								69	古寛永	1636	24.2	
								70	新寛永(文銭)	1668	25.2	
								71	古寛永	1636	23.9	
								72	新寛永(文銭)	1668	25.1	
								73	古寛永	1636	24.1	
								74	古寛永	1636	24.3	
								75	古寛永	1636	24.0	
								76	古寛永	1636	23.0	
								77	古寛永	1636	24.7	
								78	古寛永	1636	23.9	
								79	古寛永	1636	24.2	
								80	古寛永	1636	24.0	
								81	永楽通寶	1403	21.7	私鉄銭?
								82	新寛永(文銭)	1668	24.8	
								83	皇宋通寶(稀書)	1039	24.1	
								84	天聖元寶(稀書)	1023	23.9	
								85	元祐通寶(行書)	1078	24.5	
								86	皇宋通寶(篆書)	1039	23.2	
								87	新寛永(文銭)	1668	25.2	
								88	古寛永	1636	24.3	
								89	元祐通寶(行書)	1086	23.1	
								90	古寛永	1636	24.5	
								91	古寛永	1636	23.4	
								92	古寛永	1636	24.5	
								93	古寛永	1636	24.0	
								94	古寛永	1636	24.2	
								95	古寛永	1636	24.4	
								96	古寛永	1636	23.1	
								97	新寛永(文銭)	1668	25.1	
								98	元祐通寶(行書)	1078	23.6	
								99	古寛永	1636	24.7	
								100	古寛永	1636	24.3	
								101	古寛永	1636	24.3	
								102	古寛永	1636	24.1	
								103	古寛永	1636	24.4	
								104	新寛永	1674	23.8	
								105	古寛永	1636	23.9	
								106	古寛永	1636	24.0	
								107	古寛永	1636	24.3	
								108	永楽通寶	1403	23.6	
								109	古寛永	1636	23.5	
								110	祥符元寶(稀書)	1008	23.9	
								111	古寛永	1636	23.5	
								112	新寛永(文銭)	1668	24.7	
								113	古寛永	1636	23.9	
								114	古寛永	1636	24.5	
								115	新寛永(文銭)	1668	25.1	



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	t	丸玉	7.2	11.5	71	
2	ガラス	bg	蜜柑玉	7.3	11.2	1	
3	ガラス	db	蜜柑玉	8.6	11.3	29	
4	ガラス	dy	平玉	9.4	13.0	2	
5	ガラス	tr	丸平玉	8.4	13.2	14	
6	ガラス	tr	蜜柑玉	10.8	13.0	3	
7	ガラス	db	丸平玉	10.3	13.1	26	
8	ガラス	bg	丸平玉	9.9	14.0	22	
9	ガラス	t	蜜柑玉	13.8	18.4	5	
10	ガラス	t	丸玉	15.0	18.3	2	
11	ガラス	or	蜜柑玉	17.4	24.0	2	
12	ガラス	t	蜜柑玉	20.1	25.7	2	
合計				179			

No.	銭種類	初録年	外径mm	備考
1	新寛永	1674	25.0	
2	古寛永	1636	21.0	
3	古寛永	1636	24.0	
4	新寛永	1674	24.1	
5	祥符元寶 (楷書)	1008	23.1	
6	古寛永	1636	23.8	
7	永楽通寶	1403	23.3	
8	古寛永	1636	23.7	
9	洪武通寶	1368	23.2	
10	洪武通寶	1368	21.9	
11	新寛永	1674	24.5	
12	熙寧元寶 (篆書)	1068	22.9	
13	祥符元寶 (楷書)	1008	24.6	
14	祥符通寶 (楷書)	1008	24.1	
15	元豊通寶 (行書)	1078	24.1	
16	古寛永	1636	23.9	
17	永楽通寶	1403	23.1	
18	開元通寶 (隸書)	621	23.8	
19	永楽通寶	1403	23.6	
20	天聖元寶 (楷書)	1023	24.0	
21	古寛永	1636	24.4	
22	古寛永	1636	24.0	
23	宣和通寶 (篆書)	1119	23.8	
24	永楽通寶	1403	23.6	
25	新寛永 (文銭)	1668	25.2	
26	新寛永 (文銭)	1668	25.1	
27	元祐通寶 (行書)	1086	23.8	
28	永楽通寶	1403	23.5	
29	永楽通寶	1403	23.7	
30	古寛永	1636	24.1	
31	古寛永	1636	24.2	
32	永楽通寶	1403	23.8	
33	元豊通寶 (行書)	1078	23.6	
34	永楽通寶	1403	22.6	
35	永楽通寶	1403	21.8	
36	元豊通寶 (行書)	1078	23.6	
37	古寛永	1636	23.8	
38	古寛永	1636	24.3	
39	政和通寶 (隸書)	1111	23.2	
40	永楽通寶	1403	24.7	
41	永楽通寶	1403	24.0	
42	古寛永	1636	24.0	
43	治平元寶 (篆書)	1064	23.3	
44	洪武通寶	1368	23.1	
45	古寛永	1636	24.0	
46	古寛永	1636	24.5	
47	熙寧元寶 (楷書)	1068	23.4	
48	紹聖元寶 (行書)	1094	23.4	
49	古寛永	1636	23.9	
50	古寛永	1636	25.0	
51	古寛永	1636	24.4	
52	古寛永	1636	24.3	
53	古寛永	1636	24.8	
54	明道元寶 (楷書)	1032	24.1	
55	淳化元寶 (篆書)	990	23.8	
56	熙寧元寶 (篆書)	1068	23.0	
57	古寛永	1636	25.1	
58	古寛永	1636	24.1	
59	永楽通寶	1403	24.3	
60	開元通寶 (隸書)	621	24.2	
61	永楽通寶	1403	23.0	私鑄銭?
62	祥符通寶 (楷書)	1008	24.4	
63	古寛永	1636	22.1	
64	古寛永	1636	24.2	
65	新寛永 (文銭)	1668	25.2	
66	新寛永	1674	25.1	
67	天聖元寶 (篆書)	1023	23.9	
68	古寛永	1636	24.4	
69	古寛永	1636	25.0	
70	新寛永 (文銭)	1668	24.6	
71	開元通寶 (隸書)	621	23.7	背左 月
72	古寛永	1636	25.3	
73	元祐通寶 (行書)	1086	23.9	
74	古寛永	1636	23.9	
75	永楽通寶	1403	22.7	私鑄銭?
76	永楽通寶	1403	22.9	私鑄銭?
77	永楽通寶	1403	22.7	私鑄銭?
78	永楽通寶	1403	22.9	私鑄銭?
79	景徳元寶 (楷書)	1004	23.8	
80	永楽通寶	1403	23.3	私鑄銭?
81	古寛永	1636	24.5	
82	永楽通寶	1403	23.5	私鑄銭?

図4 資料番号3：児玉コレクションK-H13-0067【Ⅱa期(18世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	b	平玉	5.9	12.0	2	
2	ガラス	b	蜜柑玉	6.8	12.8	48	
3	ガラス	t	丸玉	15.0	18.2	2	
4	ガラス	dy	丸玉	11.2	12.8	2	
5	ガラス	t	丸玉	12.0	14.0	9	
6	ガラス	t	丸玉	14.3	15.6	1	
7	ガラス	pu	丸玉	14.3	15.6	12	
8	ガラス	b	蜜柑玉	22.3	25.2	2	
9	ガラス	bk+y+r	丸玉	26.9	30.9	2	
10	ガラス	pu	丸玉	25.8	30.2	2	
11	ガラス	g	蜜柑玉	6.6	11.3	2	
合計						84	

No	銭種類	初鋳年	外径mm
1	古寛永	1636	24.3
2	古寛永	1636	23.9
3	古寛永	1636	23.6
4	新寛永 (文銭)	1668	24.9
5	古寛永	1636	24.4
6	古寛永	1636	24.6
7	古寛永	1636	24.6
8	古寛永	1636	24.3
9	古寛永	1636	24.7
10	古寛永	1636	24.2
11	古寛永	1636	24.3
12	古寛永	1636	24.1
13	古寛永	1636	24.4
14	古寛永	1636	23.7
15	古寛永	1636	24.1
16	古寛永	1636	25.0
17	古寛永	1636	24.2
18	古寛永	1636	24.2
19	古寛永	1636	24.2
20	古寛永	1636	24.4
21	古寛永	1636	24.3
22	古寛永	1636	24.2
23	古寛永	1636	23.5
24	古寛永	1636	24.6
25	古寛永	1636	24.3
26	古寛永	1636	23.7
27	古寛永	1636	24.3
28	古寛永	1636	24.8
29	古寛永	1636	23.8
30	古寛永	1636	24.0
31	古寛永	1636	23.9
32	古寛永	1636	24.3
33	古寛永	1636	24.5
34	新寛永	1674	24.3
35	古寛永	1636	24.2
36	古寛永	1636	24.2
37	新寛永 (文銭)	1668	25.0
38	古寛永	1636	24.5
39	古寛永	1636	23.3
40	新寛永 (文銭)	1668	25.1
41	新寛永 (文銭)	1668	24.8
42	古寛永	1636	24.2
43	新寛永 (文銭)	1668	24.8
44	新寛永 (文銭)	1668	25.0
45	新寛永 (文銭)	1668	25.0
46	古寛永	1636	25.3
47	古寛永	1636	23.7
48	古寛永	1636	24.8
49	古寛永	1636	23.9
50	古寛永	1636	24.2
51	古寛永	1636	24.2
52	古寛永	1636	24.7
53	古寛永	1636	24.1
54	新寛永	1674	22.9
55	古寛永	1636	24.4
56	古寛永	1636	24.6
57	古寛永	1636	24.5
58	古寛永	1636	23.9
59	古寛永	1636	24.5
60	古寛永	1636	24.3
61	古寛永	1636	24.4

図5 資料番号 10: 児玉コレクション K-H13-0094 【Ⅱ期 (18 ～ 19 世紀)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	t	丸玉	9.7	12.0	11	
2	ガラス	db	丸玉	8.3	11.8	54	
3	ガラス	t	蜜柑玉	10.5	13.2	2	
4	ガラス	t	丸玉	15.1	16.2	4	
5	ガラス	t	丸玉	36.5	38.0	1	
6	ガラス	tr	丸玉	10.4	13.7	1	
7	ガラス	t	丸玉	16.7	20.6	1	
8	ガラス	t	丸玉	21.3	28.4	2	
小計	ガラス				76		
9	金属		丸玉	10.5	12.0	4	

No	銭種類	初鋳年	外径mm
1	新寛永 (文銭)	1668	24.8
2	新寛永 (文銭)	1668	24.9
3	新寛永 (文銭)	1668	24.7
4	新寛永	1674	24.9
5	新寛永 (文銭)	1668	24.9
6	新寛永 (文銭)	1668	24.9
7	古寛永	1636	24.7
8	新寛永	1674	24.8
9	古寛永	1636	24.4
10	古寛永	1636	24.9
11	新寛永 (文銭)	1668	24.8
12	新寛永	1674	24.7
13	新寛永 (文銭)	1668	24.8
14	古寛永	1636	24.6
15	古寛永	1636	24.2
16	古寛永	1636	24.3
17	新寛永 (文銭)	1668	24.4
18	古寛永	1636	24.2
19	新寛永 (文銭)	1668	24.8
20	新寛永	1674	24.4
21	古寛永	1636	24.6



図6 資料番号2：児玉コレクション H10-0051-07-103【Ⅱ期(18～19世紀)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	bk	丸玉	14.3	16.0	10	
2	ガラス	db	平玉	9.4	13.5	28	
3	ガラス	bk	丸玉	12.8	12.8	29	
4	ガラス	t	丸玉	7.1	9.1	3	
5	ガラス	t	丸玉	8.4	8.8	48	
6	ガラス	sv	丸玉	11.9	12.9	3	
7	ガラス	t	丸玉	20.2	22.8	1	
8	ガラス	tr	蜜柑玉	21.8	22.7	1	
9	ガラス	bg	蜜柑玉	29.8	29.9	1	
10	ガラス	bk	蜜柑玉	22.9	23.0	1	
小計	ガラス				125		
11	金属(鉛)		丸玉	34.9	37.0	1	

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm
1	古寛永	1636	24.8	1.0
2	古寛永	1636	24.1	1.1
3	古寛永	1636	24.0	1.1
4	新寛永	1674	22.7	1.0



図7 資料番号 15: 児玉コレクション K-H13-0212 【Ⅱ期 (18 ～ 19 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	t	丸玉	9.4	12.1	30	
2	ガラス	y	丸玉	9.5	11.6	4	
3	ガラス	bk	丸玉	9.5	10.4	36	
4	ガラス	tr	丸平玉	7.6	12.8	4	
5	ガラス	bk	丸平玉	6.6	11.1	29	
6	ガラス	t	丸玉	11.1	12.1	4	
7	ガラス	db	蜜柑玉	10.9	12.8	1	
合計						108	

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	新寛永 (文銭)	1668	25.1	1.2	
2	新寛永 (文銭)	1668	25.1	1.6	
3	新寛永	1674	24.6	1.1	
4	新寛永 (文銭)	1668	24.6	1.5	
5	新寛永	1674	25.5	1.3	
6	新寛永 (文銭)	1668	25.0	1.1	
7	新寛永	1674	24.6	1.5	
8	古寛永	1636	24.8	1.2	
9	古寛永	1636	24.1	1.3	
10	古寛永	1636	24.1	1.1	
11	新寛永	1674	25.0	1.4	
12	新寛永 (文銭)	1668	24.9	1.3	
13	古寛永	1636	24.4	1.4	
14	古寛永	1636	24.8	1.4	
15	新寛永	1674	23.4	1.0	小孔あり
16	新寛永	1674	25.7	1.2	
17	新寛永	1674	24.1	1.2	
18	新寛永	1741	23.4	1.2	背「元」高津銭
19	新寛永	1674	24.2	1.4	
20	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.5	
21	新寛永	1674	24.4	1.4	
22	古寛永	1636	24.7	1.2	
23	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.3	
24	新寛永	1674	23.0	1.3	
25	新寛永	1674	23.7	1.3	

図8 資料番号 16: 児玉コレクション K-II-700628 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～19 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	b+y	丸玉	10.9	13.1	4	
2	ガラス	b+r+g+y	平玉	12.5	14.8	2	トンボ玉(花文)
3	ガラス	w+b+gd	平玉	10.5	14.1	3	トンボ玉(流水)
4	ガラス	w+b+gd	平玉	10.8	14.3	1	トンボ玉(流水)
5	ガラス	tr	丸玉	5.5	6.5	8	トンボ玉(流水)
6	ガラス	y	丸玉	8.8	10.9	20	
7	ガラス	db	丸玉	9.7	12.4	55	
8	ガラス	t	丸玉	7.6	11.1	57	
9	ガラス	db	蜜柑玉	7.5	13.5	34	
10	ガラス	b	平玉	5.6	12.5	3	
11	ガラス	db	丸玉	7.6	9.1	14	
12	ガラス	t	平玉	8.3	12.8	19	
13	ガラス	bk	丸玉	7.8	10.0	9	
14	ガラス	dy	丸玉	8.8	11.6	1	
15	ガラス	g	平玉	6.3	9.2	2	
16	ガラス	y	丸玉	6.7	8.2	3	
17	ガラス	tr	丸玉	7.0	10.5	2	
18	ガラス	tr	丸玉	11.2	13.0	1	
19	ガラス	t	丸玉	20.0	24.7	2	
20	ガラス	g	蜜柑玉	17.2	14.0	2	
合計				242			

Nr	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	古寛永	1636	23.8	1.5	
2	古寛永	1636	24.0	1.2	
3	新寛永	1674	24.5	1.0	
4	古寛永	1636	23.6	1.3	
5	新寛永(文銭)	1668	24.7	1.2	
6	新寛永	1674	23.5	1.0	
7	古寛永	1636	24.0	1.1	
8	新寛永	1674	23.0	1.2	
9	新寛永	1674	22.9	1.0	
10	新寛永	1674	23.6	0.9	
11	古寛永	1636	24.5	1.0	
12	新寛永(文銭)	1668	24.6	1.0	
13	古寛永	1636	24.1	1.1	
14	新寛永	1674	22.8	1.0	
15	古寛永	1636	24.6	1.1	
16	古寛永	1636	23.8	0.9	
17	新寛永	1674	23.4	1.0	
18	新寛永	1674	23.9	1.2	
19	新寛永	1674	24.5	0.9	
20	新寛永(文銭)	1668	25.1	1.2	
21	古寛永	1636	24.4	1.1	
22	新寛永(文銭)	1668	25.1	1.2	
23	新寛永	1674	22.7	0.9	
24	古寛永	1636	24.3	1.1	
25	古寛永	1636	24.5	1.2	
26	古寛永	1636	24.4	1.2	
27	古寛永	1636	24.3	1.1	
28	新寛永(文銭)	1668	25.0	1.3	
29	新寛永(文銭)	1668	24.9	1.1	
30	新寛永(文銭)	1668	25.1	0.9	
31	古寛永	1636	24.5	1.1	
32	古寛永	1636	24.2	1.1	
33	新寛永(文銭)	1668	25.1	1.1	
34	古寛永	1636	24.3	1.1	
35	新寛永	1674	24.1	1.0	
36	新寛永	1741	22.4	0.9	背「元」高津銭
37	古寛永	1636	23.0	1.2	
38	古寛永	1636	24.0	1.1	
39	新寛永	1674	22.7	1.1	
40	新寛永	1674	24.1	0.9	
41	古寛永	1636	24.0	1.1	
42	新寛永(文銭)	1668	24.9	1.3	
43	古寛永	1636	24.2	1.2	
44	新寛永	1674	25.5	1.1	
45	古寛永	1636	22.9	1.2	
46	新寛永	1674	22.7	1.0	
47	古寛永	1636	24.3	1.4	
48	古寛永	1636	24.8	1.0	
49	新寛永(文銭)	1668	25.4	1.4	
50	新寛永(文銭)	1668	25.3	1.2	
51	新寛永(文銭)	1668	24.8	1.3	
52	新寛永	1674	24.0	1.2	
53	新寛永(文銭)	1668	24.9	1.2	
54	新寛永	1674	23.9	0.9	
55	新寛永(文銭)	1668	25.1	1.2	
56	新寛永(文銭)	1668	25.0	1.0	
57	新寛永	1674	25.5	1.2	
58	古寛永	1636	24.3	1.2	
59	古寛永	1636	24.9	0.9	
60	古寛永	1636	24.0	1.0	
61	古寛永	1636	24.4	1.1	
62	新寛永(文銭)	1668	25.0	1.1	
63	古寛永	1636	24.3	1.1	

図9 資料番号 12: 児玉コレクション K-H13-0101 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～ 19 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	bk	丸玉	8.0	11.0	33	
2	ガラス	bg	丸玉	7.3	10.8	88	
3	ガラス	db	丸玉	8.7	12.8	33	
4	ガラス	b	平玉	6.7	11.4	12	
5	ガラス	bk	丸玉	11.3	15.3	3	
6	ガラス	t	丸玉	10.1	12.4	40	
7	ガラス	t	丸玉	12.1	13.1	8	
8	ガラス	db	丸玉	11.1	13.9	1	
9	ガラス	t	平玉	9.3	13.8	5	
10	ガラス	db	丸玉	18.7	21.5	6	
11	ガラス	b	蜜柑玉	6.9	11.2	1	
合計					230		

No.	銭種類	初铸年	枚数	外径mm	厚さmm	備考
1	新寛永	1674	1	24.2		
2	新寛永	1674	1	24.6		
3	新寛永	1674	1	23.0		
4	新寛永	1674	1	22.7		
5	新寛永	1674	1	24.2		
6	新寛永(文銭)	1668	1	21.9		
7	新寛永	1674	1	22.7		
8	新寛永	1674	1	22.7		
9	古寛永	1636	1	24.1		
10	古寛永	1636	1	24.2		
11	新寛永	1741	1	22.1		有上「足」足尾銭
12	新寛永	1674	1	23.0		
13	新寛永	1674	1	22.9		
14	新寛永	1674	1	22.9		
15	新寛永	1674	1	22.7		
16	古寛永	1636	1	24.8		
17	新寛永	1674	1	23.3		
18	新寛永	1674	1	24.8		
19	新寛永(文銭)	1668	1	24.7		
20	新寛永	1674	1	22.7		
21	新寛永	1674	1	22.6		
22	新寛永	1674	1	22.3		
23	古寛永	1636	1	23.9		
24	新寛永	1674	1	23.5		
25	新寛永	1674	1	22.2		
26	新寛永	1674	1	23.3		
27	古寛永	1636	1	24.8		
28	古寛永	1636	1	24.3		
29	新寛永	1674	1	22.6		
30	新寛永	1674	1	24.3		
31	新寛永	1674	1	24.4		
32	新寛永(文銭)	1668	1	25.1		
33	新寛永	1674	1	23.7		
34	新寛永	1674	1	23.1		
35	新寛永(文銭)	1668	1	24.8		
36	新寛永	1674	1	24.1		
37	新寛永	1741	1	22.9		有上「元」島津銭
38	新寛永	1674	1	23.1		
39	古寛永	1636	1	24.0		
40	新寛永	1674	1	23.9		

図 10 資料番号 6；児玉コレクション K-H13-0074 【Ⅱb 期（18 世紀後半～19 世紀）】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	bk	丸玉	8.5	11.6	7	
2	ガラス	t	平玉	5.9	10.9	7	
3	ガラス	t	平玉	7.8	13.0	3	
4	ガラス	t	丸玉	9.8	11.9	2	
5	ガラス	db	丸玉	10.3	13.2	6	
6	ガラス	t	丸玉	13.9	14.3	3	
7	ガラス	bg	丸玉	10.9	15.0	6	
8	ガラス	t	丸玉	21.1	27.9	5	
9	ガラス	t	丸玉	27.3	28.0	1	
10	ガラス	t	丸玉	31.8	35.3	4	
11	ガラス	t	丸玉	15.4	38.5	4	
合計				48			

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	古寛永	1636	24.8	1.0	
2	古寛永	1636	24.2	1.3	
3	新寛永	1674	23.2	1.1	
4	新寛永	1674	22.9	1.1	
5	新寛永 (文銭)	1668	24.7	1.0	
6	古寛永	1636	24.7	1.0	
7	古寛永	1636	24.4	1.2	
8	新寛永	1674	24.5	1.0	
9	永徳通寶	1403	24.4	0.9	
10	新寛永	1674	24.6	1.1	
11	新寛永	1674	24.4	1.4	
12	古寛永	1636	24.9	1.1	
13	古寛永	1636	24.5	1.1	
14	新寛永 (文銭)	1668	25.1	1.1	
15	新寛永 (文銭)	1668	24.7	1.1	
16	古寛永	1636	23.5	0.9	
17	新寛永	1674	23.6	1.0	
18	新寛永	1674	23.5	1.0	
19	新寛永	1674	24.4	1.0	
20	新寛永	1674	24.2	1.1	
21	新寛永	1674	24.8	1.3	
22	新寛永	1674	24.1	0.9	
23	新寛永	1674	23.0	1.1	
24	新寛永	1674	23.1	0.8	
25	新寛永	1741	22.5	1.2	背「足」足尾銭
26	新寛永	1674	25.5	1.0	
27	新寛永	1674	21.9	0.9	
28	新寛永 (文銭)	1668	24.4	1.2	
29	新寛永	1674	24.2	1.1	
30	新寛永	1674	24.2	1.1	
31	新寛永	1674	23.5	1.0	
32	新寛永	1674	23.5	1.2	
33	新寛永	1674	22.5	1.0	
34	古寛永	1636	23.5	0.9	
35	古寛永	1636	23.5	1.1	
36	古寛永	1636	24.1	1.3	
37	新寛永	1674	23.8	1.0	
38	新寛永	1674	24.2	0.9	
39	古寛永	1636	24.9	1.0	
40	新寛永 (文銭)	1668	24.8	1.2	
41	新寛永	1674	22.7	1.1	
42	新寛永	1674	23.2	1.0	
43	古寛永	1636	23.9	1.3	
44	新寛永	1674	22.7	0.8	
45	新寛永	1674	23.4	0.9	
46	古寛永	1636	24.0	1.1	
47	新寛永	1674	24.3	0.9	
48	新寛永	1674	24.4	1.3	
49	新寛永 (文銭)	1668	25.0	1.0	
50	古寛永	1636	24.0	1.0	

図11 資料番号 13: 児玉コレクションK-H13-0114 【Ⅱb期 (18世紀後半～19世紀)】



No	銭種類	初鑄年	外径mm	厚さmm	備考
1	永楽通寶	1403	24.0	0.7	
2	新寛永	1674	23.8	1.1	
3	新寛永	1741	22.7	1.0	背「元」高津銭
4	古寛永	1636	23.9	1.1	
5	新寛永	1674	22.2	1.0	
6	永楽通寶	1403	23.5	1.0	
7	皇宋通寶(楷书)	1039	23.3	1.1	
8	新寛永(文銭)	1668	24.2	1.2	
9	永楽通寶	1403	23.2	0.6	
10	新寛永(文銭)	1668	25.1	1.2	
11	古寛永	1636	24.2	1.2	
12	新寛永(文銭)	1668	24.8	1.5	
13	古寛永	1636	24.3	1.2	
14	新寛永(文銭)	1668	24.8	1.1	
15	古寛永	1636	25.0	1.3	
16	新寛永(文銭)	1668	22.9	0.9	
17	新寛永	1674	25.2	1.1	
18	古寛永	1636	23.8	1.6	
19	古寛永	1636	23.8	1.4	

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	bk+gd	丸玉	8.5	11.2	6	
2	ガラス	g	丸玉	10.5	12.0	1	
3	ガラス	w+pu+b	丸玉	9.4	13.5	1	トンボ玉
4	ガラス	bk	丸玉	12.0	13.5	1	
5	ガラス	w+b	丸玉	10.7	12.6	1	トンボ玉
6	ガラス	bk+gd	丸玉	10.7	13.0	4	トンボ玉
7	ガラス	w	丸玉	12.6	17.5	2	
8	ガラス	tr	丸玉	14.1	12.5	1	
9	ガラス	w+db+b	丸玉	11.0	12.5	1	トンボ玉
10	ガラス	bk	蜜柑玉	15.5	16.6	4	
11	ガラス	db	丸玉	18.2	21.8	2	
12	ガラス	t	丸玉	19.8	22.3	2	
13	ガラス	bk	丸玉	23.2	25.3	2	
14	ガラス	bk	丸玉	26.1	29.0	4	
15	ガラス	w	丸玉	30.4	34.2	2	
16	ガラス	g	丸玉	9.1	11.4	1	
17	ガラス	w+r	丸玉	8.6	12.2	1	トンボ玉
18	ガラス	db	丸玉	11.5	13.0	1	
19	ガラス	w+g+b	丸玉	10.9	13.0	1	トンボ玉
20	ガラス	w	丸玉	13.7	15.3	1	
21	ガラス	w+pu+g	丸玉	10.7	13.1	1	トンボ玉
合計					40		

図 12 資料番号 18: 児玉コレクション K-II-700675 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～19 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	tr	丸玉	11.1	13.7	7	
2	ガラス	t	丸玉	10.7	12.2	69	
3	ガラス	bg	丸玉	10.4	12.9	12	
4	ガラス	db	丸玉	10.0	12.0	14	
5	ガラス	t	丸玉	13.5	16.3	3	
6	ガラス	db	菱柑玉	7.5	11.6	2	
7	ガラス	db	平玉	7.1	13.5	1	
8	ガラス	db	丸玉	14.0	17.0	1	
9	ガラス	t	丸玉	32.0	36.0	2	
10	ガラス	bg	平玉	9.5	13.6	1	
合計				112			

No	銭種類	初鋳年	外径mm	備考
1	新寛永 (文銭)	1668	24.9	
2	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.7	
3	新寛永	1674	22.7	
4	新寛永	1674	22.9	
5	新寛永	1674	23.1	
6	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.8	
7	新寛永 (鉄一文銭)	1768	22.9	青「千」右巻銭
8	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.9	
9	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.0	
10	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.3	
11	新寛永 (鉄一文銭)	1768	23.1	青「千」右巻銭
12	新寛永	1674	22.5	
13	新寛永 (鉄一文銭)	1768	22.7	青「千」右巻銭
14	古寛永	1636	24.2	
15	新寛永	1674	23.0	
16	新寛永	1674	24.0	
17	新寛永 (鉄一文銭)	1768	22.8	青「千」右巻銭
18	新寛永 (鉄一文銭)	1768	23.0	青「千」右巻銭
19	新寛永 (鉄一文銭)	1768	24.2	青「千」右巻銭
20	新寛永 (鉄一文銭)	1768	22.2	青「千」右巻銭
21	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.0	
22	天聖元寶 (楷书)	1023	23.8	
23	新寛永	1674	22.2	
24	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.7	
25	新寛永	1674	24.1	
26	新寛永	1674	23.9	
27	古寛永	1636	24.3	
28	新寛永	1674	24.5	
29	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.4	
30	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.4	
31	新寛永	1674	24.2	
32	新寛永	1674	23.1	
33	新寛永 (鉄一文銭)	1768	22.7	青「千」右巻銭
34	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.3	
35	古寛永	1636	24.9	
36	新寛永	1674	24.4	
37	新寛永 (鉄一文銭)	1768	23.1	青「千」右巻銭
38	新寛永 (鉄一文銭)	1768	23.1	青「千」右巻銭
39	新寛永	1674	25.1	
40	古寛永	1636	23.0	
41	新寛永	1674	22.7	
42	新寛永	1674	24.1	
43	古寛永	1636	24.1	
44	新寛永	1674	24.5	
45	古寛永	1636	23.5	
46	古寛永	1636	24.4	
47	新寛永	1674	22.0	
48	新寛永	1674	23.7	
49	新寛永 (文銭)	1668	24.9	
50	新寛永	1674	24.0	
51	新寛永	1674	23.3	
52	新寛永	1674	24.3	
53	新寛永 (文銭)	1668	25.0	
54	新寛永	1674	24.9	
55	古寛永	1636	24.3	
56	新寛永	1674	23.9	
57	新寛永	1674	22.7	
58	新寛永	1674	22.1	
59	新寛永 (文銭)	1668	25.0	
60	新寛永	1674	24.7	
61	新寛永	1674	24.6	
62	古寛永	1636	24.4	
63	新寛永	1674	24.3	
64	新寛永	1741	22.0	青「足」足尾銭
65	新寛永	1674	23.0	
66	新寛永	1674	23.0	
67	古寛永	1636	23.6	
68	新寛永	1674	23.3	
69	古寛永	1636	24.1	
70	新寛永	1674	23.1	
71	新寛永	1674	22.4	
72	新寛永	1674	24.2	
73	古寛永	1636	24.7	
74	古寛永	1636	24.9	
75	新寛永	1674	23.0	

図 13 資料番号 5：児玉コレクション K-H13-0071 【Ⅱb 期（18 世紀後半～19 世紀）】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	tr+r+g+w	丸玉	15.5	18.1	1	糸くず玉
2	ガラス	bk	丸玉	10.2	11.1	150	金箔?
3	ガラス	b	丸玉	8.9	11.4	34	
4	ガラス	bk+y	丸玉	10.2	11.6	1	トンボ玉
5	ガラス	b	丸玉	15.1	16.3	1	
6	ガラス	b	薬玉	14.1	12.7	1	
7	ガラス	tr	丸玉	11.6	13.8	1	
8	ガラス	t	丸玉	8.5	8.7	1	
9	ガラス	bk+w	丸玉	8.2	11.4	1	トンボ玉
小計	ガラス					191	
10	鉛		丸玉	16.7	17.2	2	

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	新寛永 (真鍮波銭)	1768	27.5	1.1	11波



図 14 資料番号 14: 児玉コレクション K-H13-0197 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～19 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	w	丸玉	10.4	14.4	13	
2	ガラス	t	丸玉	11.8	13.7	7	
3	ガラス	t	丸平玉	10.5	13.6	5	
4	ガラス	db	丸玉	10.2	13.1	12	
5	ガラス	w+b	丸玉	11.9	15.1	1	トンボ玉
6	ガラス	t	丸玉	15.1	16.9	1	
7	ガラス	t	丸玉	13.1	17.3	1	
8	ガラス	t	丸玉	15.8	19.2	1	
9	ガラス	t	丸玉	20.6	22.0	1	
10	ガラス	t	丸玉	14.9	17.0	1	
11	ガラス	t	丸玉	13.2	16.9	1	
12	ガラス	t	丸玉	16.9	19.5	1	
13	ガラス	t	丸玉	12.2	13.2	1	
合計					46		

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	古寛永	1636	24.5	1.3	
2	新寛永	1674	23.5	1.3	背「七」
3	新寛永	1674	22.6	1.0	
4	新寛永	1740	23.1	1.0	背「一」長崎一之瀬銭
5	新寛永	1674	22.4	1.1	背「九」
6	新寛永	1674	23.2	0.8	背「五」
7	新寛永	1767	23.2	1.3	背「元」長崎銭
8	新寛永	1741	22.7	0.8	背「元」高津銭
9	新寛永	1674	22.1	0.9	
10	新寛永	1741	22.9	1.0	背「元」高津銭
11	新寛永 (鉄一文銭)	1768	23.0	1.2	背「十」右巻銭
12	新寛永	1674	22.3	0.8	背「四」
13	新寛永	1674	22.7	1.2	背上「十」下「二」
14	常平通寶	1633	23.5	1.1	背上「戸」下「文」左「四」
15	新寛永 (文銭)	1668	24.7	1.4	
16	新寛永	1674	24.4	1.6	
17	新寛永	1674	23.2	1.2	
18	新寛永	1674	23.4	0.9	
19	新寛永	1674	23.0	0.9	
20	新寛永	1674	22.5	0.7	
21	古寛永	1636	23.9	1.0	
22	新寛永	1674	24.3	1.1	
23	新寛永	1674	22.9	0.9	
24	新寛永	1674	24.2	0.8	
25	新寛永	1674	23.9	1.0	
26	新寛永	1741	22.3	1.0	背「足」足尾銭
27	新寛永	1674	22.4	0.9	背「三」
28	新寛永	1674	23.9	1.1	
29	新寛永	1674	23.0	1.1	
30	新寛永	1717	22.6	1.0	背「佐」佐渡銭

図 15 資料番号 17: 児玉コレクション K-II-700667 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～19 世紀)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	w	丸玉	7.1	10.4	2	
2	ガラス	b	丸玉	10.3	11.5	4	
3	ガラス	or	丸玉	10.7	13.4	4	
4	ガラス	pk	丸玉	12.4	16.3	1	
5	ガラス	or	丸玉	14.5	19.5	1	
6	ガラス	b	丸玉	20.2	22.6	6	
7	ガラス	g	丸玉	19.3	22.2	7	
8	ガラス	or	丸玉	21.1	22.4	8	
9	ガラス	bg	丸玉	22.0	24.5	2	
合計					35		

No	銭種類	初鋳年	外径mm	備考
1	道光通寶	1820	23.6	背面 寶源局
2	祥符元寶 (楷書)	1008	23.9	
3	崇祐元寶 (篆書)	1034	24.5	
4	嘉慶通寶	1795	24.0	背面 寶雲局
5	嘉慶通寶	1795	23.4	背面 寶泉局
6	常平通寶	1633	24.1	背面 上「戸」下「三」左「星」
7	乾隆通寶	1735	23.6	背面 寶源局
8	道光通寶	1820	23.8	背面 寶源局
9	乾隆通寶	1735	23.3	背面 湖北寶武局
10	道光通寶	1820	21.9	背面 寶源局
11	常平通寶	1633	24.5	背面 上「戸」下「五」左「月」
12	常平通寶	1633	24.5	背面 上「珍」下「三」左「星」
13	道光通寶	1820	24.5	背面 廣西寶桂局
14	道光通寶	1820	23.3	背面 寶泉局
15	道光通寶	1820	22.3	背面 寶源局
16	古貨永	1636	22.7	
17	常平通寶	1633	23.6	背面 上「戸」下「往」左「三」
18	道光通寶	1820	20.3	背面 寶源局



図 16 資料番号 7 : 児玉コレクション K-H13-0084 【Ⅲa 期 (19 世紀)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	t	蜜柑玉	20.2	21.2	1	
2	ガラス	bg	平玉	6.8	9.9	4	
3	ガラス	db	蜜柑玉	7.3	11.3	8	
4	ガラス	t	丸玉	11.8	14.1	18	
5	ガラス	db	丸玉	16.0	17.4	6	
6	ガラス	b	蜜柑玉	12.9	16.5	3	
7	ガラス	bg	蜜柑玉	6.2	10.5	3	
8	ガラス	db	蜜柑玉	9.9	12.9	3	
9	ガラス	db	平玉	10.5	15.4	3	
10	ガラス	pu	蜜柑玉	8.8	14.3	3	
11	ガラス	bg	蜜柑玉	10.2	13.3	1	
12	ガラス	bg	平玉	10.4	14.0	1	
13	ガラス	g	丸玉	10.5	12.0	1	
小計 ガラス				55			
14	木		算盤玉	11.8	17.8	60	

No.	銭種類	初鋳年	外径mm	備考
1	箱館通寶	1856	22.0	鉄銭
2	箱館通寶	1856	22.0	鉄銭
3	箱館通寶	1856	22.2	鉄銭
4	箱館通寶	1856	21.9	鉄銭
5	箱館通寶	1856	22.5	鉄銭
6	箱館通寶	1856	22.9	鉄銭
7	箱館通寶	1856	23.0	鉄銭
8	箱館通寶	1856	21.9	鉄銭
9	箱館通寶	1856	22.0	鉄銭
10	箱館通寶	1856	21.8	鉄銭
11	箱館通寶	1856	22.0	鉄銭
12	箱館通寶	1856	21.5	鉄銭
13	箱館通寶	1856	21.2	鉄銭
14	箱館通寶	1856	22.2	鉄銭
15	箱館通寶	1856	21.3	鉄銭
16	箱館通寶	1856	22.5	鉄銭
17	箱館通寶	1856	22.3	鉄銭
18	箱館通寶	1856	22.8	鉄銭
19	箱館通寶	1856	21.9	鉄銭
20	箱館通寶	1856	22.2	鉄銭
21	箱館通寶	1856	22.1	鉄銭
22	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.4	青朱書き「アイヌ」
23	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.7	青朱書き「アイヌ」
24	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.2	青朱書き「アイヌ」
25	箱館通寶	1856	21.9	鉄銭
26	箱館通寶	1856	21.1	鉄銭
27	箱館通寶	1856	21.7	鉄銭
28	箱館通寶	1856	21.4	鉄銭
29	箱館通寶	1856	23.1	鉄銭
30	箱館通寶	1856	22.5	鉄銭
31	箱館通寶	1856	23.1	鉄銭
32	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.3	青朱書き「アイヌ」
33	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.7	青朱書き「アイヌ」
34	土曜永	1636	24.3	青朱書き「アイヌ」
35	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.2	青朱書き「アイヌ」
36	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.4	青朱書き「アイヌ」
37	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.5	青朱書き「アイヌ」
38	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.6	青朱書き「アイヌ」
39	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.4	青朱書き「アイヌ」
40	新寛永	1674	22.2	青朱書き「アイヌ」
41	新寛永	1674	24.3	青朱書き「アイヌ」
42	新寛永	1674	23.1	青朱書き「アイヌ」
43	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.5	青朱書き「アイヌ」
44	仙臺通寶	1784	22.2	鉄銭
45	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.8	青朱書き「アイヌ」
46	新寛永 (鉄一文銭)	1738	22.8	青朱書き「アイヌ」
47	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.2	青朱書き「アイヌ」
48	新寛永 (鉄一文銭)	1738	23.2	青朱書き「アイヌ」



図 17 資料番号 1：馬場コレクション 700076 【Ⅲb 期（19 世紀後半）】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	lb	不定形	6.8	8.0	2	
2	ガラス	lb	平玉	5.7	8.7	2	
3	ガラス	lb	丸玉	11.4	11.9	8	
4	ガラス	dy	丸玉	10.5	12.3	2	
5	ガラス	b	丸玉	11.2	12.9	2	
6	ガラス	g	丸玉	12.4	13.6	2	
7	ガラス	cl+b+w	丸玉	13.7	13.8	1	糸くず玉
8	ガラス	cl+r+w+g	丸玉	14.8	14.6	1	糸くず玉
9	ガラス	or	丸玉	13.0	14.2	1	
10	ガラス	pu	丸玉	12.8	14.9	1	
11	ガラス	t	平玉	10.6	16.5	1	被熱?
12	ガラス	mk	丸玉	14.3	16.3	1	
13	ガラス	t	丸玉	18.2	22.0	2	
14	ガラス	b	丸玉	21.0	22.7	2	
15	ガラス	r	丸玉	22.9	23.3	8	
16	ガラス	b	丸玉	19.2	24.0	1	
17	ガラス	db	丸玉	19.5	26.4	5	
18	ガラス	tr	丸玉	24.5	27.4	1	
19	ガラス	t	丸玉	22.6	26.4	1	
小計 ガラス				44			
20	鉛		丸玉	30.0	33.1	1	



図 18 資料番号 11: 児玉コレクション K-H13-0095 【Ⅲb 期 (19 世紀後半)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	y	蜜柑玉	15.9	11.5	2	
2	ガラス	bk + gd	丸玉	10.3	12.2	11	
3	ガラス	b + w + g + pu	丸玉	12.6	12.6	1	トンボ玉
4	ガラス	w + b + pu + gd	丸玉	11.0	14.1	1	トンボ玉
5	ガラス	w	丸玉	11.0	13.9	3	
6	ガラス	b	丸玉	6.8	8.5	7	
7	ガラス	db	丸玉	7.3	9.1	2	
8	ガラス	tr	丸玉	8.8	10.1	4	
9	ガラス	w + b	丸玉	9.3	10.8	4	トンボ玉
10	ガラス	bk	丸玉	9.9	12.6	1	
11	ガラス	bk	丸玉	15.3	17.1	8	
12	ガラス	w	丸玉	13.9	16.8	2	
13	ガラス	tr	丸玉	12.0	13.8	13	
14	ガラス	bk + y	丸玉	12.1	14.5	4	トンボ玉
15	ガラス	tr + w + bk + br + b +	丸玉	13.5	16.8	1	トンボ玉
16	ガラス	tr + r + b	丸玉	13.7	17.6	1	トンボ玉
17	ガラス	t	丸玉	16.8	17.8	8	
18	ガラス	tr	蜜柑玉	26.1	28.5	2	
19	ガラス	t	丸玉	8.6	8.3	5	
20	ガラス	t	丸玉	4.2	8.2	2	
21	ガラス	tr + gd + w + b	丸玉	13.6	14.5	2	トンボ玉
22	ガラス	tr + y + r + g + w + b	丸玉	16.1	16.4	1	トンボ玉
23	ガラス	b + r + db + y + g + w	丸玉	11.0	11.7	1	トンボ玉
24	ガラス	w + r + y + g	丸玉	11.6	14.0	1	トンボ玉
25	ガラス	w + b + db + gy	丸玉	10.5	13.4	1	トンボ玉
26	ガラス	tr + or + w + b	丸玉	15.1	16.5	1	トンボ玉
27	ガラス	tr + g + db + b + r + y	丸玉	15.9	17.5	1	トンボ玉
小計	ガラス			90			
28	金属		ボタン	12.9	20.4	2	

No	銭種類	初鑄年	外径mm	厚さmm
1	古寛永	1636	24.0	1.1
2	新寛永	1674	23.0	1.0
3	新寛永	1674	24.6	1.0
4	新寛永	1674	23.9	1.2
5	古寛永	1636	24.3	1.2
6	新寛永	1674	22.9	0.9
7	新寛永 (文銭)	1668	24.8	1.1
8	新寛永	1674	24.4	1.2
9	新寛永	1674	22.8	0.9
10	古寛永	1636	23.3	1.0
11	新寛永 (文銭)	1668	24.9	0.9

図 19 資料番号 19: 児玉コレクション K-II-700689 【Ⅲb 期 (19 世紀後半)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	db	丸玉	18.2	21.5	1	
2	ガラス	bg	平玉	7.0	11.7	1	
3	ガラス	t	丸玉	9.2	12.5	89	
4	ガラス	t	丸玉	9.8	13.2	18	
5	ガラス	b	蜜柑玉	7.3	12.6	4	
6	ガラス	y+or	丸玉	11.7	11.7	1	トンボ玉
7	ガラス	or	丸玉	9.7	13.3	16	
8	ガラス	t	丸玉	15.7	18.8	6	
9	ガラス	b	丸玉	14.4	16.7	6	
10	ガラス	tr	丸玉	10.0	12.6	2	
11	ガラス	g	丸玉	10.2	12.5	2	
12	ガラス	t	白玉	10.2	14.9	1	
13	ガラス	dy	丸玉	13.8	18.8	1	
14	ガラス	lb	丸玉	8.9	13.3	1	
15	ガラス	db	丸玉	15.0	16.8	7	
16	ガラス	dy	丸玉	13.9	16.1	5	
17	ガラス	pu	丸玉	9.1	12.6	1	
18	ガラス	lb	丸玉	8.9	12.5	1	
19	ガラス	db	蜜柑玉	10.9	12.7	1	
20	ガラス	g	蜜柑玉	12.9	13.4	1	
21	ガラス	bk+y+or	丸玉	7.7	11.8	2	ニンカリのトンボ玉
22	ガラス	w	丸玉	9.6	12.4	2	ニンカリの玉
合計	ガラス					169	

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm
1	古寛永	1636		
2	古寛永	1636		
3	新寛永 (文銭)	1668		
4	古寛永	1636		
5	古寛永	1636		
6	古寛永	1636		
7	新寛永 (文銭)	1668		
8	新寛永 (文銭)	1668		
9	古寛永	1636		
10	新寛永 (文銭)	1668		
11	古寛永	1636		
12	古寛永	1636		
13	新寛永	1674		
14	古寛永	1636		
15	古寛永	1636		
16	新寛永 (文銭)	1668		
17	古寛永	1636		
18	古寛永	1636		
19	古寛永	1636		
20	新寛永	1674		
21	新寛永 (文銭)	1668		
22	新寛永 (文銭)	1668		
23	天聖元寶 (篆書)	1023		
24	新寛永 (文銭)	1668		
25	古寛永	1636		
26	新寛永 (文銭)	1668		
27	古寛永	1636		
28	新寛永 (文銭)	1668		
29	古寛永	1636		
30	古寛永	1636		
31	新寛永 (文銭)	1668		
32	新寛永 (文銭)	1668		
33	古寛永	1636		
34	古寛永	1636		
35	古寛永	1636		
36	新寛永	1674		



図 20 資料番号 24: 苫小牧市美術博物館 493【Ⅱ期(18～19世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	db	丸玉	14.3	20.7	1	
2	ガラス	t	平玉	6.5	11.0	24	
3	ガラス	t	丸玉	9.0	11.2	5	
4	ガラス	g	丸玉	7.9	12.9	2	
5	ガラス	db	丸玉	10.9	12.1	5	
6	ガラス	w+b	丸玉	9.9	12.2	5	トンボ玉
7	ガラス	b	丸玉	8.5	11.2	24	
8	ガラス	b+y	丸玉	8.2	11.8	1	トンボ玉
9	ガラス	br+b+w	丸玉	10.0	12.9	2	トンボ玉
10	ガラス	w	丸玉	9.7	13.3	20	
11	ガラス	b+y	丸玉	10.6	12.1	4	トンボ玉
12	ガラス	db	丸玉	10.4	14.1	12	
13	ガラス	db+w	丸玉	11.5	14.4	1	トンボ玉
14	ガラス	w+b+g	丸玉	10.1	14.6	1	トンボ玉
15	ガラス	t	丸玉	11.7	13.6	6	
16	ガラス	w+db	丸玉	11.7	14.4	2	トンボ玉
17	ガラス	t	丸玉	10.0	14.7	2	
18	ガラス	tr	平玉	5.8	9.3	1	
19	ガラス	db	丸玉	7.1	10.6	1	
20	ガラス	bk+y	丸玉	8.2	12.0	2	トンボ玉
21	ガラス	w+g	丸玉	9.4	10.8	1	トンボ玉
22	ガラス	w+br	丸玉	9.7	11.8	1	トンボ玉
23	ガラス	br+w+b	丸玉	9.6	12.4	1	トンボ玉
24	ガラス	db+w+y	丸玉	12.4	13.2	2	トンボ玉
25	ガラス	w+b+b	丸玉	10.5	14.2	1	トンボ玉
26	ガラス	ly+br+y	丸玉	13.0	14.4	1	トンボ玉
27	ガラス	bk+w	丸玉	8.0	9.9	2	トンボ玉
28	ガラス	w+b	丸玉	9.0	11.2	2	トンボ玉
29	ガラス	b	蜜柑玉	7.3	13.5	1	
30	ガラス	w+b+g+y	丸玉	11.4	12.3	1	トンボ玉
31	ガラス	t	丸平玉	9.1	14.2	1	
32	ガラス	bn	蜜柑玉	12.9	15.4	2	
33	ガラス	w+pu	丸玉	11.0	14.6	4	トンボ玉
34	ガラス	tr+b	丸玉	8.6	11.7	4	トンボ玉
35	ガラス	t	丸玉	8.3	11.4	2	
36	ガラス	b	蜜柑玉	6.7	12.6	1	
37	ガラス	t	蜜柑玉	15.7	18.5	1	
38	ガラス	bu+y	丸玉	9.6	13.3	1	トンボ玉
39	ガラス	bk+w	丸玉	12.9	14.6	2	トンボ玉
40	ガラス	w+y+br	丸玉	10.8	15.3	2	トンボ玉
41	ガラス	w+db	丸玉	11.9	14.5	1	トンボ玉
42	ガラス	t	丸玉	13.2	15.9	2	
43	ガラス	w+br+y	丸玉	12.0	16.0	4	トンボ玉
44	ガラス	lb	丸玉	14.7	16.3	8	
45	ガラス	t	丸玉	15.2	19.3	8	
46	ガラス	g	蜜柑玉	24.8	31.2	1	
47	ガラス	t	丸玉	31.3	37.3	2	
48	ガラス	t	白玉	12.2	19.7	1	
49	ガラス	w+b+bk	丸玉	12.5	16.2	1	トンボ玉
50	ガラス	w+br+y	丸玉	12.1	16.4	5	トンボ玉
51	ガラス	g	丸玉	10.2	13.8	1	
52	ガラス	db	舞盤形	10.5	15.6	1	
53	ガラス	t	蜜柑玉	12.4	15.9	1	
54	ガラス	t	丸玉	23.7	27.9	2	
55	ガラス	tr+gd	丸玉	14.2	15.4	2	金箔入り
56	ガラス	bk+y	丸玉	9.8	11.9	2	トンボ玉
57	ガラス	pu+w	丸玉	10.5	13.8	1	トンボ玉
58	ガラス	b	蜜柑玉	23.0	29.5	1	
合計	ガラス				198		

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	新寛永 (文銭)	1668			
2	古寛永	1636			
3	新寛永 (文銭)	1668			
4	新寛永 (文銭)	1668			
5	新寛永 (文銭)	1668			
6	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
7	新寛永 (真鍮波銭)	1768	紐密につき計測不能		背11波
8	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
9	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
10	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
11	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
12	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
13	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
14	新寛永 (文銭)	1668			
15	新寛永 (文銭)	1668			
16	新寛永 (文銭)	1668			
17	新寛永 (文銭)	1668			
18	新寛永 (文銭)	1668			
19	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背21波
20	新寛永 (真鍮波銭)	1768	紐密につき計測不能		背11波
21	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背21波
22	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
23	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
24	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
25	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波
26	新寛永 (真鍮波銭)	1768			背11波

図 21 資料番号 23: 苫小牧市美術博物館 492 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～19 世紀)】

No	錢種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	新寛永	1674	24.4	1.0	
2	新寛永(鉄一文銭)	1738	22.3	1.3	
3	新寛永(高津銭)	1741	22.6	1.1	背「元」
4	新寛永(高津銭)	1741	23.0	0.7	背「元」
5	新寛永(鉄一文銭)	1738	24.0	1.2	
6	新寛永	1674	22.8	0.8	
7	新寛永(鉄一文銭)	1738	22.4	1.1	
8	新寛永	1674	24.3	1.3	
9	古寛永	1636	24.5	1.2	
10	新寛永	1674	24.2	1.3	
11	新寛永	1674	24.6	1.2	
12	古寛永	1636	24.2	1.1	
13	新寛永(鉄一文銭)	1738	22.2	1.4	
14	古寛永	1636	24.4	1.2	
15	新寛永(真鍮波銭)	1768	28.0	1.1	背11波
16	新寛永(文銭)	1668	24.7	1.0	
17	新寛永(文銭)	1668	24.8	1.0	
18	新寛永	1674	23.8	0.8	
19	新寛永(高津銭)	1741	22.8	1.2	背「元」
20	新寛永(鉄一文銭)	1738	22.6	1.4	
21	新寛永	1674	22.7	1.2	
22	新寛永(文銭)	1668	24.7	1.3	
23	新寛永	1674	23.1	0.9	
24	新寛永	1674	22.9	1.0	
25	絵銭		25.2	1.0	「狼曳駒」
26	古寛永	1636	23.7	1.0	
27	新寛永(真鍮波銭)	1768	28.0	1.1	背11波
28	新寛永(真鍮波銭)	1768	27.8	1.0	背11波
29	新寛永(真鍮波銭)	1768	28.1	1.1	背11波
30	崇寧通寶	1102	34.9	2.6	大銭
31	新寛永(鉄一文銭)	1738	25.3	1.4	
32	新寛永(鉄一文銭)	1738	23.8	1.3	
33	新寛永(鉄一文銭)	1738	22.7	1.1	
34	新寛永(鉄一文銭)	1738	22.4	1.3	背「久」
35	新寛永(鉄一文銭)	1738	23.1	1.6	
36	古寛永	1636	23.6	1.1	
37	新寛永	1674	22.9	0.9	
38	新寛永	1674	23.9	1.1	
39	新寛永	1674	22.2	0.6	
40	新寛永	1674	22.1	0.8	
41	新寛永	1674	23.4	0.9	
42	新寛永	1674	22.3	0.9	
43	新寛永	1674	21.9	1.3	
44	絵銭		22.0	1.3	「狼曳駒」
45	新寛永	1674	22.9	1.1	
46	新寛永	1674	22.5	0.9	
47	古寛永	1636	22.6	0.8	
48	新寛永	1674	23.2	1.0	
49	新寛永(高津銭)	1741	21.5	0.8	背「元」
50	新寛永(高津銭)	1741	22.5	0.8	背「元」
51	新寛永(長崎銭)	1767	22.9	0.9	背「長」
52	新寛永(高津銭)	1741	22.4	0.8	背「元」
53	新寛永(文銭)	1668	24.9	1.1	
54	新寛永(文銭)	1668	24.7	1.0	
55	新寛永(文銭)	1668	24.8	1.1	
56	新寛永(文銭)	1668	25.1	1.0	
57	新寛永(真鍮波銭)	1768	28.0	1.0	背11波
58	新寛永(真鍮波銭)	1768	27.8	1.0	背11波
59	新寛永(真鍮波銭)	1768	27.7	1.2	背21波
60	崇寧重寶(大銭)	1102	35.2	1.8	当十銭

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	b	丸玉	10.5	12.8	2	
2	ガラス	t	丸玉	10.6	13.0	6	
3	ガラス	db	丸玉	10.1	13.0	15	
4	ガラス	bg	丸玉	10.0	13.0	2	
5	ガラス	t	丸玉	10.6	13.8	4	
6	ガラス	bk+w	蜜柑玉	13.2	12.3	2	トンボ玉
7	ガラス	y+r+g	蜜柑玉	13.5	18.7	1	トンボ玉
8	ガラス	dg	白玉	8.2	17.1	2	
9	ガラス	dy	丸玉	13.8	16.9	2	
10	ガラス	y+r	蜜柑玉	14.5	17.3	3	トンボ玉
11	ガラス	tr	丸玉	14.8	16.1	2	
12	ガラス	tr+w+y+g	丸玉	14.4	16.1	2	トンボ玉
13	ガラス	bg+w+pk	丸玉	14.0	15.7	2	トンボ玉
14	ガラス	w+b	蜜柑玉	13.9	16.1	2	トンボ玉
15	ガラス	bk+y	丸玉	14.0	15.2	1	トンボ玉
16	ガラス	bk	丸玉	15.8	18.8	1	
17	ガラス	bk+y	丸玉	15.7	17.1	3	トンボ玉
18	ガラス	b	蜜柑玉	6.3	11.0	2	
19	ガラス	w+y+g+b	丸玉	13.3	14.9	1	トンボ玉
20	ガラス	lb+w+b+g	丸玉	14.0	17.1	1	トンボ玉
21	ガラス	b	丸平玉	21.2	27.7	1	
22	ガラス	t	丸玉	30.6	38.0	1	
23	ガラス	bk+gr	丸玉	13.6	16.2	1	トンボ玉
24	ガラス	lb+w+b	丸玉	14.6	17.0	1	トンボ玉
25	ガラス	t	丸玉	27.1	30.1	1	
26	ガラス	w	丸平玉	28.7	39.2	1	
合計	ガラス			62			

図 22 資料番号 25: 苫小牧市美術博物館 453【Ⅱb 期(18 世紀後半～19 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	t	平玉	6.3	10.8	9	
2	ガラス	b + w	丸玉	10.9	13.5	1	トンボ玉
3	ガラス	tr	丸玉	7.8	10.3	15	
4	ガラス	db	丸玉	8.3	12.7	4	
5	ガラス	w	丸玉	9.4	10.1	2	
6	ガラス	t	丸玉	7.9	9.1	6	
7	ガラス	t	丸玉	9.1	12.4	1	
8	ガラス	w	丸玉	7.5	9.2	3	
9	ガラス	t	白玉	8.2	10.2	2	
10	ガラス	w	蜜柑玉	6.2	9.3	2	
11	ガラス	b	丸玉	5.6	8.7	1	
12	ガラス	tr	丸玉	7.5	8.3	1	水晶?
13	ガラス	db	丸玉	5.1	7.4	5	
14	ガラス	w	丸玉	14.4	17.3	5	
15	ガラス	db	丸玉	9.3	10.7	24	
16	ガラス	br	蜜柑玉	20.9	22.6	2	
18	ガラス	b + w + or +	算盤玉	10.3	17.5	4	トンボ玉
19	ガラス	bk + r	丸玉	13.4	15.9	1	トンボ玉
20	ガラス	w	丸玉	9.4	12.1	6	
21	ガラス	tr	丸玉	13.0	13.9	3	水晶?
22	ガラス	lg	丸玉	10.8	12.5	4	
23	ガラス	t	楕玉	16.2	14.9	2	
24	ガラス	b	丸平玉	10.6	14.7	1	
25	ガラス	t	丸玉	12.6	13.8	5	
26	ガラス	b	白玉	13.7	19.6	2	
27	ガラス	t	丸玉	32.3	37.0	1	
28	ガラス	lb	平玉	6.4	9.1	1	
29	ガラス	tr	丸玉	14.1	14.7	2	
30	ガラス	g	丸玉	6.4	8.2	3	
31	ガラス	tr	丸玉	9.4	9.8	1	水晶?
32	ガラス	bk	丸玉	12.1	14.9	3	
33	ガラス	db + w + y	丸玉	13.4	14.3	1	トンボ玉
34	ガラス	b	白玉	11.7	13.1	3	
35	ガラス	db	丸玉	8.5	9.2	1	
36	ガラス	w + br	丸玉	9.7	12.8	1	トンボ玉
37	ガラス	b	丸玉	5.6	9.3	1	
38	ガラス	b	平玉	6.6	10.4	1	菱形
39	ガラス	or	丸玉	16.6	17.3	1	
40	ガラス	tr	丸玉	10.3	10.9	1	
41	ガラス	tr	丸玉	7.1	7.7	9	
42	ガラス	b	平玉	4.9	9.1	1	
43	ガラス	or	丸玉	11.7	11.4	2	
44	ガラス	bk	平玉	6.4	9.9	1	
合計				145			
17	ジャスパー		丸玉	10.5	10.7	1	
45	真鍮		鈴	22.2	15.4	4	
46	猛禽類		爪	65.6	21.2	2	根元をアザラシの皮で巻いている
47	アザラシ		毛皮			2	

No	銭種類	初鋳年	外径mm	厚さmm	備考
1	永楽通寶	1403	24.7	1.0	
2	永楽通寶	1403	22.9	0.9	
3	永楽通寶	1403	24.3	1.2	
4	永楽通寶	1403	23.7	0.9	
5	康熙通寶	1661	23.7	0.9	背「廣」 広東省局
6	永楽通寶	1403	24.4	0.9	
7	永楽通寶	1403	24.9	0.7	
8	永楽通寶	1403	25.1	0.8	
9	紹聖元寶 (行書)	1094	23.2	1.3	
10	永楽通寶	1403	25.1	0.9	
11	永楽通寶	1403	24.9	1.3	
12	永楽通寶	1403	25.0	1.2	
13	永楽通寶	1403	23.2	1.1	
14	永楽通寶	1403	23.2	1.1	
15	新寛永 (真鍮波銭)	1768	27.3	0.8	背11波
16	永楽通寶	1403	24.7	1.2	
17	新寛永 (真鍮波銭)	1768	27.9	1.2	背11波
18	永楽通寶	1403	25.1	1.1	
19	嘉慶通寶	1795	24.2	0.9	背「泉」 寶泉局
20	永楽通寶	1403	23.5	1.3	
21	永楽通寶	1403	24.4	1.3	
22	永楽通寶	1403	24.2	1.1	
23	永楽通寶	1403	24.3	0.8	
24	永楽通寶	1403	24.0	0.8	

図 23 資料番号 26: 旭川市博物館 7704 【Ⅱb 期 (18 世紀後半～ 19 世紀)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	bk+w	丸玉	13.5	15.2	4	トンボ玉
2	ガラス	bk+y	丸玉	13.2	15.3	2	トンボ玉
3	ガラス	lb	丸玉	13.0	16.4	2	
4	ガラス	bk+y	丸玉	12.7	14.0	6	トンボ玉
5	ガラス	t	丸玉	15.2	17.5	3	
6	ガラス	bk+lb+y	丸玉	14.4	18.1	3	トンボ玉
7	ガラス	bk+w	丸玉	17.7	20.0	1	トンボ玉
8	ガラス	bk	丸玉	16.2	20.0	2	
9	ガラス	b	丸玉	16.1	16.6	1	
10	ガラス	b	丸玉	16.4	18.6	9	
11	ガラス	t+bk	丸玉	17.7	20.1	2	トンボ玉
12	ガラス	bk+ch	丸玉	19.4	22.6	2	トンボ玉
13	ガラス	t	丸玉	21.3	22.6	2	
14	ガラス	bk	丸玉	16.0	20.1	2	
15	ガラス	cl+b+ch	丸玉	19.9	22.6	2	トンボ玉
16	ガラス	bk+y	丸玉	32.5	37.0	2	
合計	ガラス				45		

No	銭種類	初鑄年	外径mm	厚さmm
1	新寛永 (文銭)	1668	25.1	1.2
2	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.1
3	新寛永 (文銭)	1668	25.1	1.1
4	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.2
5	新寛永 (文銭)	1668	24.5	1.2
6	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.1
7	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.2
8	新寛永 (文銭)	1668	25.3	1.2
9	新寛永 (文銭)	1668	24.9	1.1
10	新寛永 (文銭)	1668	25.0	1.1
11	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.2
12	新寛永 (文銭)	1668	25.2	1.2



図 24 資料番号 20: 札幌国際大学 40 【(年代不明)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	t+鍍金?	撒玉	17.3	9.9	2	
2	ガラス	t	丸玉	13.0	14.2	4	
3	ガラス	t	丸玉	14.1	14.9	14	
4	ガラス	b	丸玉	11.7	12.7	5	
5	ガラス	db	丸玉	11.1	14.3	1	
6	ガラス	t鍍金?	撒玉	15.7	13.3	2	
7	ガラス	db	丸玉	14.1	16.7	18	
8	ガラス	b+鍍金文様	丸玉	14.4	14.4	2	
10	ガラス	y	丸玉	17.0	19.2	2	
11	ガラス	t	丸玉	32.2	38.3	2	
小計	ガラス				52		
9	金属		丸平玉	11.6	15.9	2	中空透かし

No	銭種類	初鋳年	枚数	外径mm	厚さmm	備考
1	聖宋元寶 (行書)	1101	1	23.5	1.1	
2	新寛永	1741	1	24.5	0.9	背「元」高津銭
3	紹聖元寶 (行書)	1094	1	24.4	1.0	
4	開元通寶 (隸書)	621	1	23.8	1.0	
5	洪武通寶	1368	1	19.6	1.3	
6	熙寧元寶 (楷書)	1068	1	23.4	1.1	
7	新寛永	1674	1	22.1	0.8	
8	元符通寶 (篆書)	1098	1	22.8	1.2	
9	元祐通寶 (篆書)	1086	1	24.1	1.3	
10	洪武通寶	1368	1	19.6	1.3	
11	嘉祐通寶 (楷書)	1056	1	22.6	1.1	
12	治平元寶 (篆書)	1064	1	23.8	1.3	
13	洪武通寶	1368	1	20.8	1.2	
14	元豊通寶 (行書)	1078	1	24.3	1	



図 25 資料番号 21: 札幌国際大学 42【Ⅱb 期 (18 世紀後半～ 19 世紀)】

種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	lb	平玉	4.1	9.7	1	
2	ガラス	lb	平玉	5.9	10.7	23	
3	ガラス	db	丸玉	11.1	14.6	6	
4	ガラス	lb	丸玉	8.5	10.7	20	
5	ガラス	tr	丸玉	8.1	12.0	24	
6	ガラス	bg	丸玉	7.1	11.1	1	
7	ガラス	bg	丸玉	8.4	11.6	1	
8	ガラス	t	丸玉	13.4	14.7	2	
9	ガラス	db	丸玉	12.4	13.2	1	
10	ガラス	db	丸玉	15.1	17.2	5	
11	ガラス	t	丸玉	21.8	32.4	2	
合計	ガラス					86	

No	銭種類	初鑄年	外径mm	厚さmm
1	咸平元寶 (楷書)	998	22.0	1.2
2	洪武通寶	1368	22.9	1.4
3	皇宋通寶 (楷書)	1039	22.4	1.1
4	聖宋元寶 (行書)	1101	22.9	0.9
5	元豐通寶 (行書)	1078	23.7	0.9
6	嘉祐元寶 (篆書)	1056	24.5	1.0
7	治平元寶 (楷書)	1064	24.5	1.5
8	元符通寶 (篆書)	1098	23.7	1.1
9	洪武通寶	1368	23.8	1.6
10	新寛永 (文銭)	1668	25.1	1.0
11	聖宋元寶 (行書)	1101	22.2	1.0
12	紹聖元寶 (行書)	1094	23.5	1.1
13	元豐通寶 (行書)	1078	23.6	1.0
14	皇宋通寶 (楷書)	1039	24.9	1.1
15	政和通寶 (篆書)	1111	23.8	0.8
16	熙寧元寶 (楷書)	1068	20.4	1.3
17	新寛永	1674	22.9	0.8
18	皇宋通寶 (楷書)	1039	24.5	1.0
19	洪武通寶	1368	22.6	1.0
20	洪武通寶	1368	22.6	1.0
21	至道元寶 (楷書)	995	24.5	1.3
22	嘉祐元寶 (篆書)	1056	24.7	1.0
23	洪武通寶	1368	22.5	1.3
24	皇宋通寶 (篆書)	1039	24.8	1.1
25	開元通寶 (隸書)	621	23.3	1.1
26	皇宋通寶 (楷書)	1039	24.8	1.2
27	皇宋通寶 (楷書)	1039	23.9	0.9
28	洪武通寶	1368	22.5	1.4
29	皇宋通寶 (篆書)	1039	24.4	1.0



図 26 資料番号 22: 札幌国際大学 47 【Ⅱa 期 (18 世紀)】



種別	材質	色	形	高(mm)	径(mm)	点数	備考
1	ガラス	b	丸玉	30.5	36.2	1	欠損
2	ガラス	db	丸玉	8.3	12.5	62	
3	ガラス	pu	丸玉	10.6	13.3	142	
4	ガラス	w	丸玉	11.3	15.1	30	
5	ガラス	lg	丸玉	9.6	13.0	5	
6	ガラス	bk	丸玉	17.8	21.5	1	
7	ガラス	tr	丸玉	27.4	29.1	1	
8	ガラス	lg	丸玉	10.6	13.9	26	
9	ガラス	g	丸玉	10.5	14.3	1	
10	ガラス	b	丸玉	11.1	14.4	1	
11	ガラス	t	丸玉	29.7	36.0	3	
12	ガラス	lg	丸玉	12.0	14.8	1	
13	ガラス	b	蜜柑玉	9.4	11.9	1	
14	ガラス	t	丸玉	12.9	14.5	1	
15	ガラス	db	丸玉	15.9	20.3	1	
16	ガラス	b	白玉	10.7	12.4	1	
17	ガラス	t + b + gd	丸玉	25.9	27.7	1	糸屑玉
18	ガラス	db	丸玉	6.2	10.7	1	
19	ガラス	t	丸玉	38.0	42.0	1	
合計	281						

No	銭種類	初鑄年	枚数	外径mm
1	新寛永	1674	1	24.4
2	新寛永	1674	1	23.3
3	新寛永	1674	1	24.0
4	新寛永	1674	1	24.3
5	新寛永	1674	1	23.4
6	新寛永	1674	1	24.4
7	新寛永	1674	1	22.9
8	新寛永 (文銭)	1668	1	25.1
9	古寛永	1636	1	25.2
10	新寛永	1674	1	23.1
11	古寛永	1636	1	23.8
12	古寛永	1636	1	24.7
13	新寛永	1674	1	22.3

図 27 資料番号 27: 釧路市立博物館 53261 【Ⅱ期 (18 ～ 19 世紀)】

学術調査と連携した博物館活動の展開

—— 地域博物館での成果還元型事業の一例

奥 野 進

市立函館博物館の現状

市立函館博物館は、1879年（明治12）5月に開場した開拓使函館支庁仮博物場を前身とする、地域博物館としては日本国内でも設置年代が古いことで知られる総合博物館である。設置当初、明治初期には「北海道開拓」のための勸業的色彩の強い博物館だったが、開拓使から函館県（1882・明治15年～）、北海道（1889・明治22年～）、函館区・市（1891・明治24年～、1922・大正11年に市制施行）と管理主体が変わるなかで、時代とともにその性格を変えながらも、連綿と地域の中で、博物館としての歩みを続けてきた。

函館の歴史を振り返ると、江戸時代後期から第二次世界大戦前の戦前にかけては、「開港」や箱館戦争、蝦夷地・北海道の政治・経済の中心都市、日露戦争後は露領漁業の基地として経済的な発展を遂げ、日本国内でも人口上位を占め、富と人の集まる都市として、他都市に比べてもユニークな歴史を経験してきた。

残念ながら初期に開拓使が収集したコレクションの一部は散逸したが、一部の魚類はく製や液浸標本、アイヌ民族を中心とした民族資料は、現在も博物館に引き継がれ、地域の重要な文化資産となっている。また、ユニークな歴史と都市の経済力は、様々な個人コレクションを形成する素地となり、そのコレクションが博物館に寄せられたことで、現在の市立函館博物館には同規模の他都市とは比較にならないほどの、多種多様なコレクションを所蔵するに至ってい

る。（本稿末の市立函館博物館のコレクション概要を参照）

様々なコレクションを所蔵する博物館だが、その膨大なコレクションの管理やその公開、資料調査・貸出への対応には、それなりの労力を割かれるため、悩みの種でもある。近年の資料の利用動向を、①資料の展示等を目的とした貸出と、②資料の調査・刊行物やテレビ放送などでの利用に分けて示すと下表のようになる。①については、開催される展覧会の内容や分野によって、変動が大きく、新型コロナウイルス感染症による影響⁽¹⁾もあって、数値の上ではその動向が見えづらいが、職員の体感としては、増加傾向にあると感じている⁽²⁾。

②についても増加傾向を示し、デジタルアーカイブ事業⁽³⁾などを通じて、所蔵情報

博物館資料の貸出・利用動向

年／年度	貸 出		利 用
	件 数	点 数	件 数
2015年（平成27）	10	281	102
2016年（平成28）	8	130	91
2017年（平成29）	8	192	173
2018年（平成30）	9	168	121
2019年（令和1）	4	94	132
2020年（令和2）	9	197	125
2021年（令和3）	14	253	161

※ 途中統計の取り方を変えたため、2016年までは1月～12月（12月）、2017年は1月から翌年3月末（15月）、2018年以降は4月～翌年3月（12月・年度）の数値。

※ 貸出：現物資料の貸出に限定し、パネル貸出は含まない。

※ 貸出：函館市の他部局・施設（文化財課、函館市北方民族資料館等）への常設展等の恒常的な貸出も除外した。

を資料画像とともに分かりやすく公開することで、今後もさらなる利用が喚起されるものと推測される。

利用が増加する一方で、平成の大合併による旧合併町村資料、少子化による学校統廃合後の学校資料、家屋整理等に伴う個人資料の増加など、これまで以上に受け入れる資料数が増える傾向にあり、管理にかかる負担はますます増加している。

このような中で博物館がどう対応するのか。近年のコレクション管理における函館博物館の取り組みについては別稿⁽⁴⁾に譲ることとし、本稿では、②のうちの博物館資料における学術調査の受け入れにあたって、1つのモデルケースとなるような、学術調査を核とした博物館活動の展開について報告したい。各地の博物館は、規模や機能など多種多様であり、本報告がそのまま他館に当てはまるものでもないが、方向性としては1つの有効な選択肢である、と考えている。

調査の受け入れにあたって

2020年（令和2）、中村和之氏（当時、函館工業高等専門学校教授、2022年から函館大学教授）が研究代表を務める、「サハリンアイヌの交易と文化変容、その学際的研究」（2020～2024年度）⁽⁵⁾が始動した。中村氏からは、科学研究費助成事業への申請の段階で、市立函館博物館が所蔵するサハリンアイヌ関係資料の大規模調査（悉皆調査）の相談を受け、事前に館としても「できるだけ協力する」旨を回答していた事案である。

市立函館博物館が所蔵する民族分野の資料は、函館市北方民族資料館に収蔵し、同館で展示、調査への対応等を行っているが、その資料には、開拓使が収集した「開拓使収集資料」や馬場脩が収集したいいわゆる「馬場コレクション」、北海道大学名誉教授の

児玉作左衛門が収集した「児玉コレクション」など、国内有数の資料が含まれている。なかでも馬場コレクションは、収集地や収集年代が明らかであり、収集年代も日本国内にある資料としては比較的古いことから、1959年（昭和34）に国の重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定され、学術的な調査の対象とされることが多い資料群である。また、児玉コレクションは、収集地等が明らかではない資料が多いなど、課題は抱えるものの、点数は当館所蔵資料のなかでも最も多く、衣服や装飾品などは、展示や図録等で使われることの多い資料群である。

今回は、この馬場コレクションおよび児玉コレクションに含まれるサハリンアイヌおよび関連する北海道アイヌの資料の調査が進められたが、初年度（令和2年度）の予備的な閲覧・簡易な写真撮影だけでも521件にのぼる資料がその対象となった。

* * *

ちょうど同じ頃、国立アイヌ民族博物館の開館（2020年7月）を控えて、アイヌ民族やその文化への関心が高まりを見せ、資料の印刷物・ウェブサイトへの掲載や調査要望が増加していたところであり、館としても出し入れしやすく分かりやすい資料管理方式への転換を迫られている最中でもあった。

このため、今回の調査を契機に、資料の再整理・再配置を集中的に行うこととした。博物館としては、調査研究に対応することは、社会的な役割の1つであるが、典型的な地方博物館である函館博物館としては、対応できる人員には限りがあり、いかに効率の良い管理ができるかが大きな課題となっていたからである。

とはいえ、展示や調査研究、教育普及、資料整理など、多岐にわたる業務に対応する必要がある、調査対応にのみに大きく時

間を割けば、当然どこかの業務に支障をきたすことになる。このため、中村氏との事前協議のなかで、函館市民の共有財産である収蔵資料の大規模調査の受け入れにあたっては、講演会や研究紀要への寄稿など、多様な博物館活動、市民に対する成果還元への協力を要望し、快諾を得た。ここに至り、当館としては「サハリンアイヌの交易と文化変容、その学際的研究」の受け入れと同時に、資料整理状況の改善にも取り組み、加えて調査者の全面的な協力を得て、これまでの、そしてこれからの研究成果を元にした多様な博物館活動の展開を図ることとなった。

博物館活動における具体的な事業展開

(1) 資料・収蔵庫の再整理

対象となった民族分野におけるこれまでの資料管理は、以下のとおりである。

①「市立函館博物館蔵品目録」(蔵品目録)⁽⁶⁾

掲載資料：種別、目録掲載の資料番号順による配置を基本として、特定コレクション（開拓使収集資料や馬場コレクション^{しいうく}、椎久コレクション）は別置

②「蔵品目録」発行後に受け入れた資料：受入年度別の配置

③児玉コレクションのうち「児玉コレクション目録Ⅱ」掲載資料：種別、目録掲載の資料番号順による配置

④「児玉コレクション目録Ⅱ」の発行後に追加で受け入れた児玉コレクション：仮番号が付され、大部分が種別に受入時の箱に梱包されたままの状態

このような整理状況の下では、資料の所在を特定職員の記憶に負うところが大きく、資料に精通した職員の異動によって所在が分からなくなる、戻すべき位置に資料が戻っていないというケースもあったため、とりあえずの棚番号、資料を収納した棚の段数などの位置情報を収蔵資料データ

ベースに追記して対応する、という最低限の対策が取られているのみであった。実際に資料を出し入れする時は、データベースから何とか追うことができるというものである。

しかし、例えば今回のようなサハリンアイヌのタマサイ（首飾り）を調査したいという要望があった場合、実際に資料が置かれている場所は分散し、保管状況も様々であるため、非常に効率が悪く、対応する学芸員も調査者も無駄な時間を費やすことになる（時には箱内のすべての資料を確認することになる）。

このため、今回の調査にかかる事前準備の時間や、実際に調査者が実物資料を分析・調査している時間、いわば担当職員の空き時間を利用して整理作業に取り組んだ。整理途中となっていた児玉コレクションの追加資料については、再整理・再配置・資料ラベル付与をはじめとした本格的な整理を行い、収蔵資料全体についても整理棚の再配置や保管容器、保管方法の再検討などを行った。

まだまだ整理の途中であり、新たな棚番号や収納箱への内容物・資料番号の付記などの作業は残っているが、一定の整理作業を終え、基本的に特定コレクションと種別を基本とした資料番号順の配置として、スペースを節約しながら、かつ分かりやすく、出し入れのしやすい収蔵に近づけることができた。

収蔵庫の（再）整理は、博物館活動の基本となる重要な作業ではあるが、他の業務への対応もあり、なかなかまとまった時間を割いて実施することができない作業でもある。今回の調査にあたって、時間を有効に使いながらも収蔵状況の改善を図れたことは大きな成果であった。実際、今回の調査関係者からも、保管状況や資料の出し入れの時間などについて、かなり改善された

旨のコメントをいただいた。

（２）調査研究の成果還元型の事業展開

各年度の調査は、研究に関わる研究分担者と博物館が日程調整をしたうえで、断続的に実施された。博物館はその都度、保有する資料情報の提供、対象資料の事前確認、一部資料の撮影、調査実施場所の確保、雑多な機材の準備等に対応し、調査に備えた。

今回の調査のように大規模な調査では、1回の調査につき調査対象資料が数百点に及ぶこともある。さらに近年、科学技術の進展に伴う、新たな測定機材の登場やその小型化が進み、科学分析による研究が盛んになってきた。これらの調査については、小さなことではあるが、設置場所と設置環境を確保する必要があり、設置や設定に時間を要するものについては、一度機器を設置すれば、時間が許す限りできるだけ多くの資料の測定を希望するのが、研究を行う側の当然の要望である。

対応する学芸員は、既述のとおり、場合によっては長期間・長時間にわたって拘束されることになるため、今回はその合間を有効に利用し、資料の再整理を進めたわけだが、せっかくこれだけの労力を割いて、調査を実施したのであれば、その成果を博物館活動の中で活かすことはできないのか、というのも素直な疑問であった。

* * *

「サハリンアイヌの交易と文化変容、その学際的研究」のなかでは、様々な調査が行われている。

最初に基礎的な調査として、馬場コレクション・児玉コレクションに含まれるサハリンアイヌ関係資料の撮影・現物の悉皆、熟覧調査が実施され、その後、テーマが設定され、サハリンアイヌのタマサイ（首飾り）を中心としたガラス玉の蛍光X線による化学組成分析や、タマサイ（首飾り）の

飾りとして用いられている銭の銭種分析も行われた。

現在は、ガラス玉の分析が継続して実施されているほか、新たにアイヌ民族の魚皮利用に関する調査やタマサイ（首飾り）の装飾に使われるシトキ（飾り板）、刀・太刀（エムシ、イコロ）などの悉皆調査等も行われる予定である。

着々と調査が進む一方、調査者の協力による博物館や地域への研究成果の還元事業も実施した。その第一弾が企画展示「北のシルクロードと蝦夷錦——炭素14年代測定で明かされた蝦夷錦の制作年代」（2022年7月22日～11月18日 会場：函館市北方民族資料館）と展示に伴って実施した小田寛貴氏（名古屋大学助教）による講演会「炭素14で探る歴史年代——蝦夷錦・古文書・鉄の年代測定」（2022年8月6日 会場：函館市北方民族資料館）である。

企画展示は、中村氏が研究代表を務めた「蝦夷錦の制作年代と流通に関する研究」⁽⁷⁾（2005年度～2007年度）とそれ以降の研究成果を基礎とした。実際に炭素14年代測定で分析した函館博物館所蔵の蝦夷錦を中心に、館蔵の他の蝦夷錦や周辺資料を合わせて展示した。さらに、研究者の協力によって炭素14年代測定の仕組みや同調査で明らかとなった事実をわかりやすくパネルにまとめ、企画展示にかかるリーフレット（稿末に添付）の作成でも協力を得た。定期的に展示替えは行っているが、マンネリ化しがちな博物館の展示事業にあって、研究の成果を取り入れた新たな視点からの展示ができた意味は大きい。

また、調査によって明らかとなった事項については、積極的な当館研究紀要への寄稿も依頼しており、本号の報告「銭を指標とした伝世タマサイの編年試案」にもつながった。

上記以外の目には見えない効果もある。



函館市北方民族資料館での企画展示

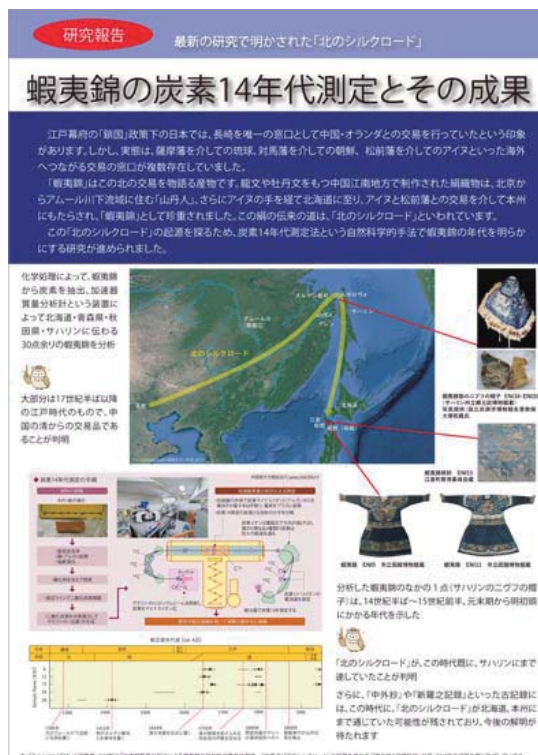


講演会の様子

(上下写真とも函館市北方民族資料館提供)

地方博物館の学芸員にとって、研究者による相応のレベルの調査に対応し、研究参加者とコミュニケーションをとることは、新しい情報を得る機会でもあり、非常によい刺激となる。学芸員は、資料と研究者との間をつなぐ基礎的な研究において、重要な役割を担っていると考えるが、日常の業務の多くは「学術的」な世界とは縁遠く、そのような基礎的な役割を認識できる機会はそれほど多くないのが現実だからである。

最新の調査手法やそこから導き出される結果を間近で体感することにより、現在の調査においてどのようなことが求められているのか、実践的な対応は、経験と技術の向上につながる。場合によっては、学芸員が研究グループに情報を提供して新たな分析にもつながる可能性も秘めている。成果



研究の成果を取り入れて作成したパネル

が新たな展示や講演会につながり、調査のなかで新たな調査につながる発見がなされれば、さらに二次、三次の事業へと展開することもある。双方にとっても理想的な展開である。

今後の展望

函館博物館ではこれまでも多様な調査を受け入れてきたが、その成果は必ずしも館活動と連動した形では事業化されてこなかった。もちろん、研究支援をするのは当然で、研究は自由になされるべきであり、短絡的に所蔵館や地域への還元を求めるものではない。

しかし、当館も地域の博物館である以上、その基盤となる地域への還元をどのように図るのかは、地域博物館ならではの重要な役割の1つでもある。

そのためにも、整理と調査、調査を通じた社会還元事業を一連の作業として認識し、いかに社会、ひいては市民への還元を

図るかは、対応すべき課題である。

研究の成果が市民に向けて発表されることは、研究の学術的な有用性を示すだけではない。成果に触れた者が、展示以外の博物館機能の社会的な役割を再認識する機会となり、その後の調査研究を支える市民意識の醸成に寄与し、博物館施設や組織の充実に繋がる可能性もある。

2022年（令和4年）4月15日に、博物館法が改正され（施行は2023年4月1日）、実に70年ぶりに大幅な変更がなされた。実際の博物館機能の向上や学芸員制度について不明確な部分が多いものの、博物館の果たすべき役割に対する社会の期待の表れと捉えることもできる。今後博物館が、地域の拠点となっていくためには、研究者との連携、そしてその成果の還元も重要な要素の1つとなっていくものと考えられる。

その意味でいえば、今回のような研究成果を発展的に博物館事業につなげるような仕組みは検討の余地がある。

* * *

今回の研究連携事業としては、すでに企画展示や講演会を開催し、研究成果の一端は、本研究紀要への論文の寄稿につながった。今後もさらなる知見が得られれば、その成果は研究紀要等で発表される予定である。

また、現在中村和之氏と共同で、道南地域における「蝦夷錦」の所在調査や現物資料の撮影、熟覧調査を進めている。というのは、今回、函館市北方民族資料館で「北のシルクロードと蝦夷錦——炭素14年代測定で明かされた蝦夷錦の制作年代」を開催したが、展示スペースの関係もあって、蝦夷錦が伝える物語や歴史の一端しか伝えることができなかったからである⁽⁸⁾。蝦夷錦の調査は、現在進められているタマサイの研究成果と合わせて、さらなる展示等の博物館活動への展開を図るためのものである。

* * *

実は、今回の連携では、当初から具体的なプランがあったわけではない。お互いに基本的な研究紀要や展示、講演会での連携をイメージし、実際に「実施する方向」で協議をしながら、事業を実現してきた形である。連携によって当初は想定していなかった派生的な活動につながっているが、これは博物館や博物館資料へのアクセスを保障するシステムを、博物館自身がどのように構築していくのか、という現在進行形の課題の裏返しでもあることを、あらためて認識させられた。

博物館資料の公開をすすめ、研究者と博物館学芸員とが交流することで、眠っていた博物館資料から明らかとなることもある。その意味でいえば、まだまだ博物館は新たな可能性を秘めているといえる。いかに資料を公開するかは、別途の課題としたい⁽⁹⁾。

注

(1) 函館博物館でも、2020年3月2日から21日、4月18日から5月24日の2度の臨時休館を経験した。令和2年度の企画展については、予定していた道央圏からの資料借用を断念せざるを得ず一部内容を変更したほか、講座も、「忘れない！函館大火」（2021年3月19日開催予定）の中止にはじまり、以後令和3年度にかけて、緊急事態宣言中や流行のピークに重なった講座は中止とした。この間の入館者数（有料・無料入館含む）の推移は以下のとおりである。

令和元年度（2019） 14,756人

令和2年度（2020） 8,933人

令和3年度（2021） 10,836人

(2) 実際の資料貸出時に各館の状況を聞くと、コロナ禍の影響、予算の削減等により、借用先の館数を減らしたり、海外や遠方からの借用を避けるために、函館からの借用を選択した事例があった。当館と函館市中央図書館が多く資料を所蔵している函館地域は、テーマ

によっては1か所である程度の資料を確保できることから、魅力的な選択肢の1つとなっている。

(3) 市立函館博物館のデジタルアーカイブ事業は、公立はこだて未来大学と連携し（大学への研究委託）、2014（平成26）年度から取り組みを開始した。2015（平成27）年に資料画像の公開をはじめ、本格的なデータベースとしての公開は2018（平成30）年度からである。2023年（令和5）3月31日現在で701件を公開している。

(4) 「博物館とコレクション管理—ポスト・コロナ時代の資料の保管と活用—」金山喜昭編（雄山閣 2022年）所収、奥野進「市立函館博物館 開拓使時代からの資料を含むコレクションの管理」

(5) 「サハリンアイヌの交易と文化変容、その学際的研究」の概要は以下の通り。

「本研究は、現在では失われてしまったサハリンアイヌの伝統的な文化を復元することを目的とする。(1)北海道から移住したサハリンアイヌが、いつ独自の文化を築き、その後どのような変貌をとげたか。(2)サハリンアイヌの文化には、南部と北部とで地域的な違いがあるか。(3)サハリンアイヌの文化には、交易の影響がどのように及んでいるか。(4)サハリンアイヌの文化に、大陸と日本からの影響はどのように及んでいるかを検討する。サハリンアイヌは、文化人類学・言語学からは大陸の文化とのつながりが強いことが指摘されている。本研究は歴史文献と考古学資料を対比し、時間軸を重視して文化変容の実態を解明する。」

研究分担者：関根達人（弘前大学人文社会科学部教授）、麓慎一（佛教大学歴史学部教授）、小田寛貴（名古屋大学宇宙地球環境研究所助教）、中井泉（東京理科大学理学部第一部応用化学科教授）、三宅俊彦（淑徳大学人文学部教授）

<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI->

[PROJECT-20H01306/](https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-20H01306/)

(6) 「市立函館博物館蔵品目録」は、1979年から1998年までに9冊が発行された。その間、当該目録とは別に「児玉コレクション目録Ⅰ」（1983）・「同Ⅱ」（1987）、「梁川剛一資料目録」（1996）が発行されたが、最後の目録（1998）の発行後に収蔵した資料の目録は発行されていない。

(7) 「蝦夷錦の制作年代と流通に関する研究」については、以下に掲載されている。

研究分担者：小田寛貴（名古屋大学年代測定総合研究センター助教、当時）

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-17500694/>

(8) 蝦夷錦をテーマとした企画展は、「蝦夷錦の来た道」（札幌市中央図書館 1991年）や「山丹交易と蝦夷錦」（北海道開拓記念館 1996年）、「蝦夷錦と北方交易」（青森県立郷土館・東奥日報社 2003年）などが開催されたが、函館市での企画展としての開催はない。開拓使収集資料に、児玉コレクションの蝦夷錦が加わり、博物館所蔵の蝦夷錦は点数も増加している。これらに御味方蝦夷之図（夷酋列像、函館市中央図書館蔵）や永寧寺碑の拓本などを加えると、蝦夷錦やサンタン交易に関する資料だけでも相当数が函館に存在する。

(9) 当館でも目録情報の公開は喫緊の課題であり、道南ブロック博物館施設等連絡協議会のブログに投稿したコラムリレー（第190回）「博物館の公開性」でも触れた（2022年12月8日公開 <https://dounan.exblog.jp/page/3/>）。冊子目録の発行は費用もかかるが既存のデジタルアーカイブ等のデータベースの拡充はより簡易に対応できるため、解決の有力な手段となる。このため、今回の調査にあたっては、関係者が撮影した資料写真データ等の提供を受けており、今後実施する調査においても同様に資料画像を蓄積し、今後のデジタルアーカイブ事業のなかで活用する予定である。

（市立函館博物館学芸員）

市立函館博物館のコレクション概要

当館では、コレクションを中心とした博物館事業の展開を模索している。(詳しくは、注(2)の拙稿で紹介。)

2018年には、展示していない資料も含めた博物館資料全体を紹介するため、各コレクションの概要を記したコレクション・バナーを作成し、展示の導入部分に掲示している。

バナーには、とりあえず主要なコレクシ

ョンを取り上げたが、これらのコレクション以外にも本来はコレクションとして管理すべき「埋もれた」資料群が存在する。また、本バナー作成時には、紹介できるスペースが限られていたため、一括して「昆虫コレクション」としたが、本来は松本コレクションや猪子コレクションなど複数のコレクションを含むものがあり、改善すべき点も多い。これらの課題については、現在行っている資料管理や事業の見直しなかで、改善する予定である。



展示導入部でのコレクション・バナーの掲示と作成したコレクション・バナー(右)



コレクション・バナーの解説

■ 函博コレクション

地方博物館の先駆けとして、函館の歴史とともに歩んできた函館博物館は、数多くの研究者、篤志家の好意によって支えられてきました。開拓使時代からの資料に加え、これらの好意によって集められた資料が加わり、現在の所蔵資料数はおよそ70万点に達しています。

函館博物館に資料がまとまったコレクションとして所蔵されるようになったのは、昭和期に入ってからのことです。1955年（昭和30年）の鐔（刀のつば）・小道具資料の堤コレクションをかわきりに、恵山貝塚出土資料を中心とした能登川コレクション、美術・工芸資料の花光コレクション、植物標本の菅原コレクション、考古、民族資料の馬場・児玉コレクション、貝類標本の高川コレクションなどが新たな所蔵コレクションとなりました。

これらのコレクションは、自然科学から人文科学までの広い分野を対象とする総合博物館という性格の中で、広く活用されています。

■ 函館図書館旧蔵資料

函館図書館は、生涯を図書館に捧げた岡田健蔵によって、「北方資料の宝庫」としての地位を確立しましたが、岡田健蔵は「本とモノ資料の繋がり」を重視して、博物館の設立にも奔走し、資料の収集に努めました。

岡田は1944年（昭和19年）に他界しましたが、努力の甲斐あって、その4年後に新生「市立函館博物館」が誕生し、その資料の一部を引き継ぎました。

■ 懐旧館旧蔵資料

「懐旧館」は、1917年（大正6年）に、片上楽天が、五稜郭内の兵糧庫に開設した私設の展示館です。箱館戦争を中心として、関係者からの資料や人形を展示していました。1926年（大正15年）に片上の死去によって閉館しましたが、資料は函館市に寄贈されました。

1930年（昭和5年）に史蹟館、1947年（昭和22年）には市立函館博物館五稜郭分館に引き継がれ、現在は博物館本館に収蔵・展示しています。

懐旧館の旧蔵資料には、洋式軍服、砲弾などの箱館戦争資料の他に懐旧館の計画書や観客感想録などがあります。

■ 堤コレクション

堤清治郎は1894年（明治27年）、新潟で呉服店の三男として生まれました。実兄・清六が設立した日魯漁業株式会社では、重役として会社発展のために尽力しました。戦後、函館博物館の建設運動が再開されると、博物館建設期成委員会委員長を務めるなど、当館と関わりの深い人物でもあります。1955年（昭和30年）7月、博物館五稜郭分館の開館を祝って、青年時代から長きにわたって収集してきた鐔・小道具類を函館市に寄贈されました。これらの資料は、「堤コレクション」として広く知られるようになり、その一部は函館市有形文化財に指定されています。

■ 花光コレクション

花光春之助は1893年（明治26年）に京都に生まれました。その後、函館に渡り、1927年（昭和2年）頃から金森百貨店事務長や支配人を歴任し、郷土文化の催事を開催するうちに、地域の歴史に関心を抱くようになり、美術工芸品を集めるようになります。「南の長崎と同様に北の函館は、欧米文化

を最も早くかつ多量に吸収しているので、これらの函館の文化財を蒐集することを志した」と後に語っています。また、函館市議会議員や教育委員のほか、博物館の運営委員などの役職を務めています。

1966年（昭和41年）、博物館本館の開館に際して、多くの市民に観覧されることを願って、300点におよぶ美術工芸品のコレクションを寄贈しました。このなかには、蠣崎波響の絵画など函館市指定有形文化財が多数含まれています。

■ 菅原コレクション

菅原繁蔵は、1930年代から1960年代にかけて、樺太・北海道・東北地方で教員をする傍ら植物分類学者として、3万点を超える植物を採集し、分類整理を行ないました。当時の樺太・北海道の植物相を考える上で貴重な資料です。

1969年（昭和44年）、このうち約1万点が当館に寄贈され、「菅原コレクション」として所蔵資料に加わりました。

■ 高川コレクション

高川金次は、北の貝類をはじめとするわが国を代表する貝類研究の第一人者でした。高川氏は北洋に出漁するトロール船の通信士であった1960年（昭和35年）から、船上で見た網にからまる北の貝類の魅力に取り憑かれ、北洋の貝類の収集に努めました。当時、北の貝類の調査研究が進んでおらず、氏の採集する貝類は収集した標本の記録の正確さと相まって、北の貝類研究の基礎を築きました。

■ 森武コレクション

森武寅雄は、学校在職中の1930年（昭和5年）から20余年にわたり津軽海峡の海藻について研究し、その間140種におよぶ海藻を採集しました。大正期以前には、津軽海

峡の海藻研究は盛んに行われていましたが、昭和期以降になると、研究者が減少していきました。そのため、この海藻コレクションは、昭和期の海藻を収集した貴重な資料となっています。

■ 函館博物館旧蔵資料

1879年（明治12年）、他都市に先駆けて、函館公園内に開拓使仮博物場が設置され、「博物館」が誕生しました。以後、1884年（明治17年）には函館県博物場が、1891年（明治24年）には水産陳列場が設置されるなど、博物館体制も充実していきます。

その後、度重なる組織変更などはありませんでしたが、これらの各館に陳列されていた、民族資料や動物標本・剥製などは現在も函館博物館に引き継がれています。

■ 昆虫コレクション

函館昆虫同好会、春山昌夫、松本泰和から寄贈された資料を中心とするコレクションです。

春山昌夫は、自然科学資料が五稜郭分館にあった昭和30年代に、分館の2階に春山昆虫展示室を設けるなど博物館事業に尽力し、松本泰和は、各地の検疫所勤務の傍ら、赴任地で、蝶類を含む膨大な数の昆虫類を採集しました。これら両氏の資料に函館昆虫同好会から寄贈された資料を加え、地域の貴重な昆虫コレクションを形成しています。

■ 能登川コレクション

のりがわ
能登川隆は、考古学に興味をもち、大正期から昭和30年頃にかけて、独学で函館市内やその周辺の遺跡調査、土器、石器などの収集を行い、まちの考古学研究者として知られる存在でした。

収集資料は、学術的に貴重なものが多く、考古学専門家の間でも注目されていました

が、1959年（昭和34年）、能登川氏の遺族から一括博物館に寄贈され、「能登川コレクション」として当館の所蔵資料に加わりました。

資料のなかでも、北海道特有の縄文文化を物語る、恵山貝塚出土の土器、石器、骨角器は、コレクションを代表する資料として広く紹介されています。

■ 馬場コレクション

函館出身の馬場脩（1892年～1979年）は、昭和10年前後、樺太、千島、北海道の各地で学術調査を行ない、数多くの北方民族資料や考古資料を収集しました。これらの資料は、国内はもちろん海外でも広く「馬場コレクション」の名で知られ、民族学研究、考古学研究上なくてはならない資料となっています。特に、アイヌ民族資料は、世界的に学術価値の高い資料として、1959年（昭和34年）に国の重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定されました。

コレクションのうち「アイヌの生活用具コレクション」750件が1971年（昭和46年）年に、考古資料1,110件も1972年（昭和47年）に本館に収められ、研究活動や展覧会において広く活用されています。

なお、馬場コレクションは、現在函館市北方民族資料館に収蔵・展示されています。

■ 児玉コレクション

函館で青年時代を過ごした北海道大学名誉教授児玉作左衛門（1895年～1970年）は、第二次世界大戦前後、緊急を要するアイヌ民族学研究の中で、北海道大学医学部教授として研究・教育に携わる一方、アイヌ民族資料の海外流出などの資料散逸を恐れ、私財を投じてアイヌ民族資料の収集に奔走しました。収集された資料は「児玉コレクション」と呼ばれ、特にアイヌの人々の衣

服や首飾りなどの服飾品は、その代表的な資料となっています。

児玉の死後、コレクションは遺族によって本館とアイヌ民族博物館（白老町）に分けて寄託、後に寄贈され、本館では馬場コレクションと並ぶアイヌ民族資料の一大コレクションとして広く活用されています。

なお本館が所蔵する児玉コレクションは、現在函館市北方民族資料館において収蔵・展示されています。

■ 椎久しいくコレクション

椎久しいくコレクションは、北海道八雲町遊楽部ゆうらつぶ川流域に居住していた椎久家の当主、椎久年蔵（1884年～1958年）が旧蔵していたアイヌ民族資料です。同氏は八雲遊楽部地域に暮らしていたアイヌの人々のリーダーであり、アイヌ語八雲方言の数少ない話者として『アイヌ語方言辞典』（1964年 岩波書店）発行に協力するなど、アイヌ文化研究においても重要な役割を果たしました。同氏の死後、儀礼信仰用具を中心としたアイヌ民族資料32件が遺族によって寄託され、1966年（昭和41年）には寄託資料32件と丸木舟1艘と合わせた33件が寄贈されました。これらの資料は世界的にも稀少な道南地域収集のアイヌ民族資料として、近年大きな注目を浴びています。

なお本館が所蔵する椎久コレクションは、現在函館市北方民族資料館において収蔵・展示されています。

■ 潤潟まがたコレクション

潤潟まがたコレクションは、日魯漁業でロシア語通訳として働いていた潤潟久治（1898年～1981年）が収集した、樺太の先住民族ウイльтаの資料で構成されます。潤潟は本業の傍らウイльта語研究をライフワークとし、1928年から1935年の間に4回日本領樺太に渡り、フィールドワークを行いました。そ

の言語調査の成果は、1981年に刊行された『ウイルタ語辞典』に結実しています。潤潟が収集した民族資料53件は1949年（昭和24年）と1951年（昭和26年）に当館に収められ、現在は函館市北方民族資料館で収蔵・展示されています。

■ 梁川剛一資料

梁川剛一は1902年（明治35年）に函館に生まれ、幼少期を函館で過ごしました。父親の転勤で札幌に移り、北海高校では美術クラブ「どんぐり会」に所属しました。その後、上野で見た彫刻に感動し、東京芸術大学美術学部に入學、彫刻家を志します。在學中から、帝展に入選し、彫刻家としての将来が期待されました。現在も函館山の麓から街を見守る「高田屋嘉兵衛像」（1958年設置）も、梁川の手によるものです。彫刻家として活動する一方で、挿絵画家としても活躍し、雑誌『少年倶楽部』の「少年探偵団」などで不動の人気を得、1937年（昭和12年）には油彩で原画を描いた絵本『リンカーン』が話題となりました。その後も数多くの偉人伝の挿絵や本の装幀などを手がけ、1986年（昭和61年）84歳で亡くなりましたが、その彫刻作品や挿絵などの作品が当館に寄贈されています。（一部の資料は、函館市文学館の梁川剛一コーナーで見ることができます。）

■ 函館市古川町木村漁場のイワシ漁労用具

当館では、地域に残る資料を体系的に収集・保存・活用するため、平成10年度から函館市古川町に残されていた木村漁場の漁労用具の調査を実施しました。津軽海峡では昭和30年初等までイワシ漁が盛んに行われていましたが、木村漁場もその1つです。所有する番屋内にはイワシを絞めて粕や油を製造する道具などが大量に残されていま

したが、これらの資料を一括して博物館に収蔵しています（概要は、当館研究紀要19号「民俗基礎調査報告－函館市古川町木村漁場のイワシ漁労用具」として報告しています）。



令和4年度函館市北方民族資料館企画展示「北のシルクロードと蝦夷錦」(2022.7.22～11.18)展示資料目録

資料名	資料情報	サイズ(cm)	資料番号
蝦夷錦	1879年旧開拓使函館仮博物館に寄贈された資料 杉浦嘉七旧蔵	L142 W218	700044
蝦夷錦	1879年旧開拓使函館仮博物館に寄贈された資料 杉浦嘉七旧蔵 パネル展示	L138 W203	700045
蝦夷錦	伊達林右衛門旧蔵 夏用 児玉コレクション	L142 W210	K-H13-0352
蝦夷錦	伊達林右衛門旧蔵 冬用 児玉コレクション	L127 W171	K-H13-0353
蝦夷錦	児玉コレクション(寄託)	L71 W400	—
蝦夷錦打敷	裏面に「安政二卯年七月廿九日寂 智精道範居士 俗名 綱嶋長藏良久」等の記載	L147 W194	700043
蝦夷錦打敷	裏面に「安政三丙辰三月 綱屋長藏良久」の記載	L64 W68	H26-0093
陣羽織	背面蝦夷錦 児玉コレクション	L98 W70	K-H13-0355
蝦夷絵	紙本着色 巻子本 小玉貞良 表装蝦夷錦 児玉コレクション	L29 W1373	K-H13-0446
蝦夷風俗図	紙本着色 巻子本 蝦夷絵の写本 児玉コレクション	L27 W1339	K-H13-0445
重建永寧寺碑拓本	紙本 軸装 1924年函館図書館受入品	L126 W70	H14-0087
蝦夷錦袱紗	江差町教育委員会蔵 西川家旧蔵 参考パネル展示		
ニブフの帽子	サハリン州立郷土誌博物館蔵 参考パネル展示		
蝦夷錦の涎掛け	松本家旧蔵 写真提供:松前町教育委員会 参考パネル展示	L(長さ) W(幅)	

このリーフレットは、科学研究費
基盤研究(B)「サハリンアイヌの交
易と文化変容、その学際的研究」
(代表:函館大学・中村和之)の研
究成果を知っていただくためのも
のです。

科研費
KAKENHI

北のシルクロードと蝦夷錦

江戸幕府の「鎖国」政策下の日本では、長崎を唯一の窓口として中国・オランダとの交易を行っていたという印象があります。しかし、実態は、薩摩藩を介しての琉球、対馬藩を介しての朝鮮、松前藩を介してのアイヌといった海外へつながる交易の窓口が複数存在していました。

「蝦夷錦」は、この北の交易を物語る産物です。龍文や牡丹文をもつ中国江南地方で制作された絹織物は、北京から清の役人によって運ばれ、アムール川下流域に住む「山丹人」、さらにアイヌの手を経て北海道に至り、アイヌと松前藩との交易によって本州にもたらされ、「蝦夷錦」として珍重されました。この絹の伝来の道は、「北のシルクロード」といわれています。

「北のシルクロード」の起源を巡っては、新たに放射性炭素年代測定法という自然科学的手法によって、蝦夷錦の制作年代を明らかにする研究が進められました。放射性炭素年代測定法とは、動植物にわずかに含まれる炭素14という物質が、古いものほど少なくなる性質を利用して、資料の古さを求めるものです。

このリーフレットでは、最新の調査結果とそれによって明らかとなった北のシルクロードの起源についてご紹介します。

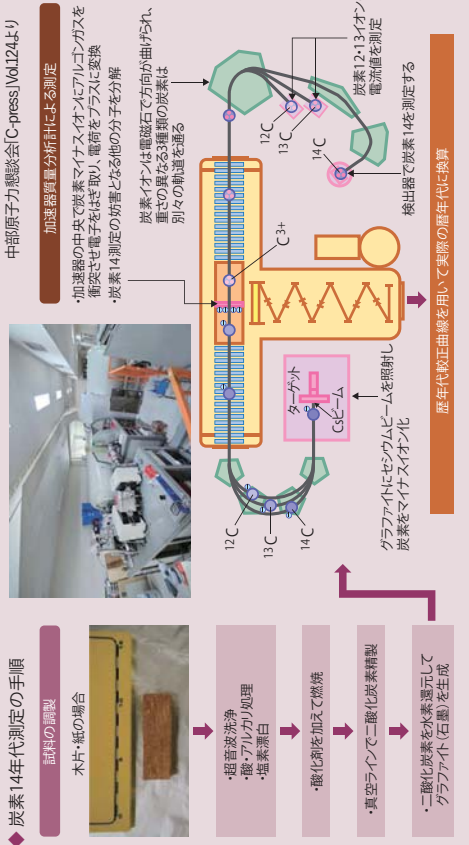
参考文献

佐々木史郎『北方から来た交易民一絹と毛皮とサンタン人―』日本放送出版協会 1996年
松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会 2006年
小田寛貴・中村和之「加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定―『北東アジアのシルクロード』の起源を求めて』『考古学と自然科学』75号 2018年

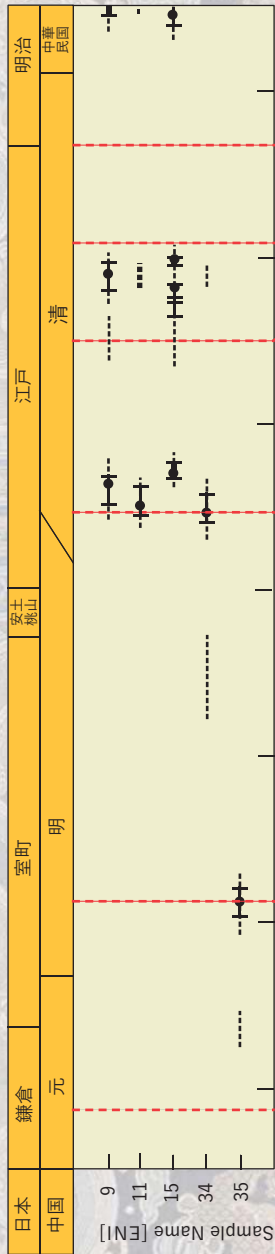


北のシルクロードと蝦夷錦
炭素14年代測定で明かされた蝦夷錦の制作年代

◆ 炭素14年代測定の手順



軟正暦年代表 [cal AD]



(上)「サンタンゴエ地図」
間宮林蔵「東緯地方紀行」(国立公文書館蔵)より
(左)「勅修奴児干永寧寺碑」(1413年)、「(右)「重建永寧寺碑」(1433年)の拓本(ともに市立函館博物館蔵)

1809年、間宮林蔵はデレンからの帰途、アムール川に沿う崖の上に石碑が二つあるのを眺めて絵に残しました。林蔵は上陸しなかったため、碑文を読むことはできませんでしたが、これは明の初期に、永楽帝から派遣された宦官のイシハバが、この地にヌルゲン(あるいはヌルガン)都司という役所を設置し、永寧寺を併設した経緯を記したものであることが後にわかりました。



「進貢」間宮林蔵「東緯地方紀行」(国立公文書館蔵)より

1809年、間宮林蔵はデレンの満洲版図に赴き、清の役人が先住民から朝貢を受ける様子を記録しました。ひざまずく先住民が黒羊の毛皮を献上しています。役人の右側には先住民に与えるための反物が見えます。このなかには蝦夷錦があったと思われるのです。

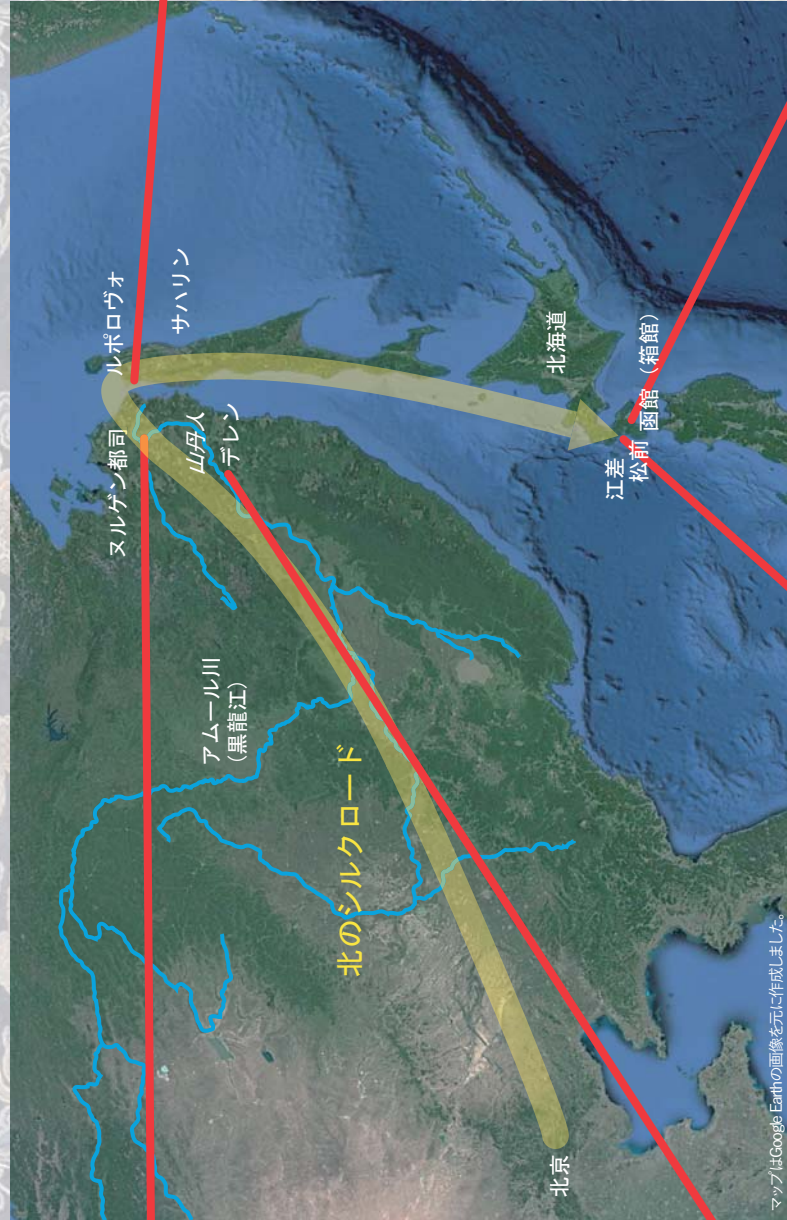
蝦夷錦襖紗 ENI15 (江差町教育委員会蔵)

1971年、江差町郷土資料館が設置された際に町内の西川家から寄贈されました。年代測定はENI15の資料にあたり、清代のものであることがわかりました。



蝦夷錦 ENI 9(左)、ENI 11(右) (市立函館博物館蔵)

1879年の旧開拓使函館版博物館の開館を記念して、函館の豪商、三代目杉浦嘉七から寄贈されたものです。杉浦家が請負っていた十勝場所ないし幌泉場所で手に入れた可能性が高いと考えられます。年代測定はENI9(左)、ENI11(右)の資料にあたり、清代のものであることがわかりました。



蝦夷綿製のニブツの帽子 (サハリン州立郷土誌博物館蔵)
写真提供: 国立民族学博物館 名誉教授 大澤和義氏



帽子の中から見つかった 蝦夷綿の断片 ENI34(左)・ENI35(右)

1966年にサハリン島北西岸のルポロヴォで採集され、現在はユジノサハリンスク市のサハリン州立郷土誌博物館の所蔵品です。2006年に補修のために青い蝦夷綿を外したところ、内部から赤い蝦夷綿の帽子が見つかりました。さらに修理のためか綿の断片が縫いつけられていました。その断片を年代測定した結果、ENI34(左)は清代のものでしたが、ENI35(右)は、元から明初、とくに1413年の可能性が高いことがわかりました。まさにヌルゲン(あるいはヌルガン)都司が設置された年であり、明朝貢交易の証拠といえます。

資料紹介 「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」

内田 彩葉

1 はじめに

この資料はイギリスで発行されていた新聞記事で、開港期の箱館と箱館戦争についての記事である。翻訳は筆者が行い、不明部分に関しては金井円編訳『描かれた幕末明治 イラストレイテッド・ロンドン・ニュース 日本通信1853-1902 増訂』（以下『描かれた幕末明治』とする）を参考にした。日付については、元号が付されているものは旧暦、西暦が付されているものは新暦の日付となっている。なにも付されていないものは日本の資料を参考にしているため旧暦の日付を使用した。

「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」は1842年5月14日にイギリスで創刊された世界初の絵入り週刊新聞で、2003年に終刊した⁽¹⁾。創刊号は26,000部を売り上げ、クリミア戦争には6人の戦争画家を従軍させ、1855年の発行部数は200,000部にのぼった。幕末開港期の日本に関する記事の初めは1853年（嘉永6）である。これから見ていく記事のように、日本の記事は中国に駐在していた通信員やイギリス海軍士官によって届けられた。

当館所蔵資料は1856年1月26日付と1869年6月5日付のものである。外国人が当時の箱館について記録したものには、1853・54年に日本に開港を求めて来航したペリー艦隊の記録『ペリー提督日本遠征記』や、その艦隊の通訳者サミュエル・ウィリアムズの『ペリー提督日本随行記』、日本に滞在した外国人たちの手記など様々なものがある。これらの資料を日本の歴史背景とともに

に読み解くことで、当時の日本や箱館が置かれた状況や外国人が見た日本の姿を捉えていきたいと思う。

2 開港期の箱館

最初の資料は1856年1月26日付のものである。（図1～3）この記事は以下の文章から始まる。

1855年10月9日、イギリス女王と日本の皇帝の間で条約が結ばれ、日本の港のうち2港へのイギリス船の入港を許可することを定めた規則が批准された。とはいえ、我々には交易も商業特権を与えることも認められておらず、単に船の修理を行い、水や食糧、乗組員の健康や船の安全のために必要であろう品物を手に入れるために避難港へ出入りするだけである。それでもこの出来事は記憶すべきことであり、より重要な利点の先駆となるだろう。

安政元年8月23日（1854年10月14日）に日本とイギリス間で「日本國大不列顛國和親約定」が調印され、長崎・箱館が開港場となった。この約定には「安政二年八月二十九日同所（筆者注：長崎）に於て批准書交換」⁽²⁾とされており、この日は新暦では1855年10月9日にあたることから、当資料はこの約定の批准に関する記事であろう。とはいえ、これ以降の記事の文章は主に慶長5年（1600）に日本に漂着し、その後徳川家康に厚遇されたウィリアム・アダムズ

(三浦按針)⁽³⁾から始まる日本とイギリスとの関係について、そして長崎での批准書交換式の様子が書かれており、箱館に関する文章はほぼなくスケッチのみが掲載されている。記事本文によると、批准書交換式の様子はイギリス軍艦ウィンチェスター号の船員からの報告であるという。ウィンチェスター号は安政2年5月～7月(1855年7月～8月)に箱館に入港していること⁽⁴⁾から、箱館のスケッチはその際に描かれたものと考えられる。

3 「日本國大不列顛國和親約定」締結の経緯

安政元年閏7月15日(1854年9月7日)、イギリス東インド艦隊司令長官ジェームズ・スターリングが長崎に来航し、日本に開港を求めた。これは当時勃発していたクリミア戦争⁽⁵⁾において、イギリスがロシアへの戦闘で日本の港を利用するためであった。前年の7月にロシアのプチャーチンが長崎に来航していたこともあって、ロシア艦隊を発見する機会ととらえたことも理由だった。日英の協議の結果として、約定が結ばれるが、条項は以下のとおり。

- 1 薪水食料等船中必要のものを調べ、また破船修理のため、長崎・箱館をイギリス船寄港地とする。
- 2 長崎は今から、箱館は退帆から50日後に寄港地とする。もっともその地の法度には従うこと。
- 3 難風により船が破損しないかぎり両港以外へは行かないこと。
- 4 今後渡来する船がもし日本の法度を犯すことがあれば、両港に来ることを禁止する。船中の乗組員が法を犯したときはその船将は必ずその罪を糺すこと。

- 5 長崎・箱館のほかを今より後に外国に許すことがあれば、イギリスにもその取扱いをする事。
- 6 上記のように決定した上は、日本国帝とイギリス女王の承諾の旨、今から12か月中に長崎において書面の交換をすること。
- 7 このことが政府の命によって定める上は、今後渡来する船将が変わるとも、この約定は変わることはない。

箱館は、戦争のためではなく、あくまでも薪水食料等の供給と破船の修理のための開港となった。8月18日にスターリングと長崎奉行・水野忠徳らとの会談があったが、その中で水野は「戦争之為に港を開き候事ハ難相成、薪水食糧之為に候ハ、港を可極との趣意ハ相分り候哉」と、戦争のために開港するのではないとし、重ねて「右貳个所(筆者注：長崎と箱館)ハ差免候、夫ハ薪水野菜船修復之為之事に候」と答えている。しかしながら、スターリングの「戦争ニ付ては出来不申候哉」との質問に対し、水野は戦争について許しては、万国皆敵になるので出来ないが、船の損傷や食料不足は戦争でのことか難破してのことによるのか、開港場ではわからないので、「渡来之上全其船中不足之薪水食料を辨し、又は、破船修復之為とあれば、差支無之候へ共、戦争之為と被申立候ては難相成候」と述べ、戦争の名分での開港とはしないものの、戦争と難破との区別はしなかったのである。⁽⁶⁾

4 記事の内容

図1～3の「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」の箱館について記載を見ていくこととする。

図1に寺院のスケッチが4枚ある。アメ

リカのペリー艦隊も寺院のスケッチを描いていることから、やはり外国人にとって日本の寺院は印象深いものなのだろう。スケッチに関する記述がないことから、どの寺院なのか断定することは難しいが、「TEMPLE AT HAKODADE」(図1中央左)の絵は『ペリー提督日本遠征記』の挿絵「ENTRANCE TO A TEMPLE AT HAKOTADI」(図4)に描かれた寺院の鐘楼門に似ている。これは称名寺のものである。

図2上部の「STREET IN HAKODADE, AND FUNERAL PROCESSION.」(箱館の通りと葬列)の絵を見ていく。右側の函館山中腹には鳥居が見える。街の特徴として、民家の屋根の上の石と桶がある。石は当時屋根が板葺きで、葺板が風で飛んだりずれるのを防ぐために置かれている。桶は防火用と思われる。⁽⁷⁾ この屋根の石と桶について、箱館に来た外国人にとっては奇妙なものだったのだろう。『ペリー提督日本遠征記』にも「こけら板は竹製の釘で固定されるか、長い板片で押さえてあり、その上に何列も丸石をおいて動かないようにしている。(中略)どの家にも屋根の前の方に、初めて見ると藁で包まれた奇妙な煙突のようなものが載せてあるが、よく見ると、それは水槽であることが分かる。」⁽⁸⁾ とある。また、明治11年(1878)に函館に来たイギリス人、イザベラ・バードも「屋根で目立つのは石である。高いところから見下ろすと、灰色の丸石が何マイルも続いているように見える。(中略)家の屋根を風から護る最も安価な方法であることは確かなのだが、奇妙には見える。」⁽⁹⁾ と記録している。

記事本文を見ていくと、長崎で行われた条約の批准書交換式の様子が記され、イギリスの士官たちは漆塗りの鉢や盆、ちりめんの織物の標本(見本)などの贈り物を日本側からもらったようである。

箱館についてスケッチ以外で知ることはできないが、「私が送ったスケッチは日本人の間の公館や国のことを知らせるだろう。埋葬地や寺は海から見ると特に整った外観を呈している。」と記事の最後に綴っている。外国人がみた箱館の風景を知ることができる資料である。

5 箱館戦争に関する記事

次に1869年6月5日付の記事を見ていく(図5・6)。「THE NEW TREATY PORT OF HAKODADI JAPAN」(日本の箱館の新しい条約港)と題されたスケッチと箱館戦争に関する記事が載っている。本文は短いので全文を紹介する。

1867年3月本紙に、南台湾の海賊の野蛮行為との戦闘を報じた記事に現れた、イギリス海軍スループ型砲艦・コーモラント号の士官で海軍中尉のシドニー・ホルト氏の助力によって、我々は、日本の最北の蝦夷島にある箱館という新しい条約港のスケッチを与えられた。

彼自身の船は港の眺望図の中央にあり、同時にフランス軍艦ヴィーナス号は正面の左手隅に位置している。また、彼のスケッチは現地の反政府者の蒸気船やほかの船も示されている。

箱館の位置は北緯41度47分、東経140度44分かそのあたりだ。街は、1,336フィートの峰があつて、蝦夷本島と低い砂の地峡で結ばれている尖った半島の、北東に伸びる斜面にある。

人口は数年前で6,000人である。港は大きな花崗岩の壁の砦に守られていて、水で満たされた堀に囲まれている。そして52の大砲で武装されている。これは浅瀬の岬の先端部にある。ここの気温はコーモラント号がいた去年の2月の間は、

氷点下より上がらない。丘はいつも雪に覆われていた。

箱館は現在、特に興味深い場所である。日本の内乱の拠点となっていて、反逆者、いわゆる「国外追放の家来」が占拠している。彼らの目的は、日本のほかの島から蝦夷島を離し、そしてサコウガワ（筆者注：徳川）の王子の元で政府をつくることである。

仮の政府はすでに形作られており、1月27日、彼らの船は満艦飾で色づき、土地を手に入れたことを祝って101発の大砲を打った。

ナガイ・ゼンバ（筆者注：永井玄蕃）は箱館の長に任命され、将官マチダイロ・タロ（筆者注：松平太郎）は軍事力の指揮を執った。海軍大将エノモト・カマジャロ（筆者注：榎本釜次郎（武揚））は私たち派遣記者がこの図で示そうと務めた艦隊を指揮した。

艦隊は、1858年にタイクン（筆者注：将軍）が女王陛下から贈られたスクリュエヨットのエンペラー号、外輪船で以前はロシアの軍艦だったイーグル号、パドルが付いたダンバートン号、もう一つのスクリュエ船で、災難に遭ったが眺望図の左手に見えるかもしれないアスケロット号から構成されている。

これらはチポロマルと呼ばれる小さな汽船とともに、蝦夷の反乱軍を構成している。

前半は箱館の概略である。現在の函館市役所本庁舎の経緯度が北緯41度46分、東経140度44分であるから、ほぼ一致する。人口は明治2年（1869）で1万5,000人余りであった。「1,336フィートの峰」は約400mで函館山（334m）のことであろう。砦については、「52の大砲」から弁天岬台場と

推定される。安政元年（1854）にロシア船ディアナ号が下田で大津波により破損した際、ロシア使節プチャーチンが幕府に、ディアナ号に積んでいた52挺の大砲を献上した。その大砲の拝借を、万延元年（1860）に箱館奉行が老中に願い出て、結果として24挺が箱館に送られることとなった。箱館戦争時に弁天岬台場にいくつの大砲があったかは不明だが、プチャーチンが幕府に送った大砲の数がそのまま記事になったと思われる。

後半は箱館戦争の記述である。まず、「徳川の王子」について、榎本武揚から新政府への嘆願書において、徳川の血胤者を当主として、北辺の警備とともに蝦夷地を開拓し、徳川家臣が生計を立てられるようにしたいという主張がされている。「徳川の王子」がこの血胤者のことを指しているとするれば、榎本の主張が外国の通信員にも知られていたということだろうか。そして、その血胤者が決まるまでの措置として、旧幕府脱走軍の士官以上の者による入札で暫定政権が作られた。記事本文にある仮の政府「A provisional government」はまさにこの政権のことであり、総裁・榎本武揚、副総裁・松平太郎、箱館奉行・永井玄蕃となった。

101発の祝砲を打ったことは、旧幕府脱走軍関係者の記録にも記載がある。脱走軍の蝦夷地平定を祝して撃った祝砲である。この日は記事には新暦で1月27日とあるから、旧暦に直すと明治元年12月15日となる。

麦叢録「十二月十五日函館港軍艦及ビ砲臺ニ於テ全嶋平定ヲ賀シ一百零一発ノ祝砲アリ昼ハ満船五色ノ旗章ヲ翻シ夜ハ又市街ニ花燈ヲ掛其賑ヒ最壯観タリ」⁽¹⁰⁾

『麦叢録』には附図と考えられる絵が存在しており、この日の様子が描かれた

絵もある。図7)

蝦夷錦「同十二月十五日於函館港全嶋平
定ヲ賀シテ軍艦並砲台ニシテ百零一発ノ
祝砲アリ」⁽¹¹⁾

脱走軍の艦隊の記載について、エンペラーは蟠龍、イーグルは回天、ダンバートンは長鯨である。本文「Askuelot」は『描かれた幕末明治』では「メテヨ＝神速丸？」となっているが、アシュロット(高尾)ではないかと考えられる。「災難にあった」とあるが、神速は明治元年11月(1868年)に江差で開陽とともに沈んでいる。高尾は明治2年3月25日(新暦5月6日)に宮古湾海戦で新政府軍に拿捕された。『描かれた幕末明治』で他の記事を見ると「5月11日〔明治2年3月30日〕に日本から香港で受け取った情報によれば……」という記事が、当資料と同日の6月5日付の新聞に載っている。宮古湾海戦の情報がすぐに通信員に伝わり記事になったと考えれば、高尾が「災難にあった」とすることができるのではないだろうか。本文「Chipolo Maru」については実際に「チポロマル」という名の脱走軍の船は存在しない。本文の「little steamer」から蒸気船だとわかる。脱走軍の中で船体が小さい蒸気船となれば千代田形だが、なぜ「チポロマル」と呼ばれているかは不明である。

6 おわりに

当館所蔵の「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」から、幕末期の箱館の様子を紹介した。スケッチがあることで、外国人がみた箱館の景色をほぼそのまま知ることができる資料である。

日米和親条約によって外国に開かれた港となった箱館は、外国人が生活をした場所となり、明治維新を迎えて箱館戦争の舞台

となった。戊辰戦争は日本の内乱とはいえ、箱館戦争の段階には諸外国が国内の内乱に干渉しないとする「局外中立」は解除され、アメリカが新政府軍に軍艦を渡したり、兵や武器を運送する船を有償貸与したりと、外国の動きが大きく影響した。

このように、外国の影響を多く受けた函館を、外国人の視点から見ていくことで、日本側の記録には残っていないことがわかることもある。今後も外国側の資料を通して、函館の歴史をさまざまな角度から検討していきたい。

注

- (1) 紀伊國屋書店営業総本部 (<https://mirai.kinokuniya.co.jp/2021/01/20878/>)
- (2) 東京大学史料編纂所 『大日本古文書 幕末外国関係文書七』 1972年 439頁
- (3) ウィリアム・アダムズ 1564年イギリス・ケント州生まれ。日本に来た最初のイギリス人。オランダの東洋派遣艦隊の航海士としてアジア渡航をしていた際、慶長5年(1600)豊後(現大分県)に漂着。大坂に送られ徳川家康と会見する。その後家康に信頼され、「三浦按針」と名乗り、家康の外交顧問を務める。元和6年(1620)平戸で没する。
- (4) 『函館市史 通説編第二巻』 函館市 1991年 52頁
- (5) クリミア戦争 エルサレムの聖地管理権問題が発端となり、ロシアとオスマン帝国が対立、1853年に開戦した。ロシアはギリシア正教徒の保護を名目としたが、その目的は南下政策にあった。イギリス・フランス・サルデーニャがオスマン帝国を支援したため、ロシアは敗北した。
- (6) 東京大学史料編纂所 『大日本古文書 幕末外国関係文書七』 1972年 411-412頁
- (7) 函館市史編さん室 『函館市史 都市・住

- 文化編』 1999年 345頁
- (8) M. C. ペリー F. L. ホークス編纂 宮崎壽子
監訳 『ペリー提督日本遠征記 上下合本版』 KADOKAWA 2016年
- (9) 金坂清則 『新訳日本奥地紀行』 平凡社
2013年 329頁
- (10) 小杉雅之進 『麦叢録』 1874年 函館市
中央図書館蔵
- (11) 須藤隆仙 『箱館戦争史料集』 新人物往
来社 2011年 209頁

参考文献

- 金井円 『描かれた幕末明治 イラストレイテッ
ド・ロンドン・ニュース 日本通信1853-1902
増訂』 雄松堂出版 1986年
- 石井孝 『日本開国史』 吉川弘文館 1972年
- 麓慎一 『開国と条約締結』 吉川弘文館 2014年
- 井上勝生 『日本の歴史第18巻 開国と幕末変革』
講談社 2002年
- 石井孝 『戊辰戦争論』 吉川弘文館 1984年
- 保谷徹 『戦争の日本史18 戊辰戦争』 吉川弘
文館 2007年
- 佐々木克 『戊辰戦争』 中央公論新社 1977年
- 『函館市史 通説編第一巻』 函館市 1980年
- 『函館市史 通説編第二巻』 函館市 1991年
- 朝日新聞社 『朝日日本歴史人物事典』 1994年

(市立函館博物館学芸員)

旧暦	新暦	できごと
1856年1月26日付記事 嘉永6年7月18日 安政元年閏7月15日 安政元年8月18日 安政元年8月23日 安政2年8月29日	1853年8月22日 1854年9月7日 1854年10月9日 1854年10月14日 1855年10月9日	ロシア使節プチャーチンが長崎に来航 イギリス東インド艦隊司令長官ジェームズ・スターリングが長崎に来航 長崎奉行水野忠徳らとスターリングの会談 日本國大不列顛國和親約定 調印 長崎にて批准書交換式
1869年6月5日付記事 明治元年11月15日 明治元年11月22日 明治元年12月15日 明治2年3月25日	1868年12月28日 1869年1月4日 1869年1月27日 1869年5月6日	江差にて旧幕府脱走軍の軍艦開陽が座礁、約10日後に沈没 開陽丸の救援に駆け付けた神速も沈没 旧幕府脱走軍が蝦夷地平定を祝して101発の祝砲を撃つ 宮古湾海戦 旧幕府脱走軍の軍艦高尾が新政府軍に拿捕される



GATEWAY AND BELFRY AT HAKODATE.

On the 9th October, 1855, the convention made between the Queen of England and the Emperor of Japan, regulating the admission of British ships into two of the Japanese harbours, was ratified; and though it does

not admit us to trade, or confer any commercial privilege, but merely gives us access to ports of refuge to effect repairs and obtain fresh water, provisions, and such other articles as may be necessary to the health of

the crews and the safety of the vessels, still the event is memorable, and may be the precursor of more important advantages.

In 1612 the English East India Company, on the invitation of William



TEMPLE AT HAKODATE.

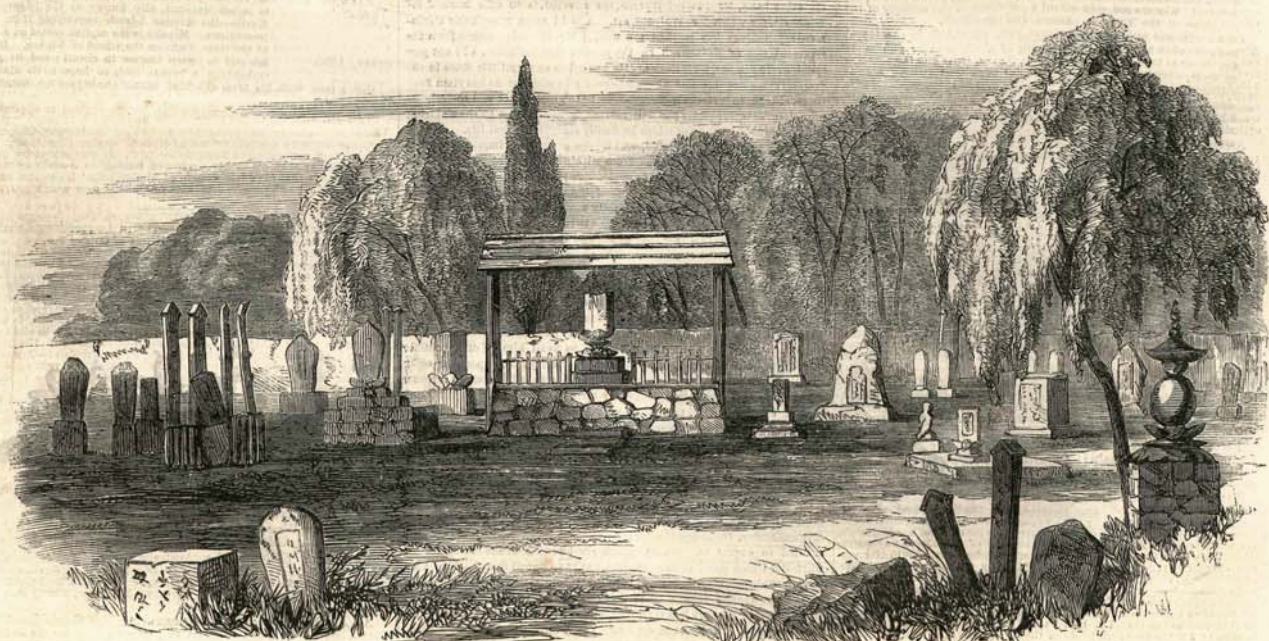
Adams, a native of Jellingham, in the county of Kent, and a pilot by profession, made a successful effort to trade with Japan. In 1598 Adams engaged to pilot a fleet belonging to the Dutch India Com-

pany; it was scattered by tempests, but on the 20th April, 1600, Adams made the coast of Japan, and anchored at the port of Bingo. His ship alone escaped the perils of the voyage; and, out of a crew of twenty-four

only six could perform their duty, the others being ill or completely exhausted by the hardships they had undergone. A Jesuit came on board and acted as interpreter. He was either a Spaniard or a Portuguese



TEMPLE AT HAKODATE.



TEMPLE AND BURIAL-PLACE AT HAKODATE.

S K E T C H E S I N J A P A N .



STREET IN HAKODATE, AND FUNERAL PROCESSION.

and on his report the King of Bingo acted most humanely to the sick sailors, who were conveniently lodged on shore, while Adams was sent to the Emperor, on whom he made a most favourable impression. Adams was a man of considerable ability and acquirements. At the command of the Emperor he built a ship of eighty tons, which afforded great satisfaction, and also gave his Majesty lessons in geometry and mathematics. The grateful pupil provided most liberally for his teacher, bestowing on him a large salary, a manor, and a hundred slaves or servants to cultivate the land; but he would never allow Adams to quit the country. Adams, however, obtained the release of the captain of his ship, and the crew; by whom he sent letters to the English, many of which are curious and instructive. He describes the geography of the country, the character of the people, their trading products, and says, "If a ship come from England to traffic at Japan, not any nation should receive a better welcome; if any ship come near the easternmost part of Japan, let them inquire for me. I am called in the Japan tongue 'Augin Samma;' by that name I am called all the sea-coast along. Nor far to come near the mainland, for you shall have barks with pilots to carry you where you will."

On the 12th June, 1613, the ship *Gloce* arrived from England, with a letter from King James, and presents for the Emperor of Japan. It was commanded by Captain Saris, who was called the Company's General. A treaty, or charter of privileges, was obtained without the least difficulty, and a factory opened. The *Gloce* anchored at Firando, and was visited by King Foyne and his nephew, accompanied by Adams. The King of Firando sent Captain Saris to Jeddo, the capital, and there the Emperor ratified the treaty with the East India Company, and addressed a most friendly letter to King James.

The Dutch became jealous of the English, and, as they had a superior naval force in those waters, did not hesitate to set as buccaners, seizing our ships, plundering the cargoes, and murdering their crews. Their Admiral, Westerwood, even offered a premium for the slaughter of the English. Adams died on the 16th May, 1620, and with him we lost our best friend. He had enjoyed in a higher degree than any other Christian the favour of two Emperors; he had at all times access to them, when many Japan Kings could not obtain an audience. In the year of Adams's death arrived the *James Royal*, of 1000 tons, direct from London; and the admiration excited among the Japanese by so large a vessel inflamed the most envious feelings among the Dutch and Portuguese, for the Emperor and Royal family paid the captain the distinguished honour of going on

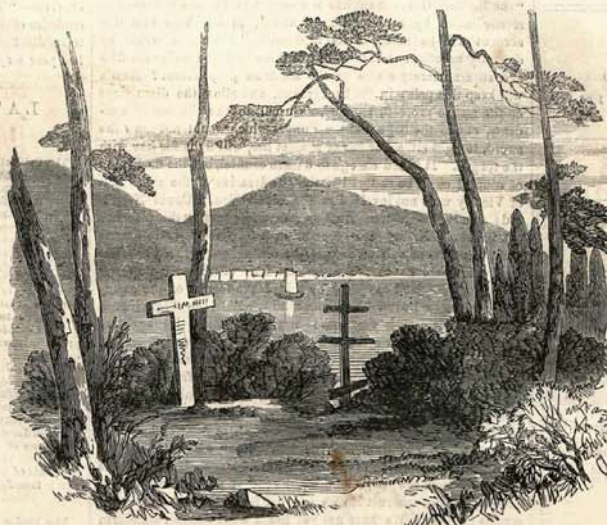
board. But the actual disruption of commercial intercourse between England and Japan is traceable to the reign of Charles II. England was in alliance with Portugal, and the Portuguese had been expelled from

the Dutch; and their officers represented to the Emperor that King Charles, having entered into a treaty with the Dutch, violated it, and formed an alliance with France, and then made war on Holland, although the Dutch and English were of the same religion, while the French and Portuguese were of an opposite religion. They then asked the Emperor what faith he could repose in the English who had acted in so perfidious a manner, and who had moreover decapitated one of their Kings? These statements had great weight with the Emperor, whose moral feelings were rudely shocked by this narrative, more especially by the fact that a people should ally itself with people of another religion, to slaughter their co-religionists. From that day his friendship cooled; the English were soon expelled, and ever since the Dutch have been in the ascendant at Japan. It may be as well to give the words of the prohibitory edict which was served on the Captain of the English ship *Return*, in the year 1673:—"Inasmuch as the King of England was married to a daughter of the King of Portugal, their greatest enemy, they could not admit the English to reopen the factory, and for no other reason."

In 1796 Captain Broughton visited the Japanese islands on a voyage of discovery; and in 1808 the *Phaeton* frigate went to the same waters to intercept Dutch vessels trading between Batavia and Japan, and obtained wood and water. In 1811 Sir Stamford Raffles, being Governor of Java, attempted to renew the trade; and in 1818 Captain Gordon sailed from Bengal to the Bay of Jeddo, and anchored in the bay of Shimada. He remained there seven days in negotiation; at the expiration of which time he was told that permission to trade could not be granted, and ordered to sail with the first fair wind.

The population is estimated by Sir Stamford Raffles at 25,000,000; by Captain Gordon, at 30,000,000; others raise it to 35,000,000—who are divided into eight classes. The empire of Japan is formed of three separate islands, called Nippon, Kewew, or Kima, and Sikof. It also embraces such of the Kurile islands as are not yet occupied by the Russians. The largest is called Matsmai, also known as the twenty-second Kurile—the Russian islands numbering from one to twenty-one. Miyako is the capital, seated on a branch of the river Yedo on the island of Nippon. Its walls are said to be ten leagues in circuit; and its greatest curiosity is a bronze idol, so huge in its dimensions that a man, with his arms extended, cannot encompass the thumb of the right hand.

By the kindness of a Correspondent, we are enabled to append a few



ENGLISH AND RUSSIAN BURIAL-GROUND, AT NAGASAKI, SECURED BY TREATY, NOVEMBER, 1855.

Japan because some of their missionaries had been detected in attempts to change the religion of the country, for which they were crucified by the King of Firando. About this time we had a naval war with



JAPANESE OFFICIALS ON BOARD "THE WINCHESTER," AT NAGASAKI.



OMEDSK AND OBUNGO, AT NAGASAKI.

details of the ratification of the Treaty, contained in a letter from one of the officers of H.M.S. *Winchester*.

Nagasaki, Oct. 10th, 1855.

After some preliminary discussions it was arranged that the ratifications should be exchanged on the 9th of October; and we yesterday proceeded to the city in *Zorlor*, steam tender to the flag-ship, *Admiral*, Captains, and various officers to the number of twenty-one. We started about ten, when the Japanese officials came on board to conduct us. We passed quickly through the pretty scenery described last year; received the usual honours from the Dutch steam corvette, and a visit from her commander; saw the Japanese steamer with her new flag (white with red) — a recent present through an old acquaintance of ours as Dutch Looming; and anchored at the landing-place.

We officers got on shore to receive the *Admiral*, and joined our Japanese Court friends; we then proceeded with rather less state than last year to the Governor's house, where we found the Deputy-Governor waiting to receive the *Admiral*, and to conduct him to the presence of the Commissioners. In the audience-chamber were ranged the old and new Governors, and the old and new *Onetaka*. Friendly greetings were exchanged, and inquiries duly made for the health of the Queen, *Admiral*, and officers. We then retired to an outer room, which was enlarged to suit our party. Tea and pipes, with the usual box of sweets, were placed before us: the latter we marked with our names, for future use.

The audience-chamber being made ready for the great ceremony by a double date for the Grandees and arm-chairs for us, and smoking materials being arranged for the use of everybody, we were ushered in, and found the four principal personages seated, or rather squatted, on the ground. My Sketch will give you a good idea of the figures they presented. The conference began, and after some conversation our ratified treaty was produced in the simplest style from an envelope, and the seal and subscribed name of Clarendon shown to them, with a little explanation thereof. Meanwhile the Japanese treaty was brought in by their officials. A large box was opened, and the silk-covered book or treaty was carefully unrolled from its craps cover inside a lacquered case, its silken cords loosed; and all being ready, our *Admiral* stood forth, surrounded by his officers, and tendered to the Governor, *Azao Iwanami* Rami, the treaty of friendship in the name of her Majesty; and the Governor of Nagasaki, in the name of the Emperor, presented the Japanese version. Several well-turned speeches were made by the new Governor, and we had the satisfaction of seeing the affair successfully closed. We then withdrew to make room for the banquet, which was to be given by the Governors to the *Admiral* and officers.

First came pipes and tea, then a procession of minor officials in Court dresses, bearing little tables or trays with covered cups and lacquered ware, various saucers, trays, cups, chopsticks, and paper napkins, with a silver spoon and fork (of Dutch manufacture) for each person. The food consisted of rice, fish, soup, with mushrooms, stewed fish, a whole fish baked, pickles, omelette, raw fish with vinegar and pomegranate, raw salt fish and jelly, artichokes and cassia; cake, hot and sweet, was served round. Altogether the repast did not equal that at Hakodade. We had a final cup of tea, and withdrew again by a hint from the Japanese interpreter, in order to allow the display of the presents for the *Admiral* and officers to take place, and the *Admiral* was now finished, we thanked them for our hospitable entertainment; we made our farewell bows and walked anxiously down to our boats.

The presents came on board in the evening: there was a large lacquered bowl and cover, a tray and case, with some specimens of silk and craps, for the *Admiral* and officers who had been present at the conference. The Sketches I have sent you will give you a good idea of the sort of country and the public buildings among the Japanese. The burial-grounds and temples present a peculiarly neat appearance from the sea; and the sketches of the figures convey an adequate impression of the appearance which these singular people present. Their loose hanging sleeves are stitched at the lower part, and thus make a good pocket, in which they put their handkerchiefs, fans, or paper.

CALENDAR FOR THE WEEK.

SUNDAY, Jan. 27.—Sexagesima Sunday. Mozart born, 1756.
MONDAY, 28.—Admiral Byng shot, 1757.
TUESDAY, 29.—Swedenborg born, 1686. George III. died, 1820.
WEDNESDAY, 30.—Charles I. beheaded at Whitehall, 1649.
THURSDAY, 31.—Hilary Term ends. Guido Fawkes executed, 1606.
FRIDAY, Feb. 1.—Pheasant and Partridge shooting ends.
SATURDAY, 2.—Purification. Candlemas Day.

TIMES OF HIGH WATER AT LONDON-BRIDGE, FOR THE WEEK ENDING FEBRUARY 2, 1856.

Sunday.	Monday.	Tuesday.	Wednesday.	Thursday.	Friday.	Saturday.
h m	h m	h m	h m	h m	h m	h m
8 15	9 25	10 35	11 45	12 55	1 05	2 15

LIST OF ENGRAVINGS IN THIS WEEK'S "ILLUSTRATED LONDON NEWS."

Distribution of the Queen's Medals to the French Crimean Troops by his Royal Highness the Duke of Cambridge, at Paris	page 81
Sketches in Japan:	
Gateway and Bailey at Hakodade	84
Temple at Hakodade	84
Temple at Hakodade	84
Burial-place and Temple at Hakodade	84
Street in Hakodade, and Funeral Procession	85
English and Russian Burial-ground, at Nagasaki	85
Japanese Officials on board the <i>Winchester</i> , at Nagasaki	85
<i>Onetaka</i> and <i>Obongu</i> , at Nagasaki	85
Distribution of the Queen's Medals to the French Crimean Troops by H.R.H. the Duke of Cambridge	88
Presentation of the Grand Cordons of the Legion of Honour to the Sultan, at Constantinople	89
Portrait of Private John Penn, 17th Lancers, from the Crimea, with Eleven Honours	92
Marriage of Sir R. Peel and Lady Emily Hay—The Bridecake	92
Pictoria's Island (sketched from H.M.S. <i>Amphitrite</i>)	92
New Mini-hall, Elysian Hotel, Covent-garden	93
Portrait of M ^{rs} . Lela Moore	93
Map of the Frontiers of Austria and Russia	96
The Soldiers' Infant Home, Rosey Park, Hampstead	97
Manufacture of Bayonet (Five Engravings)	100
The Chasseurs d'Afrique	100
Careening Yacht, Sebastopol (Sketches by J. A. Crowe)	101
An Incident in the Present War (Painted by G. Rowley)	101
Sculptures from Niseval—Inscription to Lillio	102
New National Schools, Hemel-Hempstead, Herts	104
St. Stephen's Church, Westbourne-park, Paddington	104
St. Mary and St. Nicolas College, Lancing, Sussex	104
Bereados in the Restored Church of Bedminster	104

THE ILLUSTRATED LONDON NEWS.

LONDON, SATURDAY, JANUARY 26, 1856.

The Austrian propositions for peace, which, when first promulgated, made the stockjobbers of Vienna, Paris, and London frantic with joy, and well-nigh turned the heads of many honest people, do not improve upon acquaintance. The more they are studied, the less precise and satisfactory do they appear. There is already a strong revulsion in the popular feeling with respect to them. An impression prevails, and grows, that the Allies (to use a vulgar but expressive phrase) are about to be "sold;" and that, if an armistice be agreed upon while such vague propositions are to be discussed, Russia alone will gain the advantage. If the war continue, there is no reasonable ground for doubting that England and France will be able before next winter to dictate much more satisfactory terms, and to lay down the basis of a pacification broad enough and strong enough to last for a quarter, if not for half, a century; but if an armistice be concluded—if the season of activity in the Baltic be allowed to slip away in palace—if the whole conduct of the world's business be left to diplomatists at Vienna, Berlin, Frankfurt, Aix-la-Chapelle, or any other place that has been named or suggested—the result, we believe, will be anything but satisfactory to the true friends of the peace and independence

of Europe. Three out of the five points of the Austrian scheme—to which Russia is said to have given her "pure and simple" adhesion—are of such a nature that a "pure and simple" adhesion to them may mean nothing. If we take, for instance, the proposed cession of a slice of Bessarabia, so as to leave the mouths of the Danube within the line of the Turkish territory, we find that the fortress of Chotym may or may not be included in the arrangement. If not included, Moldavia and Wallachia may be as easily overrun by a Russian force as at the present time, when the Pruth is the line of boundary. Again, if we examine the proposal for the "neutralisation" of the Black Sea, we shall find a great, if not insurmountable, difficulty in defining what is meant by neutralisation, and what peculiar sense Russia attributes to the word. The Black Sea was neutral before the declaration of war, so that to redeclare it to be neutral means little or nothing. The Austrian proposition would go to prohibit Russia from constructing "arsenals" on the coasts of the Euxine; but again we are met by a difficulty. Are arsenals and fortresses identical? and, if not, what is the difference between the two words—or, rather, the two things? And Sebastopol—of which there is an ugly rumour afloat that its docks are not to be blown up;—may that be rebuilt as a fortress, if Russia undertake not to make it an arsenal? And Anapa? Was that a fortress or an arsenal? Russia, it appears, is to be allowed to have establishments for the defence of her possessions in the Euxine; but what treaty or protocol can define what is necessary for pure defence without being available for aggression? Any fortress strong enough to resist Turkey would, in Russian hands, be not only strong enough, but ready enough, to harbour the means of offensive warfare against that Power whenever the moment seemed favourable for the renewal of those projects which Russia may postpone, but will never abandon—except upon compulsion. The Fifth Point is even more vague. It is supposed to refer to Bomarsund, and may or may not include a stipulation against its re-edification either as fortress or arsenal. At present the world is in the dark on the subject; though we may be sure that Russia will not yield a point so humiliating as that would be, unless a strong pressure be put upon her both by Austria and by Prussia. The question does not interest Austria; and, if it interest Prussia at all, it is in a way adverse from the interests of Great Britain and France, and their new ally, Sweden. The *Journal de St. Petersburg* has already put forth an official, or semi-official, announcement, of which the object seems to be to prepare the way for a denial of any right on the part of the Allies to moot this question. "Out of consideration for the general wish of Europe," says the Russian organ, "the Russian Government has not sought to impede the work of reconciliation by accessory negotiations, in the hope that due account will be taken of its moderation." What is meant by accessory negotiations, if they be not those included under the fifth and superfluous clause of the Austrian propositions? Russia will keep this point in the background, and allow the discussions on the rest to proceed, trusting, as usual, to the chapter of accidents, and to the hope that the Powers which would not draw the sword, to fight either for her or against her, will fight for her with the tongue. It is bad enough to darken counsel, but the darkening of counsel could be endured if the paralysation of the right arm of Victory were not involved in the obfuscation. Count Nesselrode denies, with true Russian bravado, that "the interests of Russia call for the conclusion of peace," and asserts that Russia merely shows her present willingness to listen to terms "out of deference to the representations of friendly Powers." France and England can judge by this of the temper of the enemy they have to deal with. The great, the invincible, the magnanimous Russia does not ask for peace—not she! Peace is begged of her by her good friends, and she will not be so unmerciful as to decline to listen to their overtures. But, if Russia have good friends, so have Great Britain and France. Their friends are the justice and the purity of their cause, the openly-avowed or secret sympathy of all the nations of Europe, the indomitable energy, the wealth, and the resources of their people; and last, not least, fleets and armies for the Euxine, and gun-boats for the Baltic, numerous enough to make St. Petersburg tremble. Peace may result from the negotiations; but, if it do, it must be because the Allies mistrust Russia and her friends, not because they confide in them. We have not yet heard what English statesmen have been selected to watch over the interests of Great Britain at the approaching Conference; but, of all the persons suggested, Lord Clarendon seems to us to be by far the most eligible. He is a practised diplomatist, and what is of as great if not of more importance, he is a clear-headed and honest statesman. In his hands the interests of England would be safe; and while his own countrymen would implicitly confide in his honour and ability, his name would excite no jealousy or mistrust in any quarter.

These instructive documents periodically published by the Board of Trade are of incalculable service to all engaged in commerce; and, coupled with the Trade Circulars published by eminent mercantile firms, enable the public to compare, from year to year, the increase or decrease of business in the varied departments of industry. It has long been regretted that similar facilities for obtaining accurate information in rural economy have not been furnished on the responsibility of Government, for a Board of Agriculture is only inferior to a Board of Trade. Attempts have, however, been recently made to supply the defect. The Irish returns conducted by the Constabulary are very valuable; those entrusted to the Poor Law Commissioners in England have hitherto failed. The second Report on Scotland is now before us, and is of a most gratifying character, diligently and gratuitously prepared by the district enumerators. "These gentlemen," to quote the language of the official document, "constitute a selected body of above one thousand of the tenant-farmers of Scotland, and their assistance is not only of the greatest value in obtaining correct estimates of produce, but their co-operation stamps the statistical inquiry with an amount of agricultural approbation, and lends to it a weight of agricultural influence, which has materially conducted to its success."

A periodical census shows us the amount of population with almost unerring accuracy, and with equal exactness we ought to know how much food our native resources can supply from year to year for their sustenance. This knowledge would enable us to calculate on the extent of cereals we should require from foreign countries, depriving the corn trade of a speculative character, and averting those panics, founded on vague rumours, which frequently give rise to civic tumult. An eminent political economist, who is looked up to as an authority, estimated the average produce of wheat in Scotland at 1,137,500 quarters, and of barley at 1,800,000 quarters, and he was believed on the reputation of his name; but it appears from the ascertained and enumerated return in 1855 that the yield of wheat was only 632,814 quarters, and of barley 702,362 quarters. Errors of this magnitude reduce statistics to a mere guess, and render them worse than valueless. The following is the estimate of the gross produce of the subjoined articles in 1855 and 1854:—

	1855.	1854.
Wheat, in bushels	5,083,540	4,848,679
Barley, " "	6,095,904	7,645,328
Oats, " "	30,079,714	34,093,047
Bees, " "	556,876	645,418
Bees and Peas, " "	1,183,647	1,814,983
Turnips, " tons	6,401,476	6,411,419
Potatoes, " "	733,141	520,915

It may be well to observe that the return for 1854 included beans only; that for 1855 embraced both beans and peas. In 1855 there were 43,462 occupants, and the total acreage under tillage was 3,529,902½ acres. In comparing the two years, wheat culture increased by 23,067½ acres, while that of barley decreased by 21,426½ acres. Taking the gross returns for the two years, as regards the area under wheat, barley, oats, rye, beans, and peas, they only vary from each other by 176 acres. In 1854 there were 1,374,515½; and in 1855, 1,374,691½ acres. The increase on the total stock of 1855, as compared with 1854, is, 937,630, while that on horses and sheep alone is 628,107. The total stock for 1855, including horses, milch cows, other cattle, calves, sheep, lambs, and swine, was, in 1855, 6,581,014 head; and in 1854, 6,043,384.

The list of occupants (43,462) is confined to those who have a purely agricultural status—the names of householders, farmers, owners of villas, &c., being struck out. Where the same individual leases more farms than one in a parish, those farms have been scheduled together, so that the roll is made up of occupants, not of tenements. A distinction is made between tenants renting at and above £20, and those renting at and above £10. The former class contains 4339 occupants in the counties of Argyle, Caithness, Inverness, Orkney and Zetland, Ross and Cromarty, Sutherland, and in the Isle of Arran; the second, 31,123, renting at £10 and upwards, in the remaining counties. The remainder are below these rates of rental; and the report observes—"Though the number of such occupants is great, the statistics of their holdings is unimportant; and, not being subject to sudden fluctuations, it was conceived that the results obtained last year may with safety be readopted."

LATEST INTELLIGENCE.

THE PEACE NEGOTIATIONS.

The Cabinets of England and France are agreed that the negotiations shall not be held in a German town; and in all probability Paris will be fixed upon, as affording the Envoys of the Allies the best opportunity of immediate reference to their Governments.—*Morning Post*, Friday.

The Vienna correspondent of Friday's *Times* (second edition) says—"The most strenuous efforts are now being made to induce England not to insist on Russia's claiming the eastern coast of the Black Sea. In diplomatic circles considerable stress is made of the inconceivable obstinacy displayed by Sir Hamilton Seymour in this matter. It is clearly understood that the Consuls of the Allied Powers are to be allowed to reside at the different Russian ports in the Black Sea, and it is probable that Austria also agrees with the Western Powers in thinking that Russia must pledge herself never again to fortify the Aland Islands."

The *Constitutionnel* states that M. Messimo d'Azeglio is to be the representative of Sardinia in the approaching Conference on the Eastern question.

Rumour, Jan. 24.—It has been determined at a Council at which the King presided, that Russia will make no very open demonstration of her wish to be admitted to the Conference. Diplomatic relations between the representative of Russia and those of the Western Powers have been partially resumed. On their last meeting in public, the Baron de Bismarck and Lord Bloomfield were in conversation for a considerable time. The news of the Russian acceptance has been received very coldly in Sweden. The national feeling there is greatly disappointed at the prospects of peace. We learn from Copenhagen that a similar dissatisfaction is manifested by the ultra national party of Denmark.

THE CRIMEA.

The *Theodor* has arrived at Marseilles, with intelligence from the Crimea to the 12th instant. The firing continues on both sides of Sebastopol. The Allies have blown up two of the docks. The Russians are taking up their winter quarters at Simpheropol and Bagchaserai. The news from Kimburn is to the effect that the Russians had 20,000 men in echelon between Petroska and Otchakoff, and that in consequence fears were entertained of an attack on the fortress of Kimburn. The garrison had been reinforced by troops under the command of General Lefort. The flotilla was frozen in, but would aid in the defence if the Russians should attempt the place.

THE DIFFERENCES WITH PERSIA.

The following is the text of the ultimatum addressed to the Court of Persia by Mr. Murray:—

1. The Government shall restore to liberty the Princess, wife of Mirza.
2. That it shall acknowledge Mirza as Consul for the Queen of England.
3. That the Prime Minister of the Shah shall proceed to the residence of the English Embassy, to offer an apology, and withdraw his offensive note.

Mr. Murray, in spite of some resistance, has left a agent at Teheran, and has threatened to support him by an English fleet in the Persian Gulf.

CHURCH, UNIVERSITIES, &c.

APPOINTMENTS.—*Rectories*: The Rev. J. C. T. Pattenson to St. Anne, Donnington, with the Incumbency of Kingston-upon-Son, Nottinghamshire; the Rev. G. Baring to Linsfield, Surrey; the Rev. H. C. Glanville to Shevocke, near Devonport; the Rev. J. Griffith to Neath, with Llantwit, Glamorganshire; the Rev. R. Farquharson to Long Langton, near Blandford, Dorset. *Vicarages*: The Rev. A. Gilbert, to Benham, near Holt, a vicar; the Rev. W. F. Bickmore to Keston, with the Rev. W. G. Holmes to Little Hampton, Sussex. *Incumbencies*: The Rev. R. P. Cornish to Ivybridge, Devonshire; the Rev. W. E. Evans to St. Andrew, London; the Rev. H. Wood to Christchurch, Paddington; the Rev. J. P. Waldo to Woburn Episcopal Chapel, Tavistock-square, London; the Rev. H. W. Brooks, to St. Stephen's Church, Westbourne Park, Paddington. *Cure*: The Rev. H. W. Gray to Borely, Essex (and not to the Incumbency, as stated in our Journal of Dec. 3). The Queen has been pleased to constitute the colony of Western Australia to be a Bishop's See and Diocese, to be called the Bishopric of Perth, and to appoint the Venerable Matthew B. Hall, Archbishop of Adelaide, to be ordained and consecrated Bishop of the said See.

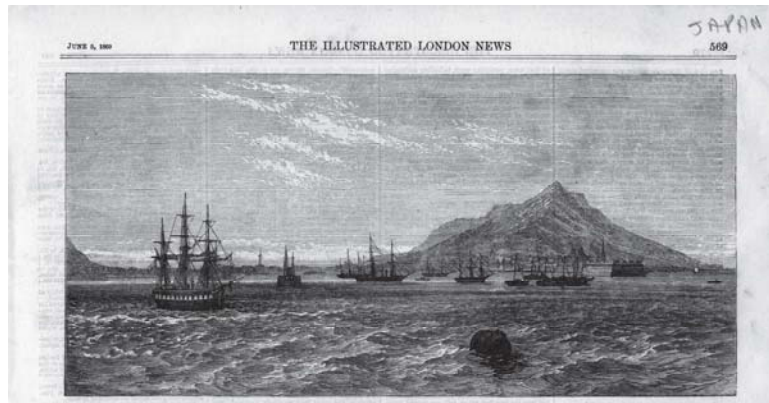
OPENING OF PARLIAMENT.—We understand that her Majesty has signified her gracious intention of opening the Session of Parliament in person; and that the Address in the Lords, in reply to her Majesty's speech from the Throne, will be moved by the Earl of Gosford, and seconded by the Earl of Abington.—*Globe*.

図 4

「ペリー提督日本遠征記 ENTRANCE TO A
TEMPLE AT HAKOTADI」 H15-0008



図 5



the Royal Navy. In mere seamanship they had nothing to learn, for the men of the Naval Reserve are the very pick of the mercantile marine, and their lieutenants and commanders are the most skilled officers of our finest lines of steam and sailing vessels. The Naval Reserve now numbers about 16,000 men. Its numbers have stood at a higher figure; but the applications to enter the force have been so numerous, and its popularity in some ports has been so great, that it is now easy to make a choice of men, and to remove those who were at first admitted, but for whose places better applicants can now be got. Of this force of 16,000 men, about 6,000 would be available in a single week, and, at the lowest estimate, at least 12,000 within six months, with about 600 of the best officers of the mercantile marine. Their character and efficiency as sailors and gunners will now bear the strongest test. The Lords of the Admiralty have conveyed their approbation of the conduct of the squadron in highly complimentary terms. They bear witness to the readiness with which the men belonging to the Reserve volunteered for this particular service, and to the order and cleanliness of the force. Testimony is also borne to the efficiency of the Coast-guard, and to the behaviour of the officers and men of the fleet.

HAKOTADI, JAPAN.

By the aid of Mr. Sydney Holt, acting sub-lieutenant, an officer of H.M.S. Cormorant, the ship-of-war whose last appearance in our pages was in March, 1867, in an action with the piratical savages of

South Formosa, we are furnished with a sketch of the new treaty port of Hakotadi, in the island of Yezo, the most northerly part of Japan. His own vessel occupies a central position in this view of the harbour, while the French war-ship *Venus* lies nearer to the front, at the left-hand corner; and his sketch also shows the steam and other vessels of the native rebel government. The situation of Hakotadi is in north lat. 41 deg. 47 min., east long. 140 deg. 44 min., or thereabouts. The town stands on the north-east slope of a peaked peninsula, 1,336 ft. high, connected by a low sandy isthmus with the mainland of Yezo. Its population a few years ago was 6,000. The harbour is guarded by a fort of massive granite walls, surrounded by a moat full of water, and to be armed with fifty-two guns. This stands at the extreme point of the promontory, where there is a shoal. The climate here is cold; the temperature during the stay of the *Cormorant* last February was never above freezing-point, and the hills were allways covered with snow. Hakotadi is at present a place of particular interest, being the seat of the Japanese civil war, and in possession of the rebels, or so-called "exiled Kaimin" whose object is to separate the island of Yezo from the other islands of Japan and to establish a government under the Prince of Sakowaka. A provisional government has already been formed, and on Jan. 27 their ships dressed colours, and 101 guns were fired in honour of their taking possession of the place. Namiyemba has been appointed Governor of Hakotadi, and General Matidairo-taro to the command of the military forces; while Admiral Enomoto-kimadaro commands the fleet, which our

correspondent has endeavoured to represent. This consists of the Emperor, a screw-yacht presented to the Tycoon by her Majesty in 1860; the *Isago*, a paddle-steamer, formerly a Russian man-of-war; and the *Dumbarton*, paddle; while the *Asakusa*, another screw-vessel, has come to grief, but may be seen at the left hand of the view. These, with a little steamer called the *Chipola Maru* compose the rebel fleet of Yezo.

THE SOUTH STAFFORDSHIRE EXHIBITION.

The opening, on the 11th ult., of the South Staffordshire Industries and Fine-Arts Exhibition, in the hall built for this occasion at Wolverhampton, in the grounds of Mellin's House, was mentioned in our provincial news. The ceremony was presided over by Earl Granville, with the assistance of Lord Lichfield, Lord Wrottesley, the Bishop of Lichfield, the Right Hon. C. P. Villiers M.P., and several members of Parliament, and the Mayors of Wolverhampton, Birmingham, Worcester, and Kidderminster. The exhibition building, which is of iron and glass, forms a central nave 150 ft. long by 60 ft. in width, and 18 ft. high at the spring of the roof, which is semi-octagonal, and rises to a height of 4 ft. from the floor. The architect and designer of the decorations is Mr. Bidlake, of Wolverhampton; the contractors are Messrs. Clarke, of that town. Around the building is a fine-arts gallery, containing nearly 800 oil and water colour paintings. The objects of industry exhibited are placed on the floor and outside the building. The

図 6

図 5・6 「THE ILLUSTRATED LONDON NEWS」 H15-0002.0003



图7 「麦叢錄附图 十二月十五日於函港祝炮之圖」 函館市中央図書館蔵

JAN.26, 1856 SKETCHES IN JAPAN

On the 9th October, 1855, the convention made between the Queen of England and the Emperor of Japan, regulating the admission of British ships into two of the Japanese harbours, was ratified ; and though it does not admit us to trade, or confer any commercial privilege, but merely gives us access to ports of refuge to effect repairs and obtain fresh water, provisions, and such other articles as maybe necessary to the health of the crews and the safety of the vessels, still the event is memorable, and maybe the precursor of more important advantages.

In 1612 the English East India Company, on the invitation of William Adams, a native of Jellingham, in the county of Kent, and a pilot by profession, made a successful effort to trade with Japan.

In 1598 Adams engaged to pilot a fleet belonging to the Dutch India Company; it was scattered by tempests, but on the 20th April, 1600, Adams made the coast of Japan, and anchored at the port of Bingo.

His ship alone escaped the perils of the voyage; and, out of a crew of twenty-four only six could perform their duty, the others being ill or completely exhausted by the hardships they had undergone.

A Jesuit came on board and acted as interpreter.

He was either a Spaniard or a Portuguese and on his report the King of Bingo acted most humanely to the sick sailors, who were conveniently lodged on shore, while Adams was sent to the Emperor, on whom he made a most favourable impression.

Adams was a man of considerable ability and acquirements.

At the command of the Emperor he built a ship of eighty tons, which afforded great satisfaction, and also gave his Majesty lessons in geometry and mathematics.

The grateful pupil provided most liberally for his teacher, bestowing on him a large salary, a manor, and a hundred slaves or servants to cultivate the land; but he would never allow Adams to quit the country.

Adams, however, obtained the release of the captain of his ship, and the crew; by whom he sent letters to the English, many of which are curious and instructive.

He describes the geography of the country, the character of the people, their trading products, and says, “ If a ship come from England to traffic at Japan, not any nation should receive a better welcome; if any ship come near the easternmost part of Japan, let them inquire for me. I am called in the Japan tongue ‘Augin Samma;’ by that name I am called all the sea coast along. Nor fear to come near the mainland, for you shall have barks with pilots to carry you where you will.”

On the 12th June, 1613, the ship Clove arrived from England, with a letter from King James, and presents for the Emperor of Japan.

It was commanded by Captain Saris, who was called the Company’s General.

A treaty, or charter of privileges, was obtained without the least difficulty, and a factory opened.

The Clove anchored at Firando, and was visited by King Foyne and his nephew, accompanied by Adams.

The King of Firando sent Captain Saris to Jeddo, the capital, and there the Emperor ratified the treaty with the East India Company, and addressed a most friendly letter to King James.

The Dutch became jealous of the English, and, as they had a superior naval force in those waters, did not hesitate to act as buccaneers, seizing our ships, plundering the cargoes, and murdering their crews.

Their Admiral, Westerwood, even offered a premium for the slaughter of the English.

Adams died on the 16th May, 1620, and with him we lost our best friend.

He had enjoyed in a higher degree than any other Christian the favour of two Emperors: he had at all times access to them, when many Japan Kings could not obtain an audience.

In the year of Adams's death arrived the James Royal, of 1000 tons, direct from London; and the admiration excited among the Japanese by so large a vessel inflamed the most envious feelings among the Dutch and Portuguese, for Emperor and Royal family paid the captain the distinguished honour of going on board.

But the actual disruption of commercial intercourse between England and Japan is traceable to the reign of Charles II.

England was in alliance with Portugal, and the Portuguese had been expelled from Japan because some of their missionaries had been detected in attempts to change the religion of the country, for which they were crucified by the King of Firando.

About this time we had a naval war with the Dutch; and their officers represented to the Emperor that King Charles, having entered into a treaty with the Dutch, violated it, and formed an alliance with France, and then made war on Holland, although the Dutch and English were of the same religion, while the French and Portuguese were of an opposite religion.

They then asked the Emperor what faith he could repose in the English who had acted in so perfidious a manner, and who had moreover decapitated one of their Kings?

These statements had great weight with the Emperor, whose moral feelings were rudely shocked by this narrative, more especially by the fact that a people should ally itself with people of another religion, to slaughter their co-religionists.

From that day his friendship cooled; the English were soon expelled, and ever since the Dutch have been in the ascendant at Japan.

It may be as well to give the words of the prohibitory edict which was served on Captain of the English ship Return, in the year 1673 :- "Inasmuch as the King of England was married to a daughter of the King of Portugal, their greatest enemy, they could not admit the English to reopen the factory, and for no other reason."

In 1796 Captain Broughton visited the Japanese islands on a voyage of discovery; and in 1808 the Phaeton frigate went to the same waters to intercept Dutch vessels trading between Batavia and Japan, and obtained wood and water.

In 1811 Sir Stamford Raffles, being Governor of Java, attempted to renew trade; and in 1818 Captain Gordon sailed from Bengal to the Bay of Jeddo, and anchored in the bay of Shimada.

He remained there seven days in negotiation; at the expiration of which time he was told that permission to trade could not be granted, and ordered to sail with the first fair wind.

The population is estimated by Sir Stamford Raffles at 25,000,000; by Captain Gordon, at 30,000,000; others raise it to 35,000,000; - who are divided into eight classes.

The empire of Japan is formed of three separate islands, called Nippon, Kewsew or Kiusin, and Sikof.

It also embraces such of the Kurile islands as are not yet occupied by the Russians.

The largest is called Matsmai, also known as the twenty-second Kurile - the Russian islands numbering from one to twenty-one.

Miyako is the capital, seated on a branch of the river Yado on the island of Nippon. Its walls are said to be ten leagues in circuit; and its greatest curiosity is a bronze idol, so huge in its dimensions that a man, with his arms extended, cannot encompass the thumb of the right hand.

By the kindness of a Correspondent, we are enabled to append a few details of the ratification of the Treaty, contained in a letter from one of the officers of H.M.S Winchester: -

Nagasaki, Oct. 10th, 1855.

After some preliminary discussions it was arranged that the ratifications should be exchanged on the 9th of October; and we yesterday proceeded to the city in Tartar, steam tender to the flag-ship, Admiral, Captains, and various officers to the number of twenty-one.

We started about ten, when the Japanese officials came on board to conduct us.

We passed quickly through the pretty scenery described last year; received the usual honours from the Dutch steam corvette, and a visit from her commander; saw the Japanese steamer with her new flag (white with red ball) - a recent present through an old acquaintance of ours as Dutch Loembing; and anchored off the landing-place.

We officers got on shore to receive the Admiral, and joined our Japanese Court friends; we then proceeded with rather less state than last year to the Governor's house, where we found the Deputy-Governor waiting to receive the Admiral, and to conduct him to the presence of the Commissioners.

In the audience-chamber were ranged the old and new Governors, and the old and new Ometskis.

Friendly greetings were exchanged, and inquiries duly made for the health of the Queen, Admiral, and officers.

We then retired to an outer room, which was enlarged to suit our party.

Tea and pipes, with the usual box of sweets, were placed before us: the latter we marked with our names, for future use.

The audience-chamber being made ready for the great ceremony by a double dais for the Grantees and arm-chairs for us, and smoking materials being arranged for the use of everybody, we were ushered in, and found the four principal personages seated, or rather squatted, on the ground.

My Sketch will give you a good idea of the figures they presented.

The conference began, and after some conversation our ratified treaty was produced in the simplest style from an envelope, and the seal and subscribed name of Clarendon shown to them, with a little explanation thereof.

Meanwhile, the Japanese treaty was brought in by their officials.

A large box was opened, and the silk-covered book or treaty carefully unwrapped from its crape cover inside a lacquered case, its silken cords loosed; and all being ready, our Admiral stood forth, surrounded by his officers, and tendered to the Governor, Araoo Iwamino Rami, the treaty of friendship in the name of her Majesty; and the Governor of Nagasaki, on the part of the Emperor, presented the Japanese version.

Several well-turned speeches were made by the new Governor, and we had the satisfaction of seeing the affair successfully closed.

We then withdrew to make room for the banquet, which was to be given by the Governors to the Admiral and officers.

First came pipes and tea, then a procession of minor officials in Court dresses, bearing little tables or trays with covered cups and lacquered ware, various saucers, trays, cups, chopsticks, and paper napkins, with a silver spoon and fork (of Dutch manufacture) for each person.

The food consisted of rice, fish soup, with mushrooms, stewed fish, a whole fish baked, pickles, omelettes, raw fish with vinegar and pomegranate, raw salt fish and jelly, artichokes and cassada; cake, hot and sweet, was served round.

Altogether the repast did not equal that at Hakodade.

We had final cup of tea, and withdrew again by a hint from the Japanese interpreter, in order to allow the display of the presents for the Admiral and officers to take place, and the Admiral was to touch them in mark of acceptance.

The round of ceremonies being now finished, we thanked them for our hospitable entertainment; we made our farewell bows and walked smartly down to our boats.

The presents came on board in the evening: there was a large lacquered bowl and cover, a tray and case, with some specimens of silk and crape, for the Admiral and officers who had been present at the conference.

The Sketches I have sent you will give you a good idea of the sort of country and the public buildings among the Japanese.

The burial-grounds and temples present a peculiarly neat appearance from the sea, and the sketches of the figures convey an adequate impression of the appearance which these singular people present.

Their loose hanging sleeves are stitched at the lower part, and that makes a good pocket, in which they put their handkerchiefs, fans, or paper.

図6を活字化したもの

By the aid of Mr. Sydney Holt, acting sub-lieutenant, an officer of H.M.S. Cormorant, the sloop-of-war whose last appearance in our pages was in March, 1867, in an action with the piratical savages of South Formosa, we furnished with a sketch of the new treaty port of Hakodadi, in the Island of Yezo, the most northerly part of Japan.

His own vessel occupies a central position in this view of the harbour, while the French war-ship Venus lies nearer to the front, at the left-hand corner; and his sketch also shows the steam and other vessels of the native rebel government.

The situation of Hakodadi is in north lat. 41 deg. 47 min., east long. 140 deg. 44 min., or thereabouts. The town stands on the north-east slope of a peaked peninsula, 1336ft. high, connected by a low sandy isthmus with the mainland of Yezo.

Its population a few years ago was 6000. The harbour is guarded by a fort of massive granite walls, surrounded by a moat full of water, and to be armed with fifty-two guns.

This stands at the extreme point of the promontory, where there is a shoal.

The climate here is cold; the temperature during the stay of the Cormorant last February was never above freezing-point, and the hills were always covered with snow.

Hakodadi is at present a place of particular interest, being the seat of the Japanese civil war, and in possession of the rebels, or so-called “exiled Karais,” whose object is to separate the island of Yezo from the other islands of Japan and to establish a government under the Prince of Sakowugawa.

A provisional government has already been formed, and on Jan. 27 their ships dressed colours, and 101 guns were fired in honour of their taking possession of the place. Nagai-zemba has been appointed Governor of Hakodadi, and General Matidairo-taro to the command of the military forces; while Admiral Enomoto-kamadjaro commands the fleet, which our correspondent has endeavoured to represent.

This consists of the Emperor, a screw-yacht presented to the Tycoon by her Majesty in 1858; the Eagle, a paddle-steamer, formerly a Russian man-of-war; and the Dumbarton, paddle; while the Askuelot, another screw-vessel, has come to grief, but may be seen at the left hand of the view. These, with a little steamer called the Chipolo Maru compose the rebel fleet of Yezo.

⑦



⑧



⑤



⑥



⑤

④



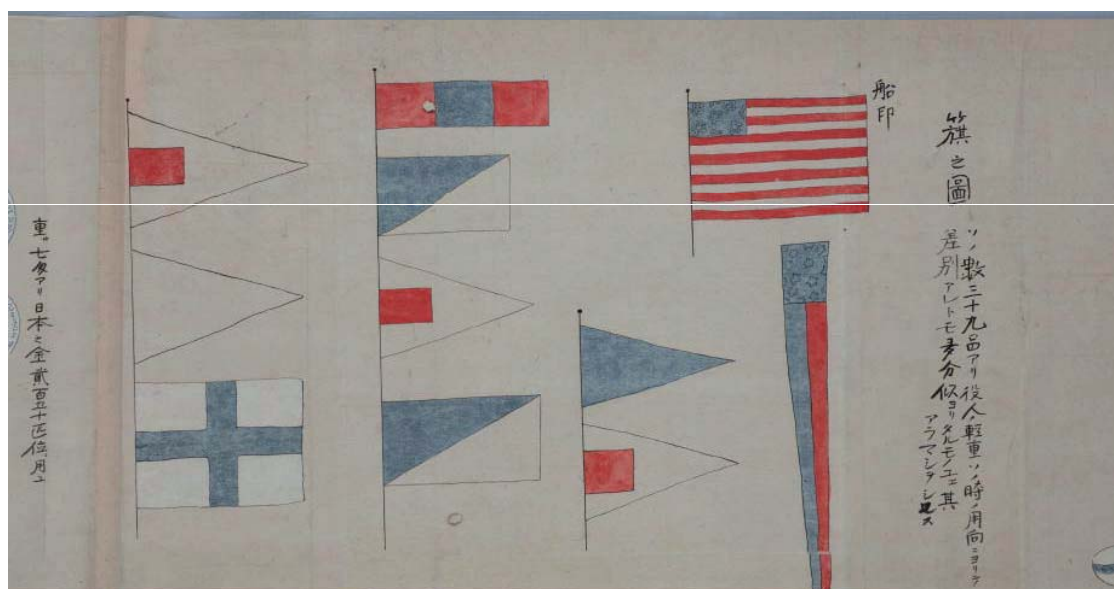
⑤



②



③



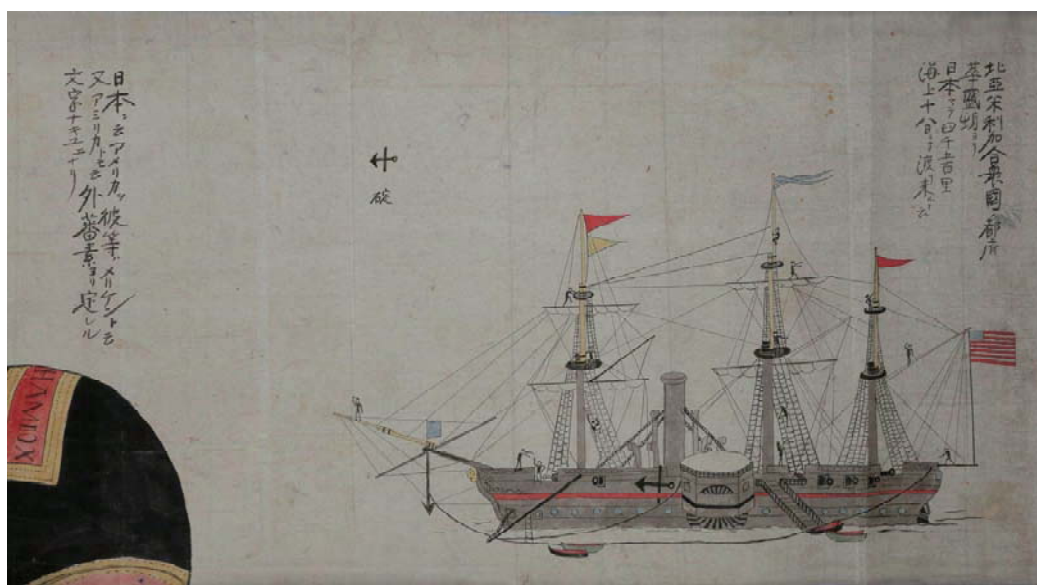
野進学芸員には、特に記して感謝申し上げます。

（福井市立郷土歴史博物館学芸員）

①

図版

表紙（部分）



図⑥
船中ニ在て市街を
遠眼鏡にて見る体
図の如く臂かけのある
腰掛ハ大将分計り用ゆ

嘉永七年
秋八月
文嶺写意
(印)「竹侶」

図⑦
広東人ト米利堅人ト
途中談話ノ体

広東人
米利堅
大将
同下司

2 1 註
久保泰編『松前藩家臣名簿』(久保泰、二〇二一年)。
故林昇太郎氏遺作論集刊行会編『アイヌ絵とその周辺―林昇太郎
美術史論集―』(故林昇太郎氏遺作論集刊行会、二〇一〇年)
一六九―一八一頁。

- 3 武田喜八郎「北海道の松前に渡った山形の郷土画家「早坂文嶺」
について(二)」(『山形郷土史研究協議会研究資料集』一九、
一九九七年)。
- 4 前掲註2、一五八頁。
- 5 新明英仁『「アイヌ風俗画」の研究』(中西出版、二〇一〇年)
一七三頁。
- 6 前掲註5、一九〇頁。
- 7 山形周文『箱館八景扇面図考』(キャンパス・コンソーシアム函
館、二〇一〇年)二六頁。
- 8 『函館市史 通説編』一(函館市、一九八〇年)五五八―五六一
頁。
- 9 なお、「ペリー来航絵巻」(市立函館博物館蔵)では、アメリカ国
旗を含め計三十種の旗が収録されている。
- 10 函館郷土文化会編『亜墨利加一条写』(函館郷土文化会、一九五三
年)。
- 11 洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』(雄松堂書店、一九七〇年)
三一一頁。
- 12 「亜墨利加船函港碇泊中松前勘解由殿御用記写」(北海道大学附
属図書館北方資料室蔵、請求記号…旧記〇〇〇六)
- 13 前掲註11『ペリー日本遠征随行記』三二八頁。
- 14 羅森については、王曉秋「函館へはじめて来た中国人羅森とその
著書『日本日記』について」(函館市史編さん室『地域史研究は
こだて』五、一九八七年)を参照されたい。

付記

最後に、「米人渡来之図」の紹介を快くご許可くださった
現所有者様、ならびに早坂文嶺の落款や参考文献について巨
細にわたりご教示とご提供をいただいた市立函館博物館の奥

図②
日本ニ云アメリカヲ彼等ハメリケント云、
又アメリカトモ云、外蕃素ヨリ定レル
文字ナキユエナリ

人心ノ同シカラザルハ其面ノ如シ、
然レトモ一万里外天ノ稟生、
人相ノ異ナル天ノ度数ノ如シ、
今図セシヲ以テアラマシヲ察シ玉エ、
毛髪ノ色三ツニ（黄赤黒）ワカル、瞳子
瑠璃ノ如ク、鼻高クシテ、身ノ長モ
六尺ニアマル、応対ハ甚静ニシテ
温和ナリ、服ハ肩ト臂トニ金系（糸カ）ニテ
縫アリ、二ツハ上宦、一ツアルハ下宦ナリ。

搔ハ陶器ニテ、
甚タ麤ナルモノナリ

図③
簾之図

ソノ数三十九品アリ、役人ノ軽重、ソノ時ノ用向ニヨリテ
差別アレトモ、多分似ヨリタルモノユエ、其アラマシヲシ
ルス

船印

図④

米 利 堅 通 用 銀 錢 之 図

重サ七匁アリ、日本之金貳百五十四位ニ用ユ

日本ノ四百銅位 同百五十銅位

錢面ノ章上ニ類ス

重サ三匁五分アリ

図⑤

首領 反屢黎（ペルリ） 歳五十四

副漏乎春豆（フローステ） 歳三十七

禹隣也霧斯（ウリヤンス） 歳四十一

絆愛里企主（パエリキス） 歳四十

譜天武希鷗（ホテンケム） 歳十九

右五人上陸シ箱館某之宅ニテ

応対シ休息ノ図

但腰掛ハ此方ヨリ出ス

図⑦「広東人ト米利堅人ト途中談話ノ体」では、ペリー艦隊に同乗した広東人や、艦隊士官の服装に注目して描いている。ペリー艦隊に同乗した広東出身の人物としては、英語と日本語に通じていた通訳羅森が著名であろう⁽¹⁴⁾。右手に杖を持つ艦隊士官らしき人物が、右手に扇を持つ「広東人」へ親しげに話しかけているかのような描写を見る限り、図⑦右側の「広東人」は艦隊士官たちと意思疎通を取ることでできる羅森本人を描いている可能性が高いのではないか。

図⑧は、アメリカ国旗らしき旗を先頭に、着剣した小銃や旗指物を掲げた兵士に護衛され、上官とおぼしき士官が行進する様を描いている。この行列には「広東人」とみられる人々も参加しており、アメリカと清の要素が混在した珍しい行列図となっている。函館博物館が所蔵する「ペリー来航絵巻」には、松前藩士たちに案内されて箱館市中を見物するペリー艦隊一行の姿と、通訳らしき弁髪の清国人の姿が描かれているが、本図のように護衛の兵士や旗指物は描かれていない。それを踏まえると、本図は交渉などの公式行事に臨むため箱館に上陸したペリー艦隊の人々の様子を描いたものと考えられよう。

おわりに

以上、雑駁ながら本図の構成を紹介し、その特徴や背景を考察した。ペリー艦隊の箱館上陸を描いた絵画資料は、前述した小嶋又次郎「亜墨利加一条写」や、作者不明の「ペリー来航絵巻」などに限られている。そのような資料状況の中、制作年代がある程度明確で、職業絵師が描いたものと分かる本作が確認されたことは、早坂文嶺の研究はさることながら、ペリー来航の図像研究にも新たな知見を加える可能性を秘め

ており、意義深い発見であるといえよう。

最後に、本作がなぜ福井県で発見されたのか、その理由については所有者側で伝来の過程が失伝しており、不明確なままであった。ただし、文嶺が元治元年（一八六四）九月二日に松前町の町年寄に上京を申請し、慶応元年（一八六五）三月二十七日に箱館へ帰着しているが、その際の帰路では越前国敦賀に立ち寄っている。この点で本作が福井県で発見された理由とすることはできないが、文嶺の行動履歴に越前の地が確認できることを指摘し、筆を擱きたい。

詞書翻刻

（凡例）

- ・旧字体・異体字・略字は原則として新字体・正字に改め、適宜読点を付した。
- ・清濁・濁り仮名については、原文の通りとした。
- ・改行は可能な限り原文の通りとしたが、レイアウトの都合によりやむを得ず改行している場合がある。
- ・図①～図⑦の各番号は筆者が付した。
- ・筆者による註釈は（ ）で示した。

図①

北亜米利加合衆国ノ都府
華盛頓ヨリ
日本マテ四千五百里、
海上十八日ニテ渡リ来ルト云

碇

旗四種の計五種が描かれている。文嶺は三十九種の旗があったと計算しているが、役人の軽重や用向きの種類によって旗を使い分けるも内容には大差ないと判断し、旗の紹介はあらずに留めるとしている⁽⁹⁾。

④「米利堅通用銀錢之図」は、ペリー艦隊の乗員たちが箱館に上陸した際に市中で使用した錢貨を模写した図である。同じくペリー艦隊の箱館来航に遭遇した箱館の町名主小嶋又次郎による記録「亜墨利加一条写」⁽¹⁰⁾には、ペリー艦隊の乗員が使用したと思われるハレアル銀貨（いわゆる洋銀、メキシコドル）などの拓本が収録されているが、本図はその拓本と類似しており、実際の貨幣を模写したものだろう。

⑤は、箱館に上陸したペリーら五人の姿を描いたものと思われる。詞書には、「右五人上陸シ、箱館某之宅ニテ応対シ休息ノ図 但腰掛ハ此方ヨリ出ス」と記されているように、休息する姿として描かれている。この内、「首領 反屢黎（ペルリ）」は艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリーを、「禹隣也霧斯（ウリヤンス）」は漢文通訳のサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズを指していると思われるが、「副漏乎春豆（フローステ）」・「絆愛里企主（パエリキス）」・「譜天武希鷗（ホテンケム）」は、残念ながら本稿掲載までに特定するに至らなかった。今後の研究の進展に期待したい。なお、図⑤詞書の末尾にある「箱館某之宅」とは、ペリー艦隊との応接所として使われた山田屋寿兵衛宅のことを指しているよう。艦隊の漢文通訳を担ったウィリアムズの著作『ペリー日本遠征随行記』の一八五四年五月十八日（嘉永七年四月二十二日）条には、ウィリアムズらが上陸した後は応接所へ案内され、屋敷内に入ると松前藩の役人たちが「緋の毛氈を被せた四角なものに着席を勧め、お茶や煙草などを出して接待し

た」⁽¹¹⁾と記しているが、これは図⑤で「副漏乎春豆（フローステ）」以下四人が座っている腰掛の描写と符合する。ペリー本人が応接所に来訪したのは、ペリー艦隊の応接にあつた松前藩家老松前勘解由が記した御用日記の写し⁽¹²⁾によると、以下の日時と人員であつたらしい。

- ・ 四月二十六日「昼四つ半時過、約定之通り提督始異人共上陸候ニ付、手配之通取計候座敷江相通し候」
- ・ 四月二十七日「昼九つ時過、提督ヘルリ并ヘンテ・ウリヤムス其外異人共十五人応接所へ罷越」
- ・ 四月晦日「昼九つ時過、又々ウリヤムス・ヘルリ始重立候異人とも応接所へ罷越」
- ・ 五月五日「昼四つ時頃、提督ヘルリ并ヘンテ・ウリヤムス・ホルteman・ハイ子・ラシン応接所へ罷越」

図⑤の「首領 反屢黎（ペルリ）」がペリー本人とするならば、本図は右のうしろの時点の場面を描いたものと推察できよう。

図⑥「船中ニ在て市街を遠眼鏡にて見る体」は、椅子に腰かけて遠眼鏡（望遠鏡）をのぞき込むペリー艦隊の士官の様子を描いている。ウィリアムズの『ペリー日本遠征随行記』には、ウィリアムズ本人が艦上から「一番高い山で三千五百フィート」はある山（函館山のことか）の山頂を望遠鏡で観察したことを記しており⁽¹³⁾、艦上から望遠鏡を用いて箱館内外の情景をたがひ観察していたのだろう。図⑥は、そのような場面を活写したものと理解できると思われる。

差し支えないと判断した。本作を以下の全八項目に分類し、図に表題が併記されている場合はその名前を採用し、題が併記されていない図は筆者が仮題を付し、本作中の題と区別するため（ ）で表記した。

- 図① (ポーハタン号の図)
- 図② (ペリー艦隊士官の図)
- 図③ 旗之図
- 図④ 米利堅通用銀錢之図
- 図⑤ (箱館某宅で休息するペリー一行の肖像)
- 図⑥ 船中ニ在て市街を遠眼鏡にて見る体
- 図⑦ 広東人ト米利堅人ト途中談話ノ体
- 図⑧ (ペリー艦隊士官行進の図)

なお、詞書は①から⑦までに付されている。本文の末尾に全図の写真図版と詞書全文の翻刻を掲載したので、参照されたい。本作の制作年だが、図⑥に「嘉永七年／秋八月／文嶺写意」と記されていることから、ペリー艦隊が箱館を退去してから三か月が経過した嘉永七年（一八五四）八月以降に成立したことは明白であろう。また、写真2で示したように「写」の字の真横に朱文長方印「竹侶」（縦一・四cm×横〇・八cm）が落款印として捺されている。同じく「竹侶」の印が捺されている「箱館八景」（函館市中央図書館蔵）は成立を安政四年（一八五七）五月とする指摘^②を踏まえると、三年という間隔は印の使用時期として矛盾がないように思える。

2 各図の解説と考察

次に、各図の解説と若干の考察を記したい。

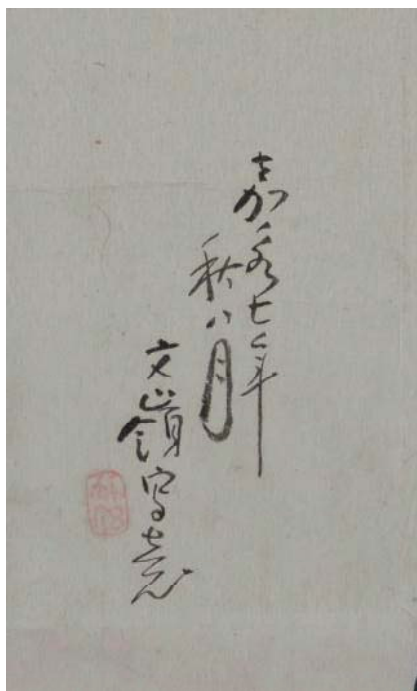
①は、三本の帆柱と推進用の外輪を備えた蒸気船を描いている。ペリー艦隊のうち、箱館に来航したのはマセドニアン、ヴァンダリア、サザンプトン（以上三隻は嘉永七年四月十五日に箱館来港）、ポーハタン（パウアタン）、ミシシッピー（以上二隻は同年四月二十一日に来港）の五隻だが、この内蒸気船はポーハタンとミシシッピーの二隻である^③。ポーハタンとミシシッピーはいずれも外輪式の蒸気船だが、蒸気機関に接続した煙突の位置がそれぞれ異なっており、ポーハタンは船首寄り、ミシシッピーは船尾寄りである。①を見る限り、煙突が船首側に描かれていることから、本図はポーハタンを描いたものといえるだろう。こうしたポーハタンの姿は、函館博物館が所蔵する「ペリー来航絵巻」でも同様の姿で描かれている。

②は、ペリー艦隊の士官を描いたと思われる人物図である。青い瞳に長い鼻、濃いあごひげと、異人らしさを強調した図柄となっている。②の詞書は、本作の中で最も長文であり、応接のため箱館に上陸した艦隊士官たちの身なりや動静にも踏み込んで記している。アイヌの人々を多く描いてきた文嶺をして、ペリー艦隊の士官たちは異質な存在と感ぜたらしく、「人相」の特徴を強調して描くことで、和人やアイヌの人々との「人心」の違いを表現しようとする文嶺の意図がうかがえる。その一方、士官らの応対は「甚静ニシテ温和ナリ」と記しており、実地の体験や情報に即したと思われる素直な感想が綴られているのは興味深い。なお、士官の喫煙具にも関心が向けられているが、「陶器ニテ甚タ麤ナルモノナリ」と記しており、文嶺の目には簡素なものと映ったようである。

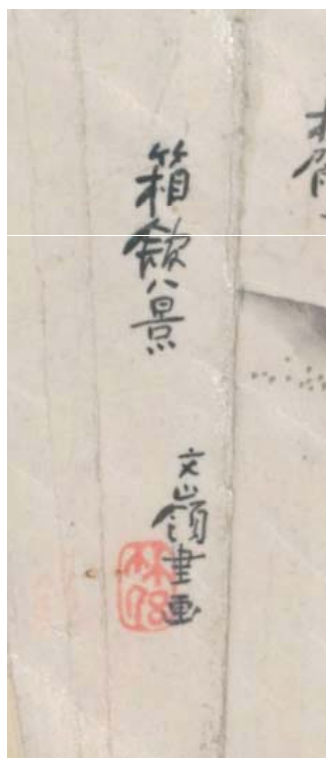
③「旗之図」は、ペリー艦隊が掲げたアメリカ国旗と信号

（函館八景）」に、「米人渡来之図」と同一にみえる落款印「竹侶」（写真2）が確認できるとの教示を得た。写真1・2を比較すると、この落款印は確かに同一の印刻といえよう。また、前述した林昇太郎氏は、文嶺の自筆文章を「その筆致

【写真1】「米人渡来之図」



【写真2】「箱館八景」（部分）



は独特のものがあり、今後、文嶺の作品をみきわめていくうえで判断材料のひとつとなるだろう」と指摘しているが⁽⁴⁾、これも写真1と写真2を比較すると、筆致としては同じ特徴を有するとみてよいのではないか。

また、「アイヌ風俗画」を観点として早坂文嶺の絵画表現を検討した新明英仁氏は、「さりりとした文人画風の作品で、細部を省いた軽妙な筆致には独特の個性がうかがえる」⁽⁵⁾、「動きのある明快な画題が選ばれており、やや戯画的で軽妙な人物表現が注目できる」⁽⁶⁾と評しているが、後掲する図⑤にはその特徴が強く表れているようにみえる。

以上の特徴から、筆者は本作「米人渡来之図」が早坂文嶺自筆の作品であると判断するに至った。林氏および武田氏による文嶺作品の整理を見る限りでは、「米人渡来之図」のように欧米の事物を題材とした作品は見受けられないことから、本作は文嶺の研究に新たな地平を切り開く可能性を秘めた作品と考えられる。そのためにも、本稿では、今後の研究の叩き台となることを期待し、「米人渡来之図」の基礎的な情報や構成、詞書の翻刻を可能な限り提示することに努めた。

1 本作の基礎情報と構成

本作は卷子形式、一巻、紙本着色、本紙の法量は三〇・四cm×四五・八・六cmである。表紙には「米人渡来之図」と墨書されている。なお、この筆跡は本紙に記されている早坂文嶺本人の筆跡とは異なるように見受けられるので、「米人渡来之図」は文嶺本人の命名ではない可能性もある。しかし、本作の内容は「米人渡来之図」とされるには矛盾がないように受け取れるので、筆者は「米人渡来之図」を表題とするには

《資料紹介》 早坂文嶺筆「米人渡来之図」について

山田 裕輝

はじめに

二〇二一年（令和三）十月、筆者が勤務する福井市立郷土歴史博物館（以下、当館と表記する）に、福井県内在住の個人の方（以下、所有者と表記する）から、ペリー来航時の姿を描いたとする絵巻物「米人渡来之図」の調査依頼が舞い込んだ。当該の絵巻物は所有者が先代から引き継いだもので、本作の内容と位置づけを明らかにしたいと思い立ち、幕末維新期の福井藩に関する資料を多数所蔵する当館へ問い合わせるに至った、とのことであった。ひとまず当該の資料を実見すると、冒頭には船尾にアメリカ国旗と思しき旗を掲げた外輪式の蒸気船が描かれ、軍服に身を包んだアメリカ海軍将校らしき軍人の肖像が続くなど、ペリー来航を題材とするにふさわしい内容と感じられた。さらに読み進めていくと、詞書に「箱館某之宅ニテ応対シ休息ノ図」と記されているのを発見した。当初、筆者は本作をペリー艦隊が浦賀に来航した際の様子を描いたものと思い込んでいたが、この詞書により日米和親条約締結後の嘉永七年（一八五四）四月十五日から五月八日にかけて、ペリー艦隊が箱館に来航・滞在した際の場面を描いたものではないかと考えるに至った。その考えを確信に近いものにさせたのが、本作の後半に記された「文嶺」の署名と「竹侶」の落款印である（写真1）。

幕末期の箱館にゆかりがあり、「文嶺」という号を持つ人物を絞り込んでいくと、アイヌ語のニシパに由来する「二司馬」という号を使い、アイヌ絵を数多く描いた絵師早坂文嶺（一七九七～一八六七）に行き着いた。文嶺は、出羽国山形城下の旅籠町に絵師宇野義川（義川斎定信）の子として生まれ、松前へ渡って松前家に絵師として禄仕した人物である^{〔1〕}。弘化三年（一八四六）から絵師としての活動が確認されており、北海道開拓記念館（現・北海道博物館）の林昇太郎氏の整理により、アイヌ絵、仏画や武者絵、絵馬など国内外に計三十三点が確認されている^{〔2〕}。また、文嶺の出身地である山形の絵画史を研究した武田喜八郎氏は、林氏の成果から触発されて山形市内外に伝わる文嶺の作品を調査し、花鳥画や俳句引札、摺物挿絵など、計七点を新たに紹介している^{〔3〕}。

以上のように、文嶺の画歴は非常に多彩なものであるが、本作「米人渡来之図」のように欧米人を描いた作例は確認されておらず、北海道・東北の絵画史に明るいわけではない筆者が、本作を文嶺の作品と即断することは躊躇われた。そこで、文嶺作「アイヌ狩猟図」を所蔵する市立函館博物館（以下、本文では函館博物館と略記する）を頼み、所有者の了解の下で本作の画像データを提供したところ、同館学芸員の奥野進氏より、函館市中央図書館が所蔵する文嶺作「箱館八景

市立函館博物館 研究紀要 第33号

編集・発行 市立函館博物館

040-0044 函館市青柳町17-1

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

ホームページ <http://hakohaku.com>

E-mail hakohaku@city.hakodate.hokkaido.jp

発行日 令和5(2023)年3月31日